
I S インフィニット・ストラトス 〈I Sは狙撃専門ですが？〉

サドンアタック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス へISは狙撃専門ですが？

【Nコード】

N5339X

【作者名】

サドンアタック

【あらすじ】

本屋に突っ込んだトラックにより死んだ新城司はふざけた女神によりIS世界に転生！

神様仕様によりチートのようなISを使いながら原作知識を頼りに学生生活をしていく

狙撃をモットーに新城司は原作を壊していく？

＊作者は文才がありません、時々見苦しい部分がありますがご了承ください

してください

ただいまアンケート募集中詳細は活動報告まで

転生・・・(前書き)

二次創作始めてしまった・・・

転生・・・

「フッフ・・・貴様の姿なんて丸見えだ」

茂みの中から長い銃口を出し、狙い撃つ

無風な上、距離は40ほど

当然、外さなかった弾は敵に当たり、渋々ヒット宣言をする

「さて、あと一人か」

そう呟いた瞬間・・・

ガサリ！

（後ろっ！？）

俺はうつ伏せから一気に仰向けになり、背後を見る

それに気づいたのか敵もこちらを見る

しかし、一步だけ自分が速かったらしい

振り向きと同時に狙った敵は引き金を引こうとした瞬間、弾が当たったのに気づいた

「ヒット♪」

「だあああ、ちくしょう！」

俺は勝利宣言をし、愛銃のL96Aを掲げた

「なんで当てれんだよ！」

至近距離のボルトアクション痛えんだよ！」

「んなもん、知るか！」

慣れれば当てれるわ！」

「それはお前だけだー！」

フハハ、負け犬の遠吠えめ

サバゲーのバトルロワイヤルルールで見事一位を勝ち取った俺は他の友人の元に行く

今日は土曜日で大学のサバゲー友達と一緒に大学付近の森でサバゲーを楽しんでいた

「んじゃ、全員一個ずつ奢りな」

他五人が悔しそうに財布を見つめる

俺は意気揚々に何を買ってもらうか悩む

「あー、そういや今日欲しい本の新刊出るんだ
それ頼むわ」

「デメエ、本だと！」

「しかも、新刊かよ！」

「ゼッテー、高いだろ！」

「鬼畜か！」

「他のもんは！？」「

など、見事に全員一致で不満が出るけど、確かにラノベの新刊は高いしな・・・

「なら、五人でその本でいいぞほら、さっさと本屋行こうぜ」

後ろで何やら嬉しそうに叫んでるが気にせず、俺は愛銃を解体し、コンパクトにスポーツバックに着替えと共に入れ、原付へ向かう

「ありがとうございましたー」

「よっしゃー、インフィニットストラトス、タダでゲット！」

俺はついついかがけてしまう

「んじゃ、昼飯にマクドナルドでも行くか」

その学友の声を合図に出口に向かう

しかし、一人が出口の向こうを凝視している

そして少しずつ後退る

「おいおい、マジかよ？」

みんな逃げろ、トラックが突っ込んでくるぞ！」

慌てて逃げるみんな

だが、一番出口付近にいた俺は後ろを振り向くだけで視界がブラッ
クアウトになった

おいおい、俺の人生これで終わりかよ

凄腕狙撃手目指してたんだぜ？

死ぬの早すぎだろ・・・

インフィニットストラトスもまだ読んでねえんだぞ！？

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

そこで俺の意識は完全に途切れた

「はい、こんにちわ」
私は神様、女神様よ」

「・・・はっ？」

意識が戻ったら目の前には白いワンピースを着た青髪ロングヘアの女が笑顔でそう言い放った

「・・・俺死んだん？」

「もちろん♪」

わかっていたが、それを笑顔で言われた俺、新城司はがつくり項垂れる

「ゴメン、ゴメン

つい手違いで君が死んじゃったんだよ

ホントは君がいた本屋の受付が死ぬ予定だったんだけどなぜか君が死んじゃったっだ

って、ことで生き返らせてあげるよ」

「マジで!？」

その言葉に俺は飛び付く
読めなかった本が読める！

俺は感激した

「あゝ、けど君がいた世界じゃないからね
生き返るの

正確には転生させるんだよ」

「ふざけんなゝ
期待させてなんだそれ！」

「ちょ・・・揺らしすぎ」

ブンブン

「まだあの本読んでないんだぞ！」

「うっ・・・気持ち・・・わる」

「この気持ち、責任取れえ！」

「吐く・・・吐く」

ブンブン肩を揺らされた女神の顔は真っ青になるにも関わらず振る
のやめない

そして結果・・・

好きな本の世界だ
興味深々だった

「私は女神様よ
君のミスを補わないといけないんだ
この世界にいかせてあげるさ
どうだい？」

「頼む、女神！」

そう答えた瞬間、女神を魔法のように指をパチンと鳴らす

すると周りの世界が一気に変わり、学校の教室らしき部屋になる

「ちよいと失礼」

女神がそう言って消える、するとそこにはインフィニットストラト
スの生織斑千冬がいた

「ふむ、こういう世界か」

女神が入ったのだろう
千冬がフムフムと頷く

「じゃあ、この世界で生きるにはISってのを使わないといけない
みたいだね
なら・・・ほいっ！」

と、女神が空間から何かを取りだし、司に投げる

受け取ったそれは、黒い銃の形をしたネックレスだった

「君が元々いた世界で使ってた銃をIS化したんだよ
なんか希望する機能を3つまでならなんでもつけれるよ

チート機能も問題なしさ!」

「マジっすか!?!」

「マジと書いて本気さ」

俺はうーんと悩む

(L96AをIS化しな・・・
やっぱりオンラインゲームの時の銃みたいにな・・・)

「一つ目!

無反動だけど威力が落ちないように!
他は・・・」

(確か、一夏や筈ってエネルギー兵器持ってるよな
)

「二つ目!

弾は実弾やエネルギー弾など弾は自分が想像した弾を!」

（最後はな・・・多分こんだけだと防御面が不足だし・・・あ、瞬時加速あるじゃん！

あれが結構使えれば・・・）

「武器は狙撃銃だけでいいからその代わりに瞬時加速の回数は無限大に！」

「狙撃銃だけって・・・いいのかい？
そんなことしなくても設定できるよ？」

不思議そうに首を傾げる女神だが俺は首を横に振る

「チート過ぎるってのも面白くないしな
これだけでも十分チートさ」

「そっか・・・
やっぱり君を転生させたのは正解だったね
いい暇潰しになりそうだ

じゃあ、設定はしたよ
ISの名前はリクルア
君の設定は世界で二番目に見つかった男のIS操縦者
周りの記憶も改竄済み
今から入学初のHRだからね

準備はいいかい？」

「おう、いいぞ」

女神が説明をしてる最中に司の服装はあのIS学園の白い制服になっていた

「ただ、君は面白いのが好きみたいだから織斑千冬と篠ノ之束の記憶は少ししか改竄してないからね」

「えっ？ ちょ……どういこと！？」

司はその発言にとっても面倒くさそうな展開になりそうな予感がし、立ち上がりながら声を挙げようとするが、女神は笑顔で手を振り・

「じゃあ、セカンド人生楽しんでね
またね」

呼びかける前に女神はスーと千冬から抜け、時間が動き出し始める

「はい、じゃあ次は新城君
お願いします」

「えっ……あ、ハイ」

（あんの女神め……
早速、織斑先生が変な目で見えてきてるぞ）

気づかれないように千冬を見たが彼女はポーカーフェイスだが自分を凝視してるのに気づく

（はぁ……まあこの学園生活を楽しむか）

「新城司です

趣味は読書

よろしく願います」

新城司の新しい人生は女子の黄色い叫び声により、スタートした

セシリアイベント開始（前書き）

セシリアの口調あってるかな？

セシリアイベント開始

一限目が終わり、今は休み時間

感想はめっちゃくちゃ暇だった

なぜかわかるIS知識に

なぜかあるIS学園の教科書

なぜか用意されてある筆記用具や財布など

なぜか机の横にあるスポーツバック

きつと中身は私服などだろう

女神仕様・・・そう思った司は納得した

ちなみに席だが真ん中の列に前から二番目だ

つまりISの主人公

織斑一夏の後ろである

休み時間になると早速彼から声を掛けられた

「新城司・・・で合ってるよな？」

「おう、織斑一夏だよな？」

同じ男子だ

よろしくな」

「ああ！」

男子一人にこの空間はきついよ
お前がいて助かった！

あと、俺は一夏でいいぜ！」

（おお、小説通りフレンドリーだな）

「俺も司でいいぜ！」

確かに男子一人はきついよな」

小説を見たとき司はハーレム天国だろ！と思ったが実際体験するとキツイ

二人だけでも常に視線を感じるのだ
一人だったら相当気まずいだろう・・・

「ちょっといいか？」

すると一人の女子が話かけてきた

（おっ、これは一夏の再会イベントか）

「うん？一夏に用か？」

「ああ、すまんが借りていくぞ」

「ああ、わかった」

箒に答えるなり、一夏の襟を持って外に行く

（小説と違って情けない連れて行かれ方だな・・・）

それが一限目の休み時間だった

二限目の容赦ない姉と情けない弟を見た後の休み時間

（確かここでセシリアイベントが・・・）

そう思いながら一夏と話してると・・・

「ちょっと、よろしくて？」

（ギター、セシリアイベントだ・・・）

などと思いながら視線を彼女に

座ってる俺たちを当然のように見下げる美人がいた

（なんつーか、日系イギリス人みたいだな・・・）

「訊いてます？お返事は？」

「ん？訊いてるけど、なんか用？」

「まあ、なんですの、そのお返事！」

わたくしに話かけられるだけでも光栄なので、それから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「・・・・・・・・・・」

セシリアのその態度に俺と一夏は言葉を失う

（小説ではそんなだったけど・・・めっちゃウゼエなコイツ）

「悪いな

俺、君が誰か知らないし」

一夏も少しばかりムカついているのか声のトーンが少し低い

「わたくしを知らない？」

このセシリア「オルコット、イギリスの代表候補生で入試主席」

俺がセシリアの続きを話す

やっぱコイツムカつくわ

「あら、少しは頭のわかる方がいるのね」

「なあ、司

代表候補生ってなんだ？」

「国の代表の生徒ってこと

まあ、俺たち男子がわかりやすく言うのだな」

俺はニンマリ笑いながらセシリアを指指す

ヤバイ、やっちまったぜ

「たかが国の代表なだけで自分が強いって思い込んでる女さほら、中学とかでよくいただろ
たいして強くないのに大口叩く馬鹿とか」

その言葉に一夏は笑みを浮かべる

「それは分かりやすいな」

「っ!!」

俺と一夏の笑顔にセシリアはフルフルと身体を振るわす
そこに火に油

俺はさらに言い放つ

「ありゃ？」

顔、真っ赤だよ？

保健室行ってくれば？」

そう言うところちょうど休み時間のチャイムが鳴る

「結構ですわ

新城司さん、あなたは絶対に認めませんわ
覚えておきなさい！」

「おう、忘れるかもしれんがな」

捨て台詞を放つ彼女を見ながら一夏は笑顔で俺の肩を叩く

「ハハハ、司

なんかすごくスッキリしたぜ！

最高だ！」

「ありがとう！」

さすが同じ男子

アレはムカつくもんな

そしてそのまま三限目が始まる

「再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

が、授業内容

まあ、アレだ

セシリア戦イベントだ

当然、ここは一夏で・・・

「私、新城君を推薦します！」

「私も！」

何！？

そこは一夏だろ！

「私は織斑君を！」

「なんだと！」

じゃあ、俺は司を推薦する！」

一夏あああ！

お前、セシリアイベントを折るつもりか！

「今のところ、新城が多いが他はいるか？」

するとその千冬の言葉に抗議するものが・・・

「納得がいきませんわ

代表者候補生でもない男がクラス代表者なんて認められませんわ！」

「らしいが、新城

なんか意見は？」

「面倒くさいのでセシリアを立候補します！」

「そんな理由認められんわ、馬鹿者」

バシンっ！

（ぬお〜）！

織斑先生の角アタック痛すぎだあ！
絶対あれ、鉄製だろ！）

「やはりそんな弱々しい者が代表者なんていい恥さらしですわ
やはり、この国の男子なんて技術も後進的なら頭も後進的な弱虫な
のですね！」

ブチン、カチン！

たぶんそれが正しい表現だろう

男子二人の表情が変わる

「イギリスだって大して自慢できる国じゃないだろ？
世界一マズイ料理で何年覇者だよ」

「おい、一夏

そこがきつと自慢できるところなんだぜ？

どうせ、アイツの料理もはや料理じゃないだろ

うわゝ、優等生とか言いながら家庭科とか赤点だったんじゃない？
恥ずかしすぎだわゝ」

ブチン

たぶんこちらも正しい表現だろう

「あ、あつ、あなた達、わたくしの祖国を侮辱しますの？」

「どっちが先に侮辱したんだか？」

「決闘ですわ！」

「ハンツ、いいぜ！」

泣き落としとかセコい真似すんなよ？」

「そんな真似こそしなくとも完膚なきまで叩いて奴隷にしますわよ！」

「それはこっちの台詞だ！」

開始五分でお前を墜としてやるよ」

するとそこで周りの女子が笑い出す

「新城君、面白い冗談はやめてよ」

「そうそう、ハンデ付けてもらったら？」

そう言われるが俺は――

「男に二言はない

そうだろ、司」

「あつたりまえだ」

そう言い放つとパンと手を叩く音が響く

「さて、話はまとまったようだな

来週の月曜日、第三アリーナで決闘を行う

後、織斑、お前も推薦されてるため参加決定だ
新城の後に決闘するからな
三人とも準備しておくように」

こうして、セシリアイベントは司がやることになった

主人公＋a紹介

しんじょうつかさ
新城司

20歳↓16歳（肉体的に）

大学二年生でサバゲーとラノベが趣味

真っ黒で男子の割に髪が肩まであるという長髪

顔はどちらかというと細め

テイルズオブヴェ○ペリアの主人公の髪が肩までしかない少年と言
えばイメージしやすい

身長は一夏と同じくらい

肉付き

サバゲーが好きだったためミリタリーマニア

プライドは少々高めだが実力差があると思う人間には忠誠的

悩みは男の割に声が高めということ

女神

青髪の女性

面白いことが好きで怠け者

新城海奈

女神がIS世界に顕現した際にこの人物として活動している
青髪から黒髪に変わり、腰まであるストレート
司の母親という設定であり、本人はノリノリである

司のIS

狙撃型ISリクルア

背中に大型二門、両足に小型二門ずつ、両肩に小型一門ずつにブー
スター

肩から肘までと太ももが露出し、脛から下、手、銅に装甲があり、
全体的に薄い装甲

しかし、ブースターを囲うように装甲が展開しており、少々羽根に
見えるのが特徴的

武器は大型の狙撃銃のみ

外見はまんまL96A

装甲の色は深緑で銃は黒

狙撃銃 リクレシア

外見は L96A

しかし、大型になっており右側に翼のようなシールドがついている

弾薬はマガジンを変えることにより、変更でき、弾数制限はない

ゆっくり寝るために(前書き)

主人公は面倒くさがりです

ゆっくり寝るために

(・・・1026室

ここで合ってるよな)

俺は渡された部屋の鍵を回す

ガチャリ

開いたのを確認し、部屋に入る

「改めて見たが・・・
ここはホテルか？」

玄関を開け、すぐ左手側に洗面所と風呂場
その横にトイレ

大きめの部屋に入ったらすぐ左手側に二つのベッドとその脇にある
クローゼット

などと、

そこらのビジネスホテルより遥かにいい部屋だ

「うわー、布団がフワフワ」

柔らかい布団の感触を楽しみ、睡魔の誘いに乗ってしまいたくなる

しかし・・・

『ズドン！』

壁の向こうから大きな音が伝わってくる

「・・・・・・なんで物が落ちたような音じゃないんだ？」

明らかにこう何か壊れたような音だ

そして再び同じ音が・・・

「うるさいな・・・」

文句言おう

そう決め、ドアを開け、隣を見れば・・・

「一夏、お前の部屋だったか」

そこにはドアを背にして座りこんでいる一夏がいた

「た、助けてくれ

箒に殺されそうなんだ」

部屋を指差しながら必死な形相の一夏の慌てよう・・・

（何イベントだっけかな・・・）

小説第一巻・・・思い出したのは箒のシャワールームの挿絵・・・

「あゝ、なるほど・・・

一夏のラッキースケベめ

箒のあの姿見たんだろ」

「なっ、何で！」

思い出したのだろう、顔を赤くして慌てふためく

しかし、このままでは再びうるさくなるので・・・

「篠ノ之、隣の新城だ
開けてくれ、話がしたい」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

たぶん服を着てるのだろう
中が騒がしい

そんなこんなで待ってるうちにギャラリーの姿がチラホラと・・・

（って・・・マズイ、マズイ

周りの女子、無防備すぎる・・・）

確かにここは普通は女子高なのだろうが、例外で男子もいるのだ

下着姿は、理性的にマズイ・・・

するとちょうどドアが開く

一夏は・・・入れてやるか

「で、話とはなんだ？」

制服姿の箒が腕を組みながら聞く

しかし改めて見るが、やはり美人

髪をおろして、巫女さん姿になればきっと大和撫子になるだろう

そして、そんな箒がこの鈍感唐変木を好んでるのは小説で知ってる
わけで・・・

「一夏、お前は篠ノ之と平穏にルームメイトになりたいか？」

「ん？」

そりゃあ、幼なじみだしな」

「そうか、なら俺が手助けしてやる
だから、篠ノ之と話がしたいが、お前に聞かれたくないことがある
んだ

ここは俺を信じて、シャワールームで待っていてくれ」

「おう、わかった」

ふう、単純で助かった

「一夏に聞かれたくないこととはなんだ？」 ちょっと警戒してる体勢・・・

そりゃ、まだ親しくない男子だしな

けど、まあ、一応味方だぞ？

だって、公式なカップリングは箒だし

一夏の機体的にも箒と組むべきだしな・・・

一夏とシャルルも捨てがたいが・・・

まあ、それは置いて・・・

「単刀直入に聞く

篠ノ之、一夏のこと好きだろ？

って、うわっ！」

木刀一閃

間一髪で避けた・・・

女神仕様で反応速度上がってるのか？

「それをど、どこで聞いた！」

顔真っ赤で睨んでくる

ヤバイ、ここで死亡フラグはヤバイ

「お、落ち着け！」

考えてみる、こんな女子高に例外で俺と一夏だ

少なくとも何回か女子を意識する場面に出会う可能性がある上に、男に飢えてる女子に餌二人が来たんだ！

一夏にアタックする女子は多いはずだ

いくら唐変木な鈍感一夏でも墜ちるのは時間の問題だろう？」

「む・・確かに」

木刀を引き、悩み込む筈

これで怪我をする心配はないな

後は平穩のために・・・

「だからな、同居という最大のチャンスがある今のうちに一夏に優しく接して、一夏の心を掴み、一歩大きくリードするんだ

アイツは意外にも天然タラシだ

敵は多くなるはずだぞ」

小説でもメインヒロインの箒より、シャルルやラウラのほうが倍近い人気という結果だったしな・・・

「そうだな・・・

今のチャンスを生かす」

もう一押し・・・

「はつきり言って、唐変木な鈍感一夏はC近くじゃないと気づかないはずだ

ハッキリした意思表示や好印象を与えるアピールをだ！

例えば弁当を作ってやったり、

今日だったらISの基本を一週間で覚えるように協力したりしたらどうだ？

照れ隠しも暴力を振るったりしたら、アイツのことだ

変に勘違いするに決まってる

いいか？

行動は積極的かつ慎重にだ！

男は優しい女に弱いもんだぜ？」

そこまで言うとな箒はコクコクと頷く

「あ、ああ！

そうだな新城！、いや司！
礼を言う！ありがとう！

これからは箒と呼んでくれ！」

ガッチリ握手を交わす

これなら隣も静かになるだろう
ゆっくり寝れる

「一夏、もういいぞ」

「ん？わかった」

一夏が出てくるなり、箒が顔を赤くしながら一夏に何か言ってるよ
うだ

「さて、邪魔者は消えるかね」

音を立てず、そっと部屋を出る

そして、その夜

司は邪魔されずにゆっくり寝れた

小説仕様で一週間（前書き）

文字通り仕様で一週間経たせました

小説仕様で一週間

翌日、なんだかんだで授業を受け、四限が終わった頃・・・

「安心しましたわ、まさか訓練機で対戦しようと思っていたいなかったでしょうけど」

背後でそう言うセシリア

先ほどの授業では確かに男子ということで専用機を持ってるということ話を話したが・・・

「はいはい、わざわざ自分も専用機持ってますというご自慢しに来て、お疲れ様です」

ペコリと頭を下げる

そんなセリフにセシリアは・・・

「バカにしていますの？」

「おう、ムカつく奴をバカにして何が悪い？」

一発発の雰囲気を出すが今の俺は冷静であって・・・

「一夏、箒

食堂行こうぜ？

早く行かないと席がなくなっちゃう」

「そうだな、時間の無駄だしな」

ギツと睨みながら席を立つ

うわゝ、美人って怒ると怖いな・・・

そう思いながら、何か言ってるセシリアを無視し、食堂に行く

「どうか、空いてるところは・・・」

一夏がキョロキョロ見渡す

「ほれ、あそこが空いてるぞ」

指差した先にはちょうど三人分の席が

一夏を挟んで並んで座る

「どうだ？一夏

ISの基本、順調か？」

「ああ、箒が助けてくれてるからな」

「当たり前だ、幼なじみが困ってるんだ
それくらい助けてやるさ」

おっ、結構素直になってるな

すると後ろから声をかけられた

「君が噂の代表候補生と勝負する子？」

「はい、正確には俺と司ですけど・・・」

一夏がそう答えるうちにリボンの色を見る
赤だから三年生・・・

ああ、あの食堂シーンか

「けど君、素人だよな

先輩がいろいろ教えてあげようか？」

そう言われた一夏は嬉しそうに笑顔を浮かべ、答えようとするが・
・

箸と目が合う

「あ、大丈夫ですよ

俺と一夏、あの有名な篠ノ之博士の妹さんに教わってるんで」

「そうです、私が教えてるのでご心配なく」

そう言われた先輩は箸を一瞥したあと苦笑しながら逃げるように去
っていく

「なわけ、今日から訓練だからな」

こうして訓練が始まるわけでした・・・

「それでなんでI S訓練が剣道なんだ？」

箒に打ち負け、更に厳しい箒の訓練の休憩時間
竹刀を持つ一夏に俺はため息をつく

いや、初心者だから仕方ないんだろうな

俺も知識とかなかったらそうなるわけだし・・・

「いいか、一夏

I Sの基本的な動きは人間の動きだ
だからな、剣道で剣を鍛えれば鍛えた分だけその動きが反映される
そういうことだ」

「なるほど、けど司は剣道やらなくていいのかよ」

不満の眼差しを向けてくるが俺は自分のI Sを掲げながら答える

「俺のI Sは射撃専門だからな

それに一夏のI SはどんなI Sはわからないんだ

剣道やっつけ」

「そういうことだ

さあ、その緩みきった一夏の技術を鍛え直すのを再開させるぞ」

「ああ、わかったよ」

再び竹刀を打ち合う二人を見た俺はちよつと離れ、ISを展開させてみる

女神からもらったきり一度も展開してないのだ

（確か・・・念じるようにだよな
来い、リクルア！）

黒い銃型のネックレスが輝いた瞬間、俺は深緑の装甲に包まれた
両足には小型のブースターがついている

そして両手には右側に翼のようなシールドがついたL96Aの姿が・
・

（ヤッベ・・・めっちゃカッコイ）

やはり男たるもの銃とかには憧れるものだ

すると急にモニターが表れ始める

フォーマットフィッティング
ファースト・シフト
『初期化最適化終了、一次移行』

そう画面に映ると更に装甲が変わる

背中に大型二門と両肩に一門ずつブースターが増える

「ウツハ、こりゃ一撃離脱の高速戦闘かもな」

試しに50メートル先まで一気に移動するイメージをする
するとブースターが点火され、凄まじい速さで移動する

景色的に一瞬の移動だった

そして試し打ち

100メートル先の壁を狙い撃ち、ズドン！と一際大きな音が響く
更に素早くコッキングすると二発目

一発目と同じ位置に当たる

無反動、最高！

「そういや、イメージで弾変えられるんだっけ」

そう呟くとモニターに弾の変更の仕方が現れる

「フム、マガジンを変えればいいのか」

マガジンを変えながらイメージするのはガン〇ムで出てきた緑色の
ビーム

そして再び狙えば見事に緑色のビームが放たれた

「おお！マジでビームだ

こりゃ、いろいろ試せるな・・・」

そしているろ試した結果・・・

「・・・ここじゃ試せないのばっかだな」

なんでもイメージ通りにできるのがわかり、核爆弾式の弾を想像した時は正直危なかった

区切りがよくなったところで一夏のところに戻れば・・・

「どうした、一夏」

声をかけてみるが返事はない

そこで少し息が上がってる筈に話しかけて見れば・・・

「体力も落ちてたらしい
これからは体力面の訓練もだな」

なるほどな・・・

こりゃ、大変そうだ

などと思いつながらも一夏を背負ってやりアリーナを出た

こうしてなんだかんで一週間が立ち、決闘の日になったのだ

セシリア戦（前書き）

瞬時加速は・・・女神仕様です

セシリア戦

決闘当日の日・・・

「へえ、これが白式か」

一夏の専用機が届き、改めて見るがやはり印象は『白』

装甲やらなにやら白い装甲だった

「新城、容赦なくやって来い

男が大口叩いたんだ

天狗になつてゐる小娘の鼻をへし折って来てやれ」

ありや・・・

小説ではなかった千冬さんの言葉

やっぱり日本人として頭にきてたんかな？

「わかりました

じゃあ、一夏

先に行つてゐるぜ」

「ああ、頑張れよ」

「おう！」

そしてISを展開し、ブースターに点火する

飛び立った先には青がいた

「ずいぶん遅かったですわね

尻尾を巻いて逃げたかと思いましたわ」

「すいませんでしたー」

「棒読みになってますわよ・・・」

「そりゃあ、謝る気なんて更々ないからな
少しくらい待てないのかよ

イギリスは短気な人ばっかだな」

クククツと笑うと怒り心頭ばかり銃口を向ける

「その言葉、必ず後悔させてあげますわ！」

「できるんならやってみろ！」

俺も銃口をセシリアに向ける

そしてセシリアの武器

67口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』からレーザー
ーが打たれる

これが開始の合図だった

俺は間一髪右肩を掠める程度で避ける

そこからはまさに雨

容赦なく降りかかるレーザーをブースター吹かしながらできるだけ避ける

もはや、銃口を見ながら避けるのではなく勘を頼りに動いていた

やはりISの実戦はチートな能力を持っても素人なのだ

すると、セシリアは更に攻撃範囲を広げる

自立機動兵器

特殊レーザーがついてる特殊武器、『ブルー・ティアーズ』

（うわ、実際見るとマジで種ガン〇ムの自由天使のドラグーンじゃねえか！）

などと思いつつも最初から4000もあるチート級なシールドエネルギーがもうすぐ2500を切ろうとしていた
まだまだ余裕はあるが・・・

（さて、そろそろ反撃に出るかね）

そう決めるなり、機体を制御し、セシリアと向き合う

「オルコット！

それがお前の特殊武器か！」

「ええ、そうですね」

このティアーズとわたくしが奏でる円舞曲で堕ちるのも時間の問題ですわね！」

「そうだな、5分まであと2分を切ったし、そろそろ終わらせようか！」

そう叫ぶのと同時に俺は期待を反転し、レーザーの雨の中ブースターを最大点火

瞬時加速『イグニッション・ブースター』でセシリアの後方に移動する

「後ろっ!？」

ISのハイパーセンサーによって周囲360°。全て見えているように脳内に伝えられる

だが、やはり人間は直接目視で見えない部分は一テンポ遅くなるわけで・・・

「ファイア！」

掛け声と共に『ズガンッ!』という銃声がした後、セシリアの右肩に銃弾が当たる

そして装甲が吹き飛ぶ

(さすが女神仕様

威力、実弾でもパネェっす)

「まだまだ!」

マガジンを変え、再び瞬時加速

セシリアの真上に移動

今度は少々早めに展開されるが・・・

「そのまま巻き込まれちまえ!」

撃った弾丸がセシリアの目の前のティアーズに当たり、盾代わりになるが・・・その瞬間セシリア周辺に黒い小さな固まりが三つほど散らばると爆発した!

「モンハンの拡散弾、使えるわ!」

セシリアが爆発により身動きが取れてないうちに再びマガジンを変え、撃つ

狙いは残り三機のティアーズ

『ズガン、カチン

ズガン、カチン

ズガン、カチン』

ボルトアクションライフル特有のコッキングレバーを引きながら、三発の銃弾を素早く発射させ、弾丸はティアーズに突き刺さっていく

その瞬間、ティアーズは爆発に巻き込まれ、木っ端微塵になった

「これで守りはなくなっただな！
とどめだ！」

「くっ！」

俺はマガジンを変えながら一気に肉薄する

セシリアはダメ出しでスターライトを撃つが当たらない

そして俺が目の前に来た瞬間

「掛かりましたわね！」

ティアーズは6機ありましてよ！」

セシリアからミサイル型のティアーズが発射された！

普通は避けれないが・・・小説で知っている司はわかっていたため・
・

「最後のは残念だったな、
けど、まあ・・・チェックメイト」

セシリアが笑みを浮かべたのと同時に瞬時加速で下に避け、背後に
回って照準を合わせていた

最後は威力最大のビーム弾

スコープで見える背中を狙い、引き金を引く

弾丸が当たり、ティアーズのシールドエネルギーがエンプティ―（

燃料切れ」と表示される

5分10秒・・・

少し過ぎたがそれでもほぼ5分だった

「あゝ、今日は疲れた」

初の実戦

サバゲーをやったからそれなりに動けたがそれでも次元が違う戦い
よくあそこまで動けたものだ

「にしても、弾丸選択自由と瞬時加速のオンパレード・・・
これだけでも強すぎだろ

更にシールドエネルギーは多めで弾丸は対IS装備を吹き飛ばす威力

まあ、五発撃ったらマガジン変えるつつう隙ができるからそれだな、
改良点は」

今日の復習をしながら夜の散歩をしてるとつい人とぶつかってしま

った

「キャッ！」

「あ、すみません！」

お怪我はありま・・オルコットかよ」

「あなたですか！」

それっきり互いに沈黙

気まずい雰囲気が漂う

（なんか話題振ろう！

なんか気まずい！

話題、話題、話題！

脳内会議、話題は！）

その瞬間、司の脳内で様々な格好をしたミニチュア司が集まる

「緊急課題！

現在の話題を提案せよ！」

黒いスーツの司が司会をするらしく・・・

「黙って逃げる！」

「却下！」

丸眼鏡の学生服司の意見は却下

「殴って気絶させる！」

「採用できるか！」

不良君の司の意見は却下

「口説く！」

「口説いてどうする！？」

チャラ男司の意見は却下

「謝る！」

「やっとまともな意見が！」

ジャージ姿の司に司会は考える

しかし、そこでベルがなり強制閉会

この間0.5秒・・・

とりあえず司は・・・

「その、アレだ

すまん、頭に血昇って言い過ぎた」

キョトン

そんな反応だ

セシリアはパチクリと目を見開き、驚いた表情でこちらを見る

「なんつーか、天狗になってるの見たらムカついちゃってだな・・・
その戦闘とか女相手にやり過ぎた・・・」

今思えば容赦なかっただろう

まともな反撃すら与えず、爆発、爆発、爆発（威力はチート仕様）
でシールドエネルギー奪ったところでチート仕様のビーム弾だ

自分でも鬼畜すぎたと反省していた

するとセシリアはクスクスと笑っていた

「昼間の態度とは大違いですわね

別にそんなに怒ってませんわ

確かにあなたの言う通り、自分の力を過信してたかもしれませんがわ
ね」

セシリアは夜空を見ながら呟く

「わたくしの話を聞いてもらえるかしら？」

わたくしの両親は今の世間でいう女尊男卑でしたわ
物心がついたときくらいから、いつも母の機嫌を伺う弱々しい父を
見てきたわたくしは常に女性が強い
そう思って育ってきました

そしてそんな両親があっけなく他界
親族やらが遺産を巡っていい争う醜い抗争
だからわたくしはそんな連中から両親が残した物を守ろうと代表候
補生という地位まで登りつめました
そして男性の素人ＩＳ操縦者は当然弱いと決めつけてましたわ
自分と相手との器量を見極めきれずに・・・

だから謝るのはわたくしのほうですわ」

セシリアは言い終えるとペコリと頭を下げる

そんなセシリアを見た俺はなぜか頭を撫でてしまった

「別に謝らなくていいさ

たぶんオルコットはさ
プライドが高いんだよ

それだけ努力して来たんだからさ

俺もプライドがあってそれで決闘になったんだ

おあいこさ

それに自分で間違いに気づいたんだ

お前は強くなるさ」

「新城さん・・・」

「明日は一夏とやるんだろ？
今日の反省生かして全力でやってやれ」

「ええ、必ず！」

そしていつか必ず新城さんを負かせてみせますわ！」

「あはは、楽しみにしてるわ

じゃあ、おやすみ」

気分も吹っ切れたし、今日は気持ちよく寝れそうだ

セシリアに背を向けて部屋に歩き出す

きっと彼女は更に成長するだろう
楽しみだというのは本音だった

「って、あれ・・・セシリア矯正って一夏の役じゃん・・・
もしやフラグブレイク？

いやいや。。物語ではそうであって別にあれで好かれるわけないし
な・・・

まあ、さっきの雰囲気以最悪から友人としていいやつだな」

などとセシリアの印象が格上げされたのであった

セシリアとのフラグは俺じゃない・・・
(前書き)

少々あいまいだけどがんばって修正・・・
これ以上は思いつかん・・・

セシリアとのフラグは俺じゃない・・・

説明が面倒くさいので結果を言おう

セシリアVS一夏はセシリアが勝利

昨日とは違い、慎重な戦いからレーザーによってシールドエネルギーを削られ、零落百夜も数秒しか展開できずに終わってしまった

けど、やはり一夏の近接武器だけでセシリアと30分近くも戦い続け、白熱したい試合だった

そしてクラス代表だが、

一夏に勝ったセシリアより強いのが自分なため

結果、代表は自分になってしまったのだ

そして現在・・・

ワイワイと食堂でパーティーをやっている
代表おめでとうパーティーだ

周りに女子ばかり

そして定番だろう

一夏の周りには女子がワイワイ

セシリア戦では負けはしたものの善戦はした一夏の印象は女子の中では評価が上がったらしい

しかし、基本的に自分が中心になって賑やかになるのは苦手であってそして今は自分が中心

心が落ち着かず、なんというか疲れる

つつい、ため息が漏れてしまうのだ

「司、先ほどからため息ばかりだな」

「箒か・・・」

緑茶の入った紙コップを渡され、箒は自分の隣に座る

「アイツのところに行かなくていいのか？」

「興が乗らん」

その声は低く、一夏を睨んでいる

当の本人は女子に囲まれ、戸惑っていた

「けど、アイツは筋金入りの鈍感だ
さほど心配しなくても大丈夫だろ」

「しかし・・・」

籌が口ごもるが、その先の言葉を遮るかのように二人の前に一人の
女子生徒が現れる

「はいはい、新聞部の副部長の黛薫子です
はい、これ名刺

二年生よ

話題の新生、織斑一夏君と新城司君に特別インタビューに来まし
た」

オーと周りが盛り上がる

そして自分の名前が入っていた一夏がこちらに来た

「さて、まずはー

クラス代表になった新城君に聞こうかな
なんか一言ある？」

この聞き方になぜか、小説にあったこの部分を思いつつのは幸いだ
と思う

「（確か、普通のコメントだと、ねつ造されるんだよな）狙撃や射
撃をメインとする戦い方ですが、普通の狙撃手と思わないでくださ
い」

一応、正論

だって機体がチート仕様だもん

「おー、言うねー

こりゃあ、大物かな？」

さて、惜しくも代表になれなかった織斑先生の弟としても有名な一夏君にもコメント聞こうかな？」

「まあ、なんというか、がんばります」

うん、そう言えれば楽なんだけどー

「普通のコメントか」

面白くないから適当にねつ造しておくね」

「よくない、よくないですよ！」

なんてことになるんだよな・・・

新聞部、恐ろしいや

「セシリアちゃんはなんかコメントある」

さっきから髪を弄ってたセシリアは来たとばかりに答える

「こういったコメントはちょっと苦手ですけど、仕方ないですわね

ではまずー」「長くなりそうだからいいや」

「ちょっと待ちなさい！」

目上の先輩に命令はどうだろう・・・

などと思いつつ、見てるがセシリアはギャア、ギャア言ってるが薫子は適当にあしらいながらメモしていく

なんか、セシリア弄られキャラだな

「はい、じゃあ写真撮るから三人共並んでね
時間ないからちゃっちゃと並ぶ！」

と急かされながら並ぶ三人

俺が真ん中で左右にセシリアと一夏

あ、そうだ

ここで一夏を周りから固めて箒を助けてやろう

考えついてから早速実行

ピントを調整している薫子のところにいく

「ちょっと質問いいですか？」

「ん？なんだい？」

首を傾げる薫子に耳元で話す仕草をすると面白そうに笑い、耳を貸す

「スキャンダルみたいなネタは新聞部としては好きですか？」

「おっ、そりゃ好きだよ
面白くなりそうだしね」

さすが新聞部
情報好きだ

「じゃあ、篠ノ之博士の妹さんの恋路を助けたいんです
一夏はダイヤモンド並みにレベルが高い鈍感レベルなんです
だから意識させるには周りから固めようと・・・」

「お、いいねー
その話、乗ったよ」

交渉は決定

みんなのそこ戻るなり箒を呼ぶ

「せっかくの写真だし、箒も来いよ」

と、彼女を一夏と俺の間に置く

さあ、後はどさくさ紛れに押すだけだ
どうせ、他の女子が写真に写りたがるんだ
バレはしないだろ

「じゃあ、撮るよ

35×51÷24は？」

「えっと・・・2？」

一夏が答えた瞬間、俺は箒を一夏の胸に向かって彼女を押す

当然、いきなりすることにバランスを崩した彼女は一夏に倒れ込む
いきなりながらなんとか受け止めた一夏はつい箒を見て、箒も一夏
の顔を抱き止められながらも見上げる

そして互いに目があった瞬間・・・

「74・375でしたー」

やはり、シャッターが切られるのと同時に全員入って来た

「あ、あ、あなたたちなんで入ってるのですか!？」

セシリアが悔しそうに怒っている

やはり、せめて一夏の隣にさせてあげるべきだったのか・・・

「セシリアたちだけ抜け駆けはするいよー」

「クラスの思い出になるじゃん！」

クラスの女子にうまく言いくるめられ、セシリアは苦虫を潰したよ
うな表情だった

まあ、そのあとセシリアの要望で撮り直しもしたとさ

で、例の二人だが

「す、すまん！」

「ん、ああ、大丈夫か？」

箒は顔真っ赤にして恥ずかしそうだが、一夏は何事もなかったかのようになっている

（ハハハ、一夏よ

そうやってクールにいられるのも今のうちだぞ）

ニヤリ顔を我慢できない俺は手で口を覆う

そして新聞部が去ったあともパーティーは10時過ぎまで続いたとさ

そして後日……

俺と一夏、箒は部屋が近いことから毎日一緒に登校しており、いつも通り三人一緒に教室に入ったのだが……

「織斑君！

これ一体どういうこと！」

「篠ノ之さん、大胆♪」

そこには新聞部による新聞

そして一面を使った写真と見出しは凄い者だった

『話題の一年生に突撃インタビュー』

そこで大胆な一年生を発見！』

写真を大きくし、更に分かりやすいように抱きつきながら見つめあっている二人を赤く囲っていた

「「なっー！？」」

二人は顔真っ赤になりながら新聞を引き寄せ、まじまじと見る

一夏は新聞に目を走らせ、箒に至っては口を金魚のようにパクパクとさせ、固まっている

（……アハハ、ヤッベ

この反応、おもしれー！）

予想以上の反応にみんなに背を向け、必死に笑いを堪える

そんな非常事態の二人にある女子が追い討ちをかけるかのように伝える

「なんかクラスメートSさんって人のコメントがあるよ
『幼なじみだけあって二人とも部屋は同室らしいですね
勉強や食事、

訓練も一緒ですし、今更ですよ
けど、普段控えめな一夏から抱き寄せるとは驚きでした』
って、言ってるけどホントなの!？」

「いや、抱きよせてない!
って、最初からそんな関係じゃなくて!」

「.....」

一夏は慌てて否定するが、その慌て様は逆に関係を隠してるかのよう
に誤解されてしまうだろう

箸はすでに炎上している

「ほれ、恥ずかしがってないで席に着こうぜ
みんなもな

早くしないと鬼教師が来るぜ?」

その一言は効果あったのか
蜘蛛の子を散らしたように解散していく

（ハハ、箒が一步リードと・・・）

脳内ISヒロイン表で箒の棒グラフが少し高くなった

そこであることに気づく

（あれ、セシリアならこの騒ぎに食いつくはずなのだが・・・）

首をひねり、？マーク浮かべる
すると後ろから声をかけられた

「おはようございます

新城さん」

「ん？オルコットか

おはよう」

振り向けば先ほどから考えていた本人、笑顔のセシリアが立っていた

「あの、新城さん

もし良ければお名前でお呼びしてもよろしくて？

わたくしも名前で呼んでくださってよろしいので」

顔を赤くしながらおずおずと聞くセシリアの仕草に俺はあることが
頭をよぎる

(まさか・・・)

いや、ここは俺とセシリアフラグはだめだ・・・
ちゃんとセシリアと一夏とのフラグに戻さなければ・・・)

「やはりダメでしょうか・・・」

たぶん、頭に耳があったらペコリと垂れているだろう
そんな表情だ

俺は慌てて答える

「あっ、いや！」

大丈夫だぞ、セシリア！

最初は印象から違ったけどこうして『友人』として話すならいいな！
改めてよろしくな！」

友人の部分を少々強めに強調して話し、それが伝わったのかセシリアの表情は固まっている

すまん、セシリア

たとえ一夏とフラグじゃなくてもタイプじゃないんだ・・・友人と
してならいいが・・・

「友人ですか・・・」

しかし、まだチャンスはありますし・・・」

なにやらブツブツつぶやいてるセシリア
しかし、すぐに表情は一変

「わかりましたわ！」

改めてよろしくですわ、司さん！！」

そのまま席に向かっていくセシリアは心なしかちよつと落ち込んでいた

俺は心の中で静かに合掌する

（すまない、セシリア・・・狙うのは俺じゃなくて一夏にしてくれ・・・）

俺はため息をついて席についた・・・

時は既に遅し、やっちゃった司（前書き）

・・・原作崩壊ッスね

時は既に遅し、やっちゃった司

風は微風・・・

距離は800・・・

湿気は高くない

放課後の訓練場で、ライトを灯し、やたらと明るいグラウンドでうつ伏せの状態からL96Aの倍率スコープを覗く

ターゲットの赤い的に的確に当たっ・・・ていなかった

五発中二発が真ん中

あと三発は真ん中より上

俺は身体を起こすと右肩をぐるぐる回しながらため息をはく

「あゝ、やっぱり本物の銃は反動が半端ないな」

そう・・・

今撃ったL96Aは正真正銘本物

学園入学から早、二週間ちよつと・・・

IS学園は高校でありながらもIS授業は訓練である

当然、軍に関係する訓練もあるわけである
そこで司はIS学園を通して銃を購入した

お金？

なぜか私服と一緒に銀行の通帳を見れば80万ほど入っている

ちなみに住所を見れば学園からさほど距離がなかったという・・・

まあ、そんなわけで今、本物の銃で試し撃ちをしてたのだ

「さて、帰ろうかな」

L96Aをケースにしまうとグラウンドの明かりを消し、真っ暗になった訓練場から出る

そのまま食堂に向かおうとしたが、目の前に辺りをキョロキョロしたツインテールの女子がいきなり声をかけてきた

「ねえ、ちょっとそこのアンタ
総合受付って、どこか知らない？」

（・・・もう、こんな時期だったか
どうなんだろう、鳳・鈴音イベント）

そう・・・そこにはボストンバックのような大きなカバンを背負ったツインテールの少女・・・鳳・鈴音がいたのだ

「ああ、案内しようか？」

「頼むわ

にしても・・・アイツ以外にも男子がいるんだ」

マジマジと観察する鈴に苦笑いで答える

「俺は新城司

まあ、織斑千冬の弟の一夏のほうが世界的にもインパクトあるから俺はそんなに有名じゃないみたいだしな

お前の名前は？」

まあ、知ってるけどなー

で、上の説明だが女神が記憶操作したため俺もIS操縦者としてそれなりに有名らしい

（クラスの女子に聞いてみた結果）

しかし、やはり一夏のほうが有名らしく俺の名を知ってるのは日本国内だけみたいだ

外国からの生徒は知らなかったから・・・

「鳳・鈴音よ

アンタは一夏と同じクラスなの？」

「ああ、そうだよ

まあ、一夏のほうが人気高いからな」

「アイツ、モテるんだ・・・」

「なんか言ったか？」

「あっ！

ううん、なんでもない！

あれが、受け付け？」

慌てて首を振る鈴だが、ちゃっかり聞こえちゃってますよ」

まあ、聞こえてないふりはしてるが・・・

（そうなんだよ、一夏は小説通りモテるんだよ

こないだ聞いたが同居してる筈はどう思ってるんだって一夏に聞いたが・・・

幼なじみとしか意識してないという・・・

同じ男として情けないと本気で感じてしまったのだ）

「そうそう

まだ受付は閉まってないな・・・

すいませ〜ん」

明かりがついてる受付窓口から呼んでみる

すると事務員の女性が受付に出てきた

「中国代表の鳳・鈴音ですけど、寮の部屋番教えてもらっていいですか？」

入れ替わりに鈴が受付人に話しかけ、部屋番を聞いてるみたいだ

「お待たせ

ところでアンタ

一組のクラス代表みたいじゃない？」

「そうだけど・・・」

何です、その好戦的な目

そりゃあ、クラス代表だから戦うなら仕方ないけど鈴さん、まだクラス代表じゃないでしょ・・・

「面白いじゃー」「間違ってもクラス代表にならないでくれよ・・・」
まだ何も言っていないじゃない！」

鈴の言葉を遮り、先制攻撃

案の定、戦おうとしていたのか・・・

「だいたいお前の好きな奴が対戦相手じゃないんだ
俺が代表だしな」

「なっ！

なんで、一夏が出てくるのよ！」

顔を真っ赤にして怒る鈴

小説ではピンと来なかったがこれは中々、面白い反応だった
先ほどまでは話しが面倒くさいと思っていたが、今は興味心が煽られて

「（もうちょい弄ってみるか・・・）

誰も一夏って言ってないけど？

一夏が好きでちょうどIS学園に入学したのを知ったから転校してきたのか？」

ニヤリと嫌らしい笑みを浮かべながら話す

鈴は墓穴を掘ったのに気づき、口をパクパクさせながらプルプルと震え、顔はトマトのように真っ赤

そんな反応につい笑いが堪えきれず、笑ってしまった

「アハハハハ、その反応サイコー！

アハハ、ス・・・マン

笑い・・・クツ・・・すぎだな

クククツ、心配しなくても・・・ハハ、一夏はまだ誰も好きな奴はで

きてないぞ」

腹を抑えながらポンポンと優しく鈴の頭を叩く

しかし、それが最後の決壊の留めになったようだ

ブチンっ！！

例えるならこんな音だろう

鈴の堪忍袋が切れたようだ

「もう許さない・・・」

クラス代表戦、覚悟してなさい！！

私を弄って、怒らせたことを後悔しなさい！

公衆の前でボコボコにしてあげるわ！」

そう言い放ち、背を向け、スタスタと去って行く鈴

残された自分は・・・

「やべっ、やり過ぎたな・・・」

すでに後悔していた

鈍感↑呆れ三人（前書き）

一夏はやはり鈍感

鈍感↑呆れ三人

「噂の転校生の話知ってる？」

「聞いた、聞いた

なんでも中国代表なんだってね

二組なんでしょ!？」

登校し、教室に入るなり耳に入るクラスの会話

前の・・・前世の世界でもそうだったけど女子の情報の速さは摩訶不思議だと思う

少なくとも彼女が来たのは放課後の夜

半日足らずでクラスの女子の大半が知ってるという

女子独特のネットワークでもあるのだろうか・・・

「ふーん、司は知ってたか？
転校生の噂」

話を聞いていた一夏が訪ねて来たが昨日会ったとは話づらなかった・・・

なんせ、一夏と面識ある者だから・・・

「あゝ、それなりにな
ちよっと小耳に挟んだ程度だよ」

「そうか、どんな奴なんだろう？」

そう呟いた一夏

するといきなり嫌な予感が胸中をよぎる

「一夏！

スマン、トイレ行ってくる！」

猛ダッシュで教室後ろ側のドアに向かう！

『『ガラガラ』』

教室にあるドアが一斉に開く！

「久しぶりね、一夏！」

「お前は、鈴！」

そこには腕を組み、笑みを浮かべた鈴が立っていた

「まさか・・・二組の転校生って鈴か！？」

「ええ、そうよ

そして中国代表候補生よ！

で、今日は改めて宣戦布告をしに来たのよ！

新城司はどこにいるのよ？」

「あ、ああ

アイツなら今、トイレに・・・」

キヨロキヨロとまるで獲物を探す目をしてる鈴に戸惑いながら説明する一夏

それを聞いた鈴はフンツと鼻を鳴らす

「そう・・・

じゃあ一夏、伝えておいて

クラス対抗戦で必ず潰してあげるってね」

「お、おう

必ず伝えるぞ

じゃあ、俺は席に戻るな」

「あ、ちよっと一夏！

まだ話が・・・！」

「お前か、うるさい奴とは
邪魔だから帰れ」

「何よ、私を邪魔呼ばわりなんてー！ー」

そそくさと席に戻る一夏

だが、鈴はまだ話足りないようで声をあげ、さらにいきなり邪魔呼ばわりされる

それを鈴は不機嫌そうにうっとおしそうに振り向く

そこには鬼がいた

「その先の言葉を言ってみろ、小娘」

「ち・千冬さっ『バシン、バシン』」

二回だ

大事？なことなので二回言おう

二回だ

二回もあの強烈な殺人級の出席簿アタックを食らったのだ

角じゃないく面だったがあの千冬に鉄製のような出席簿だ

見ていた一組全員が

「うわゝ」や「痛そう」などと顔をしかめながら呟いていた

そそくさ帰る鈴

「痛そうだったな、鈴のアレ」

「司、いつの間に!？」

後ろでいきなり聞こえた声に振り向く一夏

「そういえば・・・お前、鈴と何かあったのか？」

「そうだな」

ガシガシと頭を掻き、一つため息を漏らす

「昼休みに話すよ

もうSHRが始まる」

一夏は一つ返事で前を向くとちやうどSHRが始まった

時間は昼休みーーーーー

購買で買ってきた昼食を仲良く食べる四人の姿・・・・・・・・・・じやなかった

「ーーーーなるほど、つまり・・・」

「司さんが悪いですわ」

「うん、わかってるさ・・・」

正座させながら腕を組む女子二人相手に頭を上がらない自分

まさにこの絵図がこの世界の女尊男卑の体現してる光景だろう・・・

「全く自業自得だ、馬鹿者」

「聞いて呆れますわ」

ため息を吐く二人

「けど、まあ司も反省してるしさ
その辺にしといてやろうぜ？」

そりゃあ、わざわざ好きな奴を追いかけて来た鈴を笑うのは酷いが
反省したんならちゃんと謝るだろ？」

「あ、ああ、わかってる・・・」

あと、一夏

俺が説明したことから、鈴が誰が好きかわかるか？」

鈴が好きなのが一夏というのは言っていないが出会いからこうなる
原因まできっちり話したのだ

箒とセシリアはその説明から誰を追いかけて来たかわかったが・・・
・・・

「わかるわけないだろ
会ったことがないし、鈴からも聞いてない
けど、今度紹介してもらうかな？」

「「「・・・」」」

わからないと当然のように答える一夏

三人は言葉を失う

「俺は本人がいるから名前を言わずに説明したが箒とセシリアはわかったよな・・・」

「え、ええ・・・」

けどあの説明でわからないなんて、筋金入り以上の鈍感ですわね・・・」

「先が思いやられる・・・」

ため息を吐く三人

だが、そんな三人に一夏は首を傾げていた

「どうしたんだ、三人ともため息ついて・・・」

なんかあったのか？」

無意識なんだろう・・・

だけどそんな天然鈍感一夏に再び盛大なため息を・・・

鬼ごっこ(前書き)

ヒロインは決定で・・・
シャルやラウラじゃないよ？

鬼ごっこ

さてさて・・・

クラス対抗戦まであと一日

つまり前日だが・・・

これと行った訓練はしていない

いや、一応訓練なのだろう・・・

IS装備の鬼ごっこをしていた・・・

遡ること二時間ほど前のIS実戦訓練の時・・・

「新城、専用機の武装レポートを見せて貰ったが近接武器がなく装備が一つだけだな」

「えっ、知らなかったんですか？」

普通、生徒の機体は調べておくもんじゃないの？
そんな疑問を浮かべるが・・・

「あくまでここはISについて教え、訓練する学校だ
専用機持ちのデータは基本的に各代表とその担当整備に本国の者だけだ」

そうですか・・・
それしか言えなかった・・・

「で、後付け装備で近接武器でもつける気はないのか？」

確かにあったら楽だろう

しかし、断る

だって・・・

（近距離に現れた敵をスナイパーライフルで倒すってカッコいいじゃん！

シューティングゲームで俗に言うクイックショット
マジでカッコ良かったんだ！）

それは憧れであり目標だったのだ

「自分の武器はコイツだけです
距離は詰めさせませんし、詰められてもコイツで倒します」

愛銃であるL96Aを撫でながら強く答える

「ほう・・・言い切るか
面白い・・・

全員、集合！」

千冬の掛け声で各自訓練に励んでいた生徒が集まる
なぜだろう・・・胸騒ぎがする

「今から午後のIS基本動作のテストをするつもりだったが、やめにする」

それを聞いたクラスメートは嬉し声をあげる
なぜだろう・・・素直に喜べない

「それにたまには趣向の変わった訓練もありだと思おうしな

今回は新城のクラス対抗戦対策訓練も兼ねて
対射撃ISに対してどう懐に入るかを訓練してもらう」

なぜだろう・・・とても逃げ出したくなってくる

「そうだな・・・褒美もあったほうがいいだろう
もし、勝った者には単位を一つくらいくれてやる」

ナンデスカ、ソノ、ホウビハ

「訓練内容は簡単だ

新城、お前は逃げ切ろ
妨害を兼ねた攻撃もありだ

そして織斑とオルコット

他の者は今ある訓練機二機を交代しながら回して使え
その計四機は攻撃をするな

防御や回避は許可する

とにかく新城に『触れろ』

その時点で新城の負けが確定する

だが、新城自身による攻撃・・・蹴りなどで触れたのは判定に入らん
自分から触れたのを判定とする

つまり、鬼ごっこだ

勝ったほうに単位一つくれてやろう」

ワアアアと歓声をあげる

見れば一夏やセシリアもやるみたいだ

「近接武器しかない白式には良い訓練になるな」

「司さん、私たちティアーズが必ず捕まえますわ!」

「ティアーズありかよ!?!」

「一応機体の一部だしな
問題ないだろう」

千冬の容赦ない回答に俺はガックリ膝を着き、orzになってしまう
しかし、もはや避ける余地なし

司は諦め、気持ちを切り替え、瞬時にリクルアを起動させる

「もういい・・・とことん逃げ切ってやる!

俺が勝ったら、俺以外ここにいる全員に一個ずつ食堂で奢ってもら

うからな！

もちろん、織斑先生もな！」

多分、自棄になっていたんだろう
この時の自分・・・

「なっ！？

ルールで褒美は単位と言ったろう！

それに、お前は私の私に奢らせるとはいい度胸だな！？」

「先生が鬼側のルール決めたんならただ一人の逃げる側のルールくらい少しは決めさせて下さいよ！

嫌なら先生自身、打鉄で出ればいいじゃないですか！」

「私が出ると訓練にならんだろう！」

この時の自分に会えるなら間違いなく、容赦なく、確実に殺しているだろう

この時の自分は頭がトチ狂っていたみたいだ

「あれ〜？ 織斑先生

たかが生徒を捕まえる自信ないんですか〜？

これなら、自分はこの鬼ごっこ、楽勝ですね〜♪」

もしこれが許される行為なら俺は勇者だと思う

なんせあの鬼教官こと世界一の称号を持つ織斑千冬を『挑発』したのだから

「……どけ、小娘
あの雑魚を潰してきてやる」

「はっ、はい、ただいま！」

脱兎のごとく打鉄を譲る女子生徒
見ればガタガタと震えていた

「一夏、オルコット
足は引っ張るなよ？」

「はいっ！」

背には般若の姿が見える千冬に即答する二人
専用機持ちが形無しである

そして始まって一時間・・・

範囲は校舎敷地ない

今は学園にある公園の林の中に草木に紛れ、隠れている

機体が緑のため、さらに分かりにくい
身を潜めているセンサーに反応

そのまま近くまで来るのは一夏だった

照準は合わせず、銃口だけ向けておく

「そのまま通り過ぎて行ってくれ・・・」

一夏が目前20メートル先を通り過ぎて・・・行った

ふう・・・と、一息ついた瞬間、

「あ、新城君発見！」

・
右を見れば打鉄を身に纏ったクラスメートのニーナという少女が・

「ちくしょう！」

緊急点火でフルブースト状態にし、緊急離脱
当然、機体性能差で距離は開くが……

「司、どこにいたんだよ!？」

左側から戻ってきた一夏が迫っていた

急いで方向転換し、低空で飛び続け、後ろ斜め上を飛んでいる一夏
に銃口を向ける

「隠れてたんだよ!」

そのまま一夏に照準を定めないまま散弾式の弾を五発放つ
散弾ならあわせなくても当たるだろう……

「うお!？危ねえ!」

さすがスピード型
バレルロールしながら簡単に避けられた

しかし、単純な一夏だ
避けることに考えが一杯だろう

第1アリーナの建物の角を曲がった瞬間

ダブルイグニッションブースト
二連瞬時加速

一度目でアリーナの上に

二度目にアリーナの中へ

そこには山田先生が他クラス・・・いや、見たことある顔に知っている専用機を発見し、二組だとわかった

「新城君!？」

学園内でのIS起動は校則違反ですよ!」

「織斑先生が許可した訓練中なので問題なしです!」

「あ、そうですか・・・」

「ちょっと休ませて下さい・・・邪魔にならないように端っこにいまするんで

昼休み終了からずっと動きっぱなしなんで・・・」

「そうですか・・・

それくらいなら」

山田先生がそう言ったあと、こちらに目を向けてる鈴に目を合わせる

(めっちゃ睨んどるし・・・

けど、とりあえず休もう)

機体を着陸しようと降下していく

しかし・・・休む暇はなかった

「新城おとおおう！」

「げっ、織斑先生かよ！」

オープンチャンネルから開かれた怒声にすぐさまブーストに火をつける

見れば山田先生や鈴を含めた二組全体は縮こまっている
織斑先生・・・雰囲気火山のように燃え上がり、目付きが視線だけでは殺せそうな目である

髪の毛が角のように尖っているのは気のせいだろうか・・・

「死ねっ！」

「それが教師の言うこととおお！？

つか、それ攻撃じゃねえか！？」

「武器も機体の一部だ！」

なんという屁理屈

そう思いながらも足のブー스트が火を吹き、機体が右にずれる

そして打鉄だと言うのに瞬時加速で一気に距離を詰め、近接ブレードを振り下ろすところを間一髪で避ける
しかし、すかさず逆袈裟切りで刃を返してくる

が・・・、司も負けていない

避けた先を狙ってきてる刃を瞬時加速で離脱
お返しとばかりに装填した拡散弾を五発連発しながら後退

弾一つに三発の爆弾で計十五発の爆弾で爆風に巻き込まれる千冬

そのまま爆風の中心に煙幕を撃つ

「すみません、お邪魔しました」

ペコリと礼をした後すぐさま旋回し、瞬時加速で一気に離れる

しばらくして、煙が千冬の振った近接ブレードで払われる

山田先生はオロオロしながらも千冬に近づく

「あ、あの・・・織斑先生、大丈夫ですか？」

心配する山田先生は下を向いてる千冬の顔を覗き込んだ瞬間
ビクリと体を振るわせ、硬直する

「フッフ・・・やるじゃないか新城
殺りがいがある・・・フハハハ！」

そのまま飛び去る変わりきった千冬

二組の生徒は山田先生の元に行く

「山田先生、大丈夫？」

一人の生徒がそっと声を掛けるとぶわっと涙を溜めた山田先生はそ
の立場を忘れ、生徒に抱きつく

「うえーん、怖かったよー！！！」

子供のように泣き叫ぶ山田先生
だが、誰も咎めなかった

見た目魔王様は誰だって怖いものだ

「クソッ！」

第一アリーナから屋外プール場に向かった瞬間セシリアに鉢合わせた新城は目まぐるしい動きでティアーズの攻撃で避けていた

「避けないでくれませんか!？」

「無茶言うな！」

先程から瞬時加速を結構使っている

シールドエネルギーは神様仕様と言えど、
すでに1／3になっていた

（瞬時加速は使えない・・・タイムリミットの六限終了までは・・・）

モニターの用意しておいたタイマーを見る

残り15・5分

（一夏、セシリア、千冬さんの機体は補給なしだが、もう一つのクラス用打鉄が交代毎に補給
千冬さんはさっきダメージを負わせたからいいけど・・・問題はあまり使わせない一夏がセシリアと合流した時が一番マズイ・・・）

ティアーズは援護面なら素晴らしい援護兵器だろう

そこにスピード型の一夏は最悪だ

シールドエネルギーが持つかわからない・・・

そう考えながらもなんとかティアーズの突進を避けていく

時々、セシリアに隙を見て彼女自身狙って狙い撃つが簡単に避けられる

やはり平行処理がまだできないように避けた時、
ティアーズは止まるが避け終わった後のティアーズを操作するまでのタイムラグが短い

さすが代表候補生

敗北から学んだ成長速度が速い

「当たり前さい！」

「無理だ！」

このままできるだけ避け続け、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーを消費させていく

しかし、状況はそうさせてくれなくなった

「スマン、遅くなった！」

「っち！最後の最後で箒かよ！」

打鉄を身につけた箒はそのままティアーズと共に自分に触れまいと突進してくる

残り7分・・・

「墜ちろお！」

「追い付くの早すぎだろ！」

さらに千冬が加わる

ティアーズを蹴り飛ばし、瞬時加速で急降下
そのまま、すかさず箒を狙撃で吹き飛ばす

千冬も残り少ないシールドエネルギーを瞬時加速に使えない

四人の攻防は再び仕切り直す

「やっと見つけた！」

そこに更に一夏が加わった

見ればいつのまにかクラスの女子がギャラリィになっていた

「残り2分ちょいで全員集合かよ・・・」

「運がこちらに傾いたな

一夏、オルコット、篠ノ乃
負けたら許さん、勝つぞ」

「「はいっ!」「」

負けたらどうなるか三人の表情はもはや背水の陣だ

「こりゃあ、怖いな」

ゆつくりと銃口を向ける

ここまで来たらもはや逃げるのは格好の的

全部避けて、防ぎ切る!

装填―――特殊散弾

イメージした散弾をマガジンに詰める

そしてタイマーが1分半を切った瞬間

五人は動いた

カチリと引き金を引いた瞬間、ショットガンのように銃口からバラ
バラの黒い小さな塊が放出される

飛距離はあまりなく、そのまま前方全域に漂うだけだが・・・

「マズイ！ビットを戻せ、オルコット！
一夏もそこを離脱しろ！」

経験からすぐに気づいた千冬の警告はすでに遅く、
真っ先に真っ正面から来た一夏とティアーズはその黒い塊を避けな
がら進んでいたが・・・

「残念、ボカン！」

突如、黒い塊が爆発

そのままティアーズと一夏は爆風に巻き込まれる

出鼻を挫かれた二人

その間に左から回り込んだ箒が迫る

「この間合いなら狙撃銃は使えまい！」

確かに普通ならな・・・

だが、

「こんだけ近けりゃあ、照準合わせなくても当たるわ！」

初弾を撃ったあとすぐにマガジンを変えておいた対IS用通常弾を
片手だけで構え、撃つ

神様仕様の反動なしだからこそできるのだ

反動があつたら左のマニピレータがイカれてるだろう
狙撃銃の零距离発射は絶大だ

右肩に当たり、装甲を吹き飛ばし、バランスを崩させた
そこですかさず箒の左腕を持つと前に引き、背負い投げ
箒は眼下のプールに叩きつけられた

「後ろ、取りましたわ！」

背後からセシリアがいることに気付き、残りわずかなシールドエネルギーを少し使い、一瞬的な瞬時加速で下降

そこには回り込んでいた千冬がいた

「いつまでシールドエネルギー持つんだ!？」

「あいにく、あと一振り分はあるのでな」

見れば両足のスラスターしか出していない
完全な待ち伏せ迎撃だ

もはや目前

振りあげられる近接ブレード

銃の右側面のシールドでガードするが、さすが世界一
ガードしても体制が少し崩れながらも、プールに叩きつけられない
ようなんとか機体制御した

そこに・・・

「貰ったあああ！」

瞬時加速で肉薄する一夏

千冬は凹だったんだろう

だが、残り少ないシールドエネルギーを出しきる

タイマーはもはや10秒切っていた

「させるかああ！」

「ぶわっぷ!？」

男の意地を見せ、体を捻りブーストを最大出力にして、バク転のよ
うに一回転

ブーストの勢いによってプールの水が押し退けられ、水飛沫が上が
り、一夏は水の壁に飲み込まれた

だが、ここで自分の運は切れた

シールドエネルギーが切れてしまい、ISが強制解除

「マジかよ!？」

そのままプールに向かって落ちていくが・・・

「「えっ?」」

落下地点にはちょうど水面から顔を出し、ポカンとした表情でこちらを見上げていた箒と目が合う

そして二人はそのまま正面からぶつかり水飛沫がふきあがる

そして同時に六限終了のチャイムがなった

慌てて千冬が確認しに行くとそのぶつかった二人を見るなり、ため息を漏らす

そこには箒の胸に顔を埋めている司の姿が・・・

「・・・早く離れておけ

どうせ、そいつは気絶してるんだろ？

お前が保健室に運んでおけ

ああ、HRは出なくていいぞ」

「は、はい・・・」

返事こそしたものの箒の表情は赤い・・・

「よし、これにて訓練は終了する！
各自、教室に戻れ！

私と篠ノ乃は訓練機を返しに行き、気絶してる新城を保健室に運ぶ静かにして待つように」

千冬の指示に早々と帰っていく

もはや千冬の指示には誰もが従う

この訓練でわからされたのだろう
怒らせた千冬の怖さが・・・

千冬も専用機持ち二人を連れ、戻って行き、残された箒も・・・

「む・・・意外に軽いほうか？」

プールから出て、司を背負いながら保健室に向かう

訓練で筋肉がついてるのだ

司一人くらい背負うのは問題ないようだ

そのまま二人はゆっくり保健室に向かって行った

コロッといっちゃいました(前書き)

展開が早いかもしれませんが・・・くつつけます

コロッといっちゃいました

「ふう、ついた・・・」

箒は誰もいなかったため、勝手に司をベッドに寝かせた

そこで改めて司の顔を覗くと再び恥ずかしさが吹き返す

（うう・・・あんなことになるなんて）

あの瞬間、二人はぶつかりそうになった

しかし、箒はすぐさま受け止めるようにISから両腕をパージし、腕を広げ受け止めた

後ろに倒れ、水飛沫をあげながらも、衝撃はISによって緩和されていた

しかし司の勢いは緩和されず、彼は頭を箒の胸に陥没させ、気を失ったのだ

それからというものの箒は終始、顔が赤い

「改めて見ると意外に綺麗だな・・・」

まじまじと司の顔を覗き込む箒

意外にも髪が長く、触れば女性のように柔らかい
黒い髪はその長髪に映えている

端正な顔立ちはワイルドな一夏とは違って美人のようだ・・・

つい頬に触れてしまう手

陶器のように白い肌が羨ましく思えてしまう・・・

「って、私は何をやっているんだ!？」

慌てて手を引っ込め、自重する筈

「恋人でもなんでもないのに・・・恋人？」

先ほどの行為は恋人のようなシーンにも見える
そこで自問自答する

（なぜ私は無意識にあんな行為を？）

私には一夏が・・・それにいつも司が手伝って・・・）

そう・・・いつも司が手伝ってくれていた

きっかけも同居も細やかな気配りも

目で追っていく度に目が会えば笑顔を向けてくれていた

自分が困れば、助け舟

食堂で一夏がいないときに人混みに巻き込まれそうになったら手を

引いてくれたりと

頼りになるとこは多くあった

一夏は気づいてなかったが一夏に話しかけようとした女子を司が相手をし、二人つきりにしてくれることもあった

そして気づいたのであった

(・・・一夏より気にしてる？)

なんでこんなに司の行為に気づいてるんだ？)

ここでようやく自分のことがわかったらしい

一夏よりも司のほうに意識が向いていることに・・・

(いつも気づいてくれない鈍感一夏と一緒にになって手伝ってくれる司

そう思うと司のほうが魅力的だ・・・

バスタオル姿を見せても自分の好意に気づかない男だしな、一夏は・
・・)

普通だったら間違いなく意識しない男はいないはずだ

なんの関係もない女子がバスタオル姿を見せるのだ

それで意識しないのは男として恥ではないのだろうか・・・

自分の幼なじみながらも馬鹿らしく思えてきた

だが、司は意識してくれるだろうか？

そう思っていると彼が目を開けたのに気づく

「ここは・・・箒か？」

「ああ、お前が気絶したから保健室まで運んだんだ
身体は大丈夫か？」

「ああ、問題ない
疲れ過ぎて気を失ったみたいだ

箒にぶつかる瞬間に気を失ったみたいだが・・・箒こそ大丈夫か？」

「ああ、ISが保護してくれてな・・・」

「そうか・・・けど、ゴメンな
ここまで運んでくれて・・・
お礼したいんだが、なんかあるか？」

苦笑しながらそう言う司

（・・・自分の気持ちを確かめてみよう）

「司、動かないでくれよ？」

「えっ？ーうわっ!？」

答える暇もなく司に抱きつく

伝わるのは人間の体温と高い心臓の音、心地好い司の匂い

（ああ・・・私は司が好きなのだな・・・）

「あ、あの箒さん？

これは一体どういうことかな？」

顔を赤くしながらも引きつつてる笑顔の司に私は意地悪い笑みを浮かべる

「好きでもない男にこんなことするわけなからう」

「えっと異性としてと受けるとしたらとても魅力的ですが・・・」

「異性としてだ」

司がゴクリと息を呑む音が聞こえた

「一夏のことは？」

「あそこまで鈍感だとな・・・アイツに取って私は幼なじみ止まりなんだろう・・・そうとしか思えんのだ」

・ 「まあ、以上に鈍感かもしくは興味がないのかどちらかだもんな・・・

けど、なんで俺なんだ？」

「最初はもちろん一夏が好きだったさ

久しぶりに見たアイツは背が高くなって逞しい一夏は格好よかったさ

しかし、いくらアピールしても気づいてくれないのだ

同居してるにも関わらず何もしてくれない

わざとバスタオル姿でベッドに座ってもだぞ？

少しくらい意識して欲しいものだ！」

「・・・アイツ、どんだけよ

同じ男としてたぶんどうかと思うぞ？」

「そうなのか？」

「俺だったら意識せざる得ない
つか、普通意識するだろ？」

「・・・私はそんなに魅力がないだろうか」

そこまで言われると自信なくしてしまう・・・

「あ、けど箒は凄く美人だと思うぞ！！

アイツがおかしいだけで俺からすれば十分魅力的だって！

料理もできるし、強いし、なんだかんだで面倒見がいいしな

正直、箒は可愛いし、告白されてめっちゃ嬉しい

けどさその時間、くれない？

いきなりすぎてさ・・・」

確かにいきなりすぎか・・・好きな男のアタックを手伝ってのが手
伝って貰った男が好きになってしまったのだから

「いくらでも待つさ

ただ早めに頼むぞ？」

私はそう言い残して、保健室を出ていく

（言った！

言ってしまったあ！）

荷物を纏め、すぐさま自室に戻り、枕を抱きしめながらゴロゴロと
回る

顔が凄く熱い

「振られたたら友として接しよう！」

潔く叫んだ箒は高らかに拳を突き上げた

コロツといっちゃいました(後書き)

今思うとセシリアとか一夏に出会った次の日には好きになってたし、
箒が一ヶ月経って好きになるのも不思議はないかと

気づいた自身の想い（前書き）

短いです

気づいた自身の想い

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・アハッ♪

箸が去ったあと、司はニヤニヤが止まらなかった

「ヤベー、人生初だわ
告白されたの・・・」

前の人生では学校の休み時間にはラノベを・・・
昼休みや放課後にはエアガンを・・・

休日にはオンラインシューティングゲームを・・・
などとミリタリーオタク扱いにより、顔はそれなりによくてもモテ
ていなかったのだ

そんな自分が学園に入学して一ヶ月経ち、まさかの物語のヒロイン
から告白されるとは・・・

「確かにさ・・・箸はメインヒロインだけど一番人気なかったさ
それでも美人だし、料理できるし、照れ隠しが過激でちょっと自分
勝手なところあるよ

けど、優しいし、気遣ってくれるし、慌てるどころとか可愛いし・・・
って、アレ？」

改めて彼女を評価してみて気づく

自身の気持ちに

「・・・俺、かなり見てるやん」

そう、彼女自身をかなり見ていた

無意識に追っていたようだ

彼女の姿を・・・

いつからだろう、彼女を見ていたのは

彼女を気にするようになったのは

一夏への恋の手伝いとか言いながら彼女と話す口実を作っていたのかもしれない・・・

「恋って急なもんだな・・・」

恋――

一目惚れから長い時間をかけて気づいたりなどいろんな出会いがあるものだ

言葉や文字にして伝えたり、伝えられたりしないと気づかないこと

だってある

いろんなきっかけで恋の出会いを訪れるものだ

「・・・そうだな、鈴に勝ったらこの気持ちを伝えよう

一夏のハーレムイベント崩壊なんて上等だ

あんな鈍感野郎から箒は奪ってやる」

俺は高らかに打倒、鈴を保健室で宣言した

気づいた自身の想い（後書き）

某イラストサイトでISヒロインの箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、更織姉妹でどれくらい作品があるか調べてみた

結果

1位	シャル	2735作品
2位	ラウラ	1537作品
3位	セシリア	1328作品
4位	鈴	988作品
5位	箒	898作品
6位	更織姉妹	100以下

ってことでメインヒロイン箒があまり人気がなくシャルが他ヒロインの倍近くの人気さ

もちろん作者もシャル好きですから、この物語でもシャルはメインになるでしょう

以上、後書きでした

鈴フルボッコ(前書き)

近距離当てれるスナイパーライフルって、全距離型ショットガンだ
と思う

鈴フルボッコ

そして試合当日・・・

小説で説明されたが改めて実際見ると壮絶である

（オリンピック選手とかこんな雰囲気を感じてるんだろうな）

緊張感が最高潮だが、悪い気はしない

なぜかワクワクしていた

そしてビットには・・・

「新城、負けたら貴様は問答無用で赤点な」

「ちよっ!？」

織斑先生、それ酷くないッスか？」

「フンッ、冗談だ

この私のクラスの代表だ
勝って来い」

「当然ッス」

千冬にコクりと頷き、

「司!必ず勝てよ!」

「おう、男同士の約束だ」

一夏には親指を立てた拳を向け、

「負けたら、許しませんわ！」

同じ狙撃手として必ず勝ってください！」

「ああ、狙撃手の意地を見せてやるぜ」

セシリアにL96Aをコツコツと叩きながら笑顔を向ける

「司、必ず勝って帰って来い

私は勝って帰って来ない限り、迎えてやらん」

「ハハ、こりゃマジで頑張るかな

試合終わったら改めて話すさ」

箒の頭を撫でてやったあと、俺はビットの外を向く

「じゃあ、行ってくる！」

そう言い残し、スラスターの火を吹かして、発進した

そして二人を見た残り組はというと・・・

「ほう・・・」

「あわわわ・・・」

「まあ・・・」

千冬と真耶とセシリアはその雰囲気に息を呑む

「篠ノ之、昨日の今日で奴に惚れたか？」

「なっ!？」

ち、違います!」

千冬の言葉に顔を真っ赤にする箒

しかし、普通そこを否定するだろうか・・・

「けど、箒さんは彼が好きだったのでは？」

セシリアの問いに箒は一度、一夏を見るが・・・

「いつまで経っても、何をしても気づかないのでアイツが好きになりました!」

嘘、偽りはありません!」

隠すことはせず、堂々と宣言する箒

そこが箒らしいのだろう

そんな箒に一夏はというと

「箒が誰か好きになったのか？」

「「「・・・・・・」」」

わかっていたが、呆れた眼差しを向ける四人

「あはは、これは諦めたくもなりますね・・・」

「我が弟ながらも情けない・・・」

「幼なじみでありながらもいまだに気づかないか・・・」

「馬に蹴られればいいですわ!」

一夏の鈍感さは底なしのチート級な強さだった

場所は代わり、アリーナ中心

「フンッ、逃げずによく来たわね」

「ああ、そりゃあ勝てる試合を逃げるほど愚かじゃないからな」

「相変わらず減らず口ね」

その減らず口が二度と聞けないように潰してあげるわ」

まさに買い言葉に売り言葉

そんな二人である

「言っとくけどISの防御も絶対じゃないのよ？
本体にダメージだって与えることができるわ」

「んなもん、知ってるわ

だが、宣言してやる

お前の攻撃は当たらない

笑ったことは謝るからそんなに煽るなよ

負けた時に惨めだぜ？」

そう言いながら俺はゆっくりとブースターにチャージをする

「・・・っ！

もう手加減してあげない！

無惨に潰れなさいよ！」

鈴は青竜刀のような近接武器・・・『双天牙月』を器用回転させ、
キャッチする

互いに臨戦体勢に入り・・・

ビッー！

そして試合開始のブザーがなった瞬間、両者は動いた

鈴は一瞬で距離を詰め、両手の双天牙月をおもいつき降り下ろすがー！そこにはすでに司はいない

「なっ！？どこに！？」

鈴は慌ててハイパーセンサーを頼りに探す

しかし、その一瞬止まった動きによって鈴は背中から地面に吹き飛ばされた

「つたあゝ！」

「休む暇ねえぞ」

「つつ！」

地面に仰向けに倒れた鈴はその言葉に慌てて起き上がる

バク転のように一回転して、そこを離れながら起き上がるがすぐ足元が爆発し、足に当たった爆風がシールドエネルギーを削る

司が使ったのは衝爆弾

着弾した衝撃により、爆発を起こす弾だ

「やってくれたわね！」

鈴は空中にいる司に衝撃砲――龍砲を向ける

「つつ！？」

わかっていたが、こりゃあ厄介だな」

「初見で防ぐなんてやるじゃないけど、まだまだ！」

銃のシールド部分で防いだが一瞬方向が光った瞬間にはすでに弾丸は届いている

ブースターを吹かしてその見えない弾丸を避け続ける

「言っとくけどこの『甲龍』は安定性と燃費を目的とした機体よ！いくら弾を打ったってさほどシールドエネルギーは減らないわよ！」

「ご丁寧にご説明どうも！」

両肩の砲口を交互にぶっ放してる鈴に右手だけで銃口を向け、だいたいの標準だけ合わせると引き金を引く、引く、引く

撃ったのは拡散弾

爆風が鈴を巻き込み砲撃が止む

そこで再びマガジンを再装填

「さっきから！

あんたは爆弾魔か！？」

「いや、狙撃手だ！」

爆風が晴れ、そこから見えた砲口に狙いを定める

「入れ！」

そう祈りながらも引き金を引く

弾は貫通弾

チュイン！

そんな感じの音が響くと鈴の目の前にモニターからエラー表示が出る

『右側非固定浮遊部位損傷―――使用不可』

「なんで！？」

・ 鈴はその場から立ち退きながらも詳細画面から損傷内容を見ると・

「嘘・・・ISの装甲を貫通するなんて！」

「対IS用貫通弾だからな！」

砲口から侵入した貫通弾はそのまま砲身を貫通し、風穴を開けた

当然、砲身に穴が開けば圧縮するはず空気がその穴から漏れ、砲身が砲身の機能をしなくなるはずだ

「さあ、ついでにもう一丁！」

「やらせるもんですか！」

撃たれた弾を紙一重で避けた鈴はそのまま左肩の龍砲を連射しながら一気に近づく

さすが代表候補生というべきか
損傷しても攻めての勢いは衰えていない

「距離は離させないわよ！」

気迫じみた龍砲のラッシュをガードしながらも司は冷静にマガジンを変更

対IS用通常弾

そして肉薄した鈴は、ハルバードのように連結した双天牙月を左に横一闪にして振り抜く

しかし司はそれをしゃがんで回避

だが、鈴も間髪入れずに切り離れた双天牙月を持った左手を返し刃のように再び横に振り抜く

それを右手に持ったL96Aのシールドでガード

そこで司は笑みを浮かべた

「なあ、狙撃銃が普通の銃と違って遠くまで弾の威力を落とさずに撃てるってことはさ

初速の速さが半端ない威力ってことだよな
そんな初速を食らったらどうなる？」

「まさか!？」

こんな間合いで!？」

気づいた鈴は遅い

ギリギリとシールドを押し返そうとしていた双天牙月の力が驚きで
緩んだ瞬間

司は鈴の腹を蹴りあげる

そして体勢を崩した目の前の鈴に銃口を当てる

「One shot One kill!」

この一発で完全に勝敗を決めるつもり引き金を引いた
そのままドン!と吹き飛ばされる鈴

爆発に爆風、龍砲の損傷、機動や攻撃に割いた割合、そして零距离
狙撃

十分シールドエネルギーは減っているだろう

対して司は、攻撃をほぼ避けるかシールドで防御しているし、試合開始の時の瞬時加速以外シールドエネルギーを消費していないため残りは2000ちよいもある

一夏のようなシールドエネルギーを直接奪える武器がない限り、逆転はないだろう・・・

そう決着がついた瞬間

ズドオオオン！

そんな龍砲とは桁違いの衝撃音ともにアリーナ中央に『全身装甲』フルスキンのISが出現する

「やっとおいでなすったか
悪かったな、一夏じゃなくて」

司は銃口のマガジンをセットしながら呟く

するとプライベート・チャンネルから鈴の声が聞こえた

「早く逃げなさいよ！」

そんな言葉を聞いた司はため息をついた

「（女尊男卑はここまで女が強いとなるわけか）
シールドエネルギーが500もないんだろう？
なら、邪魔だから退いてろ」

「なっ・・・」

あ、あんただってどうせないんでしょ！」

「悪いな・・・」

こっちはまだ2000オーバーあるわ

だから速攻殺られるくらい・・・っいいい!？」

司はふと敵ISを見た瞬間慌てて二連瞬時加速をし、こっちを睨んでる彼女を抱えて、ピット付近まで回避する

「何するのよ!？
放しなさい！」

「わかってる、チビ」

ポイツと放り捨てるように離してやると
再び何か文句を言ってる

「うるさいな、助けてやったんだから感謝しろよ・・・
お前がいた場所見てみろよ」

そう言われ、仕方なく撃たれた場所を見た鈴はゾツとした

大出力のビームにより、地面が抉れ、赤々と光るほど熱を持っていた

「って事で、お前はここにいろ」

そう司が言うとアリーナ内部に放送が流れる

『鳳さん、新城君、今すぐAピットに逃げてください！
そこが一番早く解除されます！』

真耶の声だ

当然これが来ることはわかっていた司

「確かに僕や鈴の火力じゃ相手を倒せませんが時間稼ぎくらいできます！

なんたって織斑先生の攻撃すら避けられましたし
それに上からの友の援護期待してますし」

『しかし・・・』

そこで放送が途切れる

たぶん千冬が切ったのだろう

「さて、主人公が来るまで相手してくれよ」

威力を落とした通常弾をセツト

コイツの右腕があるかぎり俺の弾は意味がないし、コイツは一夏が
相手をしないと意味がないのだ

司は相手の注意を惹き付けるように相手を標準に合わせ、引き金を
引いた

想いを伝えて・・・(前書き)

ちよいとベタかも知れませんが・・・

想いを伝えて・・・

「やはりアイツは才能が凄いな・・・」

「どういふことですか？」

モニターから映る司に千冬は納得するように頷く

「射撃の位置取りと避けるタイミングの良さだ

山田先生は射撃武器を使ってるな？」

なら、撃つ時に一零停止で標準を合わせてるだろう？」

アイツはその停止のタイミングに合わせて回避運動を取ってる」

「ええっ!？」

そんなタイミングわかるものですか!？」

「そこは駆け引きの上手さと視線の動きだろう

人間は目標を目視で見る癖があるからな

だが、それが回避に使えれば自分のアドバンテージは限りなく上がる
私が雪片だけで世界一になったのがいい例だろう」

「それが新城君の強さですか・・・」

真耶はモニターの司を見ながら呟く

敵ISのビームはことごとく外れている

無駄撃ちのように見えるのだ

「だが、なんだ・・・
こうモヤモヤする感覚は・・・」

司のISを見る度に何か納得いかない感覚に陥る
そう思いながらもコーヒーに砂糖を入れていくが・・・

「あの・・・織斑先生
砂糖何杯入れる気ですか？」

「・・・ムッ」

コーヒーカップを見ればそこには砂糖により体積がかなり増えた
コーヒーが・・・
しかし千冬は問答無用で混ぜていく・・・混ぜたことによりゲル状
のコーヒーの完成である
そして、それを無表情で山田先生に差し出した

「どうぞ、山田先生
糖分摂取は疲れた身体にいいです」

「いや、遠慮しておきます・・・」

「そう言わずに、一気に飲んだほうがいいですよ」

「すみません、自分の飲み物取って来ます！」

普段からは信じられない俊敏さで逃げる真耶

残された千冬は・・・覚悟して飲みきった

「・・・しばらく甘い物はいらんな」

胸焼けしていた千冬である・・・

「まだか・・・」

こちらに砲口が向き、砲身内部が臨界する

司はそれを一拍おいて右に回避

その瞬間、回避したのと同時にビームが撃たれるが司には当たらない
するとアリーナに二つの影が映る

「お待たせしましたわ!」

「大丈夫か、司!」

一夏の白式、セシリアのブルー・ティアーズが現れたのだ

「やっとか・・・」

司はほっと一息をつく

今まで回避に専念していたのはこのためだったのだ
そして直ぐに3人に指示を出す

「鈴！こっちに来てい！」

ピット付近で 대기していた鈴が不機嫌そうな顔でやってくる

「何よ、私が役に立たないんでしょ」

完全に不貞腐れている

「馬鹿いうな、やっと大砲の弾が来たつつうのに砲身がその仕事を
放り投げ出すな

いいから聞け」

「どういふことよ・・・」

鈴がしぶしぶ従うのを確認した司は直ぐ様指示をする

「一夏は瞬時加速を全力で奴に近づき、全力の零落白夜を使って奴
の右腕を落とせ

奴の遮断シールドを破壊できるのはシールドエネルギー関係なく攻
撃できるお前だけだ」

「けど、全力の零落白夜はっ・・・!」

「安心しろ、さっきセンサーで確認したが奴は無人機だ」

「そうか・・・なら安心して殺れる」

一夏はニッと笑う

対IS戦では全力でやれなかった零落白夜を使えるのだ
自信はあるのだろう

「でだ、鈴は一夏が瞬時加速する時に残りのシールドエネルギー使い切って龍砲を一夏のブースターに叩き込め」

「なっ!？」

仲間を撃てつつうの!？」

「違うわ、馬鹿

一夏なら瞬時加速の構造、今すぐ言えるだろ？」

「ああ、瞬時加速は

一度出したエネルギーを再び吸収・圧縮してその放出したエネルギーで加速

って、なるほど!

だから鈴の龍砲か!」

「そういうこと」

「「?」?」

セシリアと鈴はまだわかっていないようだ

「つまり瞬時加速の吸収するエネルギーは外部エネルギーでもいい
ってことだ

で、外部エネルギーが鈴の龍砲ってこと」

一夏の説明に納得する二人

「で、一夏が右腕を落とし、奴の右腕にある遮断シールドを止めた
ところを俺とセシリアの射撃で動きを止めーーーーー」

そこまで言ったところで声が大音量による声に遮られた

「司！

それくらいの敵くらい早く倒せ！」

放送室からの箒の声

反応しなければよかったもの・・・

それに敵I Sが反応したようで右腕を放送室に向ける

「あー、クソっ！

なんであのイベント忘れてたんだ！

一夏、鈴！今すぐやれ！」

司はそう言うのと直ぐ様瞬時加速をし、彼女の元に急ぐ

「ツチ、原作は撃たなかったろうが！」

司は舌打ちしながらも敵ISの右腕を見ると、そお砲身は既に臨界している

「間に合えええ！」

司が叫ぶのと同時に撃たれる

紙一重で放送室の前に立った司はL96Aの盾を構え、放送室を守る

「一夏あああ！」

「うおおお！」

司の呼び掛けに答えるかのように一夏の大出力の零落白夜が奴の右腕を落とし、セシリアのティアーズが奴の頭、両足、左腕を撃ち抜く

「終わったか・・・」

ビームに耐えきり、ボロボロの装甲を纏った司はそこで意識を失った

「うつ……」

「目が覚めたか」

意識が戻り、辺りを見れば保健室というのがわかった
身体を起こせば全身に痛みが走る

そして傍らにいたのは腕を組んだ千冬がいる

「機体損失レベルCに全身が筋肉の疲労と炎症を起こしている
しばらくはIS実装訓練禁止だ

よくあの馬鹿娘を守りきったな」

「ハハハ……」

乾いた笑い声をあげる司

馬鹿娘とはきつと筭だろう

この様子だとかなり説教されたみたいだ

「まあ、好きな人が守りきれたんなら後悔はしてませんよ」

「まったく、一夏にもその甲斐性を分けてやりたいくらいだな」

「アハハ、アイツは男じゃ特殊ですもんね」

千冬のため息に笑いながら同意する

まあ、その鈍感さで箒をもらった司なのだが・・・

「それでは私は仕事があるから戻るぞ

お前はそのまま部屋に戻っていいからな

それと・・・明日くらいなら休んでも何も言わん」

そう言い残して言った千冬は保健室から出ていき、入れ替わりに箒が入って来た

「まあ、立ってないで座ったらどうだ？」

「う、うむ」

うつむきながら椅子に座る箒
どこか元気がなさそうに見える

互いに沈黙する中、司から切り出す

「なあ、箒

俺はお前を守り切れて後悔してないし、怒ってもないぞ?」

「えっ……」

呆然とする箒

しかし、構わず続ける司

「今は女尊男卑の世界だから分かりにくいが、昔は男が女を守るのは当然だったろ?

俺はそれが当然だったし、その考えは今も捨ててない

だから箒を守れたことに後悔はしてないさ

それに好きな女くらい守らせろ」

「好きな……って!

それじゃあ……」

箒は先ほどの表情から一変
期待の眼差しを向ける

「ああ、お前が好きだ、箒」

「つかっ……ンム!」?

答えてやるなり、抱きつこうとした箒を逆に抱き寄せ、その唇を奪う

ほんのりと甘い匂いと味を感じる司

安心感に包まれ、心地良い温もりを感じる筈

今、このI S学園で数少ない男子である新城司と篠ノ之箒は繋がった・・・

教師としてどうかと・・・(前書き)

こんなリア充いたら死ねばいいのに・・・

とか作りながら思う

けど作者はこんな糖度が高い話は大好きです

教師としてどうかと・・・

ただいま幸せ一杯気分です

あの美少女こと大和撫子のような箒さんがその大きなメロンで腕を挟みながらも腕を抱きしめ、顔を見れば微笑み顔で返してきます

なんという至高の幸せ！

現在、週末の土曜日で学校は休み

というわけで人生初の彼女と共に人生初のデート中というわけである

「そろそろ昼飯でも食うか？」

「そうだな、そうしよう」

まあ、そんなわけで飲食店を探していると・・・

なんの偶然だろうか

左を向けば五半田食堂があった

「ここ、一夏の友達の店らしいし入ってみないか？」

「そうなのか？なら、入ってみよう」

そして、いざ入ってみれば・・・

「お、一夏・・・」

「司、箒?!」

噂をすればなんとやら・・・

そこには隅のテーブルで三人仲良く食べている五半田兄妹と一夏がいた

(あー・・・あれか

五半田兄妹が初登場する場面か)

などと脳内IS二巻を開いて確認する司

「紹介するな、こっちがこの店の子供で兄の五半田弾
それと妹の蘭

で、こっちの長髪がクラスメイトで学園での唯一の男友達の新城司
とさっき話したファースト幼なじみの篠ノ之箒」

「よろしくな」

俺と箒はペコリと挨拶するがなぜだろう・・・
五半田兄妹は睨んできいていた

「お前もあのヘヴンの人間か・・・羨ましい奴め」

「あなたが箒さん・・・」

二人の言葉に納得・・・
とりあえず沈静化させよう

「えっと蘭さんだよな？」

その、箒は一夏争奪戦には参加してないぞ？」

「えっ、ホントですか!？」

「ああ、なんせ俺たち付き合ってるしな」

そして証拠のように箒の腰に腕を回し、抱き寄せる

それを見た蘭はほっとしたように安心し、箒に笑顔を向けた

だが、兄の弾がさらに敵視してきていた

「このリア充め
見せつけか！」

それを言われた俺はつい笑みを浮かべる

これが勝者の気持ちか！

などと思うが、まずは沈静化

「間違えるな、真のリア充は俺たちの横にいる！

コイツはな！」

ここで耳打ちする

蘭に再び火をつけるわけにはいかない

「イギリスの淑女系、中国のツンデレ系にアタックされているにも関わらず気づかない

しかも後にはドイツの天然系、フランスの癒し系、ロシアのお姉さん系、日本の内気メガネ系が加わる

それでも気づかない鈍感さだぞ！

だが、友よ

そんなハーレムを受ける代わりに嫉妬という攻撃をISの攻撃で毎回、受けてみる？

身が持つか？」

言われた弾は攻撃を受けるところを想像するとブルブルと震え出す

「いいか？一夏はなりア充という我らの敵であるのと同時に救ってやらねばやらのだ

だからこの鈍感に必ず俺が一夏の鈍感さが聞かない女を見つけてやる

そうすればお前の妹への心配も減るし、一夏が弟なんて嫌だろ？」

「・・・友よ！！」

ガシッ！と互いに熱い握手を交わす

そして一連の流れを見ていた一夏はというと・・・

「そうか、箒にも恋人ができたか
おめでとう、二人とも」

この発言の瞬間、ガタリと箒が立とうとしたが司が押さえる

「箒・・・諦めろ、コイツは悪意があって言ったわけじゃない」

今にも殺しそうなほどな睨みを利かせる箒を司は必死に抱き寄せて
落ち着かせる

一夏はなぜ箒が怒っているのかわからず戸惑いを見せている

天然、鈍感というものは無意識に人を深く傷つけるものだ

「一夏、俺は時々わざとやってるかと思うんだ」

「箒さんも好きだったんですね・・・」

五半田兄妹も少しながらも箒に同情したようだ

「箒、飯でも食って気分変えようぜ？
いつまでも気にしてても意味ないし、お前には俺がずっと一緒にいてやる」

「・・・うん」

箒は司の胸に抱きつき、司は箒が落ち着くまで頭を撫でてやる

「弾・・・この業火野菜炒めと大盛りチャーハンを頼む
二人で食べるから箸とかは二つな？」

「おう、わかった

一夏、ちよっと席外せ！」

「えっ、なんでだよ！」

「いいから来い！」

弾に連れてかれて席を外す二人

弾は空気を読んだのだろう

一夏がいなくなり、少し落ち着いた箒は司から身体を離す

残された蘭は二人に微笑む

「箒さんは優しい彼氏さんを見つけたんですね
正直、司さんのフォローが羨ましく思いました

一夏さんが最初好きだったんですね？」

「・・・ああ、久しぶりに会った一夏が好きだった

司にも手伝ってもらいながらも必死に一夏にアタックしたさ

けど、一夏には全く効かなかった

同居してる時にはかなり勇気を振り切ってアピールしたさ
それでも振り向いてくれない

ほとんどが一夏には想いが届かず、仲のいい幼馴染染まりで終わってんだ

そんな一ヶ月を過ごしていく中、自分を助けてくれたり、支えてくれたりした司がいつの間にか好きになってな・・・

さっきの一夏はムカついたが私には一夏よりもいい男・・・司がいるんだ

一夏はもう私にとってただの幼なじみで友人みたいなものだ」

「ありがとな、俺を選んでくれて」

「それはこちらのセリフだ・・・」

互いに笑みを浮かべ合う二人

それは思春期真っ最中の蘭にはとても素晴らしい光景だった

「私、必ず二人のようなカップルになるように頑張ります！
お似合いですもん、二人とも

さあ、お料理来ましたし、ごゆっくりどうぞ♪」

横を向けば料理を運んで来た弾の姿が・・・

「いただきます」

熱々の中華料理を二人は仲良く食べ始めた・・・

かくして、腹を満たした二人は今は街中のショッピングセンターに戻っていた

「どの色がいいだろうか・・・」

「このグレーのジャケットはどうだ？」

「わかった・・・ちょっと待っててくれ」

そう言って試着室に行く筈

しばらくしてからカーテンから出てきた筈に目を向けると・・・口が塞がらなかった

白シャツにグレーのジャケット、デニムのショートパンツに黒いブリーツ

お姉さんっぽいがその中にある可愛さ、女性ではちょっと背が高めの箒には似合っており、つつい見惚れてしまう

「その・・・似合っていないか？」

チラチラとこちらを見ながら恥ずかしがる箒

（恋は盲目というが・・・うん、箒がめっちゃくちゃ可愛く見える）

そんな表情が可愛さあまりに・・・

「毎度ありがとうございます」

先ほどの服一式をすべて司持ちで買った

諭吉さんが三枚ほど財布から消滅したが司はなんのダメージを食らっていないかった

「よかったのか？」

結構高かっただろう？」

「何、デートは基本的に男が払うもんだ
気にするな

ありがたく思うなら、今度出かける時にそれ来てくれよ」

「わ、わかった！

ありがとな、いろいろと」

箒が嬉しそうに喜ぶ顔を見た司はそれだけで満足だった

そして手を繋ぎながら学園に帰るなり、ちょうどバッテリー山田先生に会った

「あ、もしかしてデートの帰りでしたか？」

改めて他人に言われ、恥ずかしく思う二人

そんな初々しい二人に思わず微笑んでしまう真耶

「そうですね、別に恋人同士なら『間違い』が起きても問題ないでしょう」

「??.」

はて、真耶の話が読めない二人は首を傾げる

「箒さん、お引越です」

今日中に隣の司さんの部屋に移動してください！」

「「Σ（。!?!）」」

表情はきつとこんな感じじゃないだろうか・・・

司が自分と箒を指しながら呟く

「まさか、『間違い』って・・・」

「ええ、何をしてもバレないなら大丈夫だと思いますし、ナニをしても恋人同士なら問題ないでしょう」

ボンッ！

それなりに知識がある二人は噴火した

「では、同居もとい同棲生活をごゆつくり！」

健全な高校生活を目指してくださいね」

去っていく真耶に呆然と立ち尽くす二人

そしてしばらく立ち、落ち着いたのか箸から話出す

「ふつつか者ですが、よろしく願いします」

「こちらこそ・・・」

日本人特有だろう・・・こんなやり取りは

こうして二人は同棲生活が始まった

買取してイチャイチャ（前書き）

今日は微糖です

買取してイチヤイチヤ

「えっと新しい転校生を紹介しますね」

はい、キマシター

シャルル、ラウライイベントキマシター

「シャルル・デュノアです

こちらに同じ境遇の方がいると聞いて転校してきました」

うん、一番人気のシャルルはめっちゃ可愛いです
もはや輝きが見えるほどです

ニコリ

クラスの女子の急所にあたった
ダメージ9989

なんという破壊力！

その美しい笑顔にクラスの女子は大半が気を失いかける

しかし・・・

「ラウラ・ボーディツヒだ」

「えっと、それだけですか？」

「以上だ」

シャルルが太陽ならラウラは月だろう

そんな冷たい態度に気を失いかけた女子は意識を取り戻す

さあて、そろそろだな・・・

俺は右拳を握りしめ、準備をする

「貴様がっ！」

ラウラが一夏の前立った瞬間

「死ねえええ！」

ガツン

俺は容赦なく前の席に座る一夏の後頭部を殴る

それにより一夏は頭を下げる形になり、ラウラの手は空を切る

「すまん、蚊がいたもんでな

ついマジでやっちゃったぜ」

「ついで殴るああ！」

やれやれと言った表情で肩をすくめる俺に一夏は頭を抑えながら叫ぶ

そんなバカのようなやり取りの中、ラウラは無言でコチラを睨み、

それを俺は微笑みながら言ってる

「どうしたんだ、ボーディツヒさん？
手なんて抑えて

俺は蚊を殺し損ねましたかね？

席についたらどうです？」

「ああ、そうするとしよう」

互いに目を合わせない

だが、確かに敵対した
先ほどのやり取りで・・・

「では、一限はI S実戦訓練だ

織斑、新城が同じ男ということでデュノアの世話をしろ

解散！」

千冬の声と共に俺と一夏は早々に席を立つ

「一夏、デュノアの手を引きながら出るぞ
さっさと出るぞ」

「ああ、そうだな」

「えっ、ええっ？」

いきなりのことには戸惑うシャルルだが急がなければ俺たち男は社会的に抹殺される

「女子は教室で着替えるから男子は空いてるアリーナの更衣室で着替え

移動の度にこれだから早めに慣れてくれ」

「う、うん」

おどおどする表情のシャルル

うん、実は女の子だもんな
恥ずかしいよな・・・

そんなことを思いながらも後方に毎度現れる敵が現れる

「転校生発見！

ついでに男子二人ともよ！」

「者共！出会え、出会え！」

「クッ、一夏逃げるぞ！」

窓、天井、床

いろんなところから沸いてくる女子から逃走を始める
いつからこの学園の女子は忍者になった？

「ねえ、ここ学園だよね？」

なんか映画みたいになってるよ？」

「いつものことだ!」

気にしたら負け

そう決めてる俺は必死に魔の手から逃げた

「フウ、間に合ったな・・・」

ただいまグラウンドに向かっている三人

先ほど更衣室でシャルルが顔を赤くしたのは定番だろう

そして自己紹介を終えた三人は名前で呼びあってる

「遅い!」

バシン×3

男子全員が頭に出席簿アタックを食らう

初めて食らったシャルルに至っては涙目だ

「授業に遅れるとこうなるから気を付けろよ？」

コクコクと頷くシャルルは小動物みたいで可愛かった

その後、小説と変わらず山田先生が威厳を取り戻すかのように鈴とセシリアがフルボッコされた

そして現在、各班に別れてIS装備訓練をしているわけだが・・・

「新城くん、登れない！」

と、訓練機を乗るのに手伝い

「助けてー、転んじゃう！」

と、歩行訓練に付き添ったりなどと真面目にやってるがそれが嫉妬に繋がったのだろうか・・・

自分の彼女はややご立腹のようだ

一応、箒も同じ班であり、三人目である

「嫉妬してくれたのは嬉しいけど、機嫌治してくれないか？」

「・・・・・・・・」

無視ですかい……
なら、仕方ない
彼女だからこそ特別サービスだ

「よっ・・と」

「なあ!？」

離せ、馬鹿者!」

俗に言うお姫様抱っこ
同じ班の女子が文句を言うが・・

「悪いな、大切な彼女だから少しサービスしたただけだ

まあ、彼女の特権ということだから、諦めてくれ」

「「「えっ?」「」」」

(。Д。(。(。Д。(。(。Д。)

ポカンと呆然とする同じ班の女子四人

「あれ?言ってなかったっけ?

俺、新城司は篠ノ之箒の恋人なんで過度なサービスを期待してるみたいだが諦めてくれ」

「ええええっ!？」

そう叫ぶ四人は放置して訓練、訓練

だが、箒が顔を赤くしながら口をパクパクさせている

(アハハ、驚いてる♪)

箒の反応を楽しみながらも打鉄に乘せるが・・・

次の瞬間、復活した箒が近接ブレードで斬りかかって来た

「なっ、なんでバラした!?!」

「あつぶね!?!」

間一髪で避ける

あゝ、照れ隠しに近接ブレードは危ないぜ・・・
箒を沈静化させなければ・・・

「・・・良かれと思ってお姫様だっこしたんだが嫌だったか

それにこうしてバラしたほうが俺を狙う女子は減ると思ったんだが
な・・・

箒を思ってしまったが逆に怒らせたしまった・・・
ごめんな、箒・・・」

「えっ・・・いや、そのだな・・・」

ペコリと頭を下げると狼狽える箒

何？黒いだって？

主導権握ってるだけだ

もう一押しか？

「箒は・・・俺のこと嫌いかな？」

「馬鹿者！」

チラッと目だけで箒を見るとそれで勝負は決まった

「私が司を嫌いになるものか！」

私のことをそこまで考えてくれたなんて嬉しい限りだ！」

「俺も好きだ、箒」

抱きつく箒を受け止める

うん、素直な箒は可愛いです

抱き心地とか最高です

「てなわけでもう班全員終わったって織斑先生に伝えて」

「え、まだ私が・・・」

うん、終わってないよね

だからこそカードは用意してある

「一夏の寝顔写メいらんのか？」

「「「はい、喜んで！」「」」

そして四人で千冬の元に行く
人間、欲には忠実だよな

「箒・・・」

顔を上げた時に辺りを確認してから一瞬だけで、おでこにキスをする

「訓練中だから訓練しよう
今はそれで我慢してくれ」

コクリ

何も言わずに頷く箒

そんな箒がまた可愛い

などと思いつつ二人っきりの訓練に勤しんだ

さてはて、なんだかんだで午前中のIS訓練が終わり、ただいま片付け中なわけでした

「お前らズリーぞ」

「何を言う、仲間の信頼の差がコレだぞ？」

「これも訓練のうちだ、馬鹿者」

訓練用ISをカートで格納庫まで運ぶわけだが

一夏は一人

こっちは箒と二人

人一人変わるだけでだいぶ変わる
それほどまでにIS自体重いのだ

「一夏、手伝おうか？」

お、ここでシャルちゃん登場

そーいやフラグ的にシャルルートが一番人気だったもんな・・・

「いや、大丈夫だ

男の意地として運び切る！」

「男の意地ね・・・」

おいおい、シャルルが引いてるぞ一夏

まあ、そんなシャルルの姿を女性から見てもらうとどうなのだろうか？

「なあ、箒

シャルルなんだが女性の視点から見るとどんな感じだ？

その体型とか、雰囲気とか

なんか女っぽいよな？」

「言われて見れば・・・そうだな

男の割りに腰周りが細いし、背も低い・・・足も細いし、肌も白い・・・羨ましいなあ・・・」

「俺は今の箒が一番好きだぞ？

体型も十分好みだ

そんなに気にするな」

「そ、そうか！

なら、よしとしよう」

うん、そのメロンとか男のロマンの塊ですから

「でだ、仮にだ

シャルルが男装してたとしたら？」

「馬鹿な・・・」

「ニュースで三人目の男子とか出てもないのに？」

そこで箒が考え込む・・・

だっておかしいもんな

ニュースで全くでないなんて

「だからさ、今晚調べてみようぜ？

男なら俺が、女なら箒が対処できるだろう？」

「うむ、そうだな」

こうして、原作とは違って早い展開でシャルちゃんになるのである

とあるイギリス娘のきっかけ（前書き）

セシリアを一夏フラグに復活させようと

時期的にセシリアイベントが終わったあとくらいです

少々無理やり感がありますが、多目に見てください

m () m

とあるイギリス娘のきっかけ

「全く・・・司さんが外出なんて・・・」

セシリアは、はあくため息をつきながら学園外のショッピングモールに足を運ぶ

ショッピングでもして気分を変えようと・・・

「いらっしゃいませ」

デパ地下にあるブランド店に訪れ、夏物の服を探そうとした

「今日はどのような物をお探しに来ましたか？」

店の店員であろう

女性店員が聞きにくる

「早めに夏物を買おうと思ひまして・・・

ワンピースタイプでオススメはありませんか？」

「でしたら、こちらの袖口にフリルが着いた白いワンピースに黒いタイツはどうでしょうか？」

タイツなら日焼け対策にもなりますし、冷え性にも防止になります
このワンピースにワンポイントとして腕にアクセサリーを身に付け
れば可愛いと思います」

「そうですね・・・」

セシリアはムムムと悩みながら他の品を見ていく

しかしどれもパツとしないため結局、最初の白いワンピースのセッ
トを買うことにした

そこで店の出入口付近で何やら騒がしいことに気づく

「何かありました?」

「なんかあの女性が見ず知らずの若い男の子に荷物を持たせようと
したみたいなんだよ

やゝね、最近の若い娘は・・・」

少々歳を取った親切な女性が教えてくれたことに感謝しながらもセ
シリアは喧騒の中心を見る

(い、一夏さん!?)

まさか同じクラスメートがいたとは思わなかった

「いいから持ちなさいよ!」

「だから何様だ!」

明らかに女性の押し付けだ

女尊男卑の絵図だろう

今思えば少し前の自分を見ている気分だった

（けど、必ずしも女性が強いわけではなく、女性が正しいわけでは
ありませんわ）

そう考えを改めたセシリアはクラスメートを助けに入った

「ちょっとよろしくて？」

「何よ!？」

「セシリア!？」

一夏が素直に従わないためか女性是不機嫌だった

一夏は一夏で自分の登場に驚いてる

「先ほどから様子を見させていたきましたが、私のクラスメート
に手を出さないでくれませんか？」

先ほどから品のない理不尽な発言

一夏さんは何も悪くないのにあんまりですわ」

「別に男が女の荷物係なんてどこが悪いのよ!」

そんな発言にセシリアはあからさまなため息と共に肩を竦める

「これだから器量のない女性は・・・
まあ、今さらですわね

確かに今は女尊男卑のような世界ですが、
それに甘えて見ず知らずの他人の男性に荷物を持たせようなんて大
人がやることですか？

いい大人が子供じみた行為をするなんて恥ずかしくないのですか？
それとも、それすらも気づかない低能な女性なのかしら」

「・・・いい加減にしなさい、小娘！」

毒舌じみた発言だが、正論を言われた女性は八つ当たりのようにセ
シリアを叩こうとするが・・・

「やめろ、手を出すな」

「一夏さん・・・」

セシリアを守るかのように抱き寄せ、女の腕を掴み、ドスの効いた
低い声で睨む一夏

ついセシリアはそんな一夏に見惚れる

「っち・・・」

ギャラリィも増え、居心地が悪くなった女性は舌打ちをしてその場
を去った

「ありがとな、セシリア
おかげで助かった」

「いえ、私こそお礼を言うべきですわ
守っていただきありがとうございますわ」

場所は変わって喫茶店

セシリアの内心では見上げた時に見えた相手を睨んでる一夏の顔と
抱き抱えられた感触がいまだに残っていた

気持ちを落ち着かせようと話題を変える

「一夏さんはなんであんなところにいたのです？」

あそこは女性服などが多く売っているところですよ？」

そう

セシリアと一夏がいたのは女性服やブランド物を扱っている店が多く、
男性が訪れるのはカップルかプレゼント目的だろう

しかし、この鈍感一夏にはそんなことが当てはまるわけがない

「実はだな・・・千冬姉にこのブランドのスーツを買ってくるよう

に頼まれたんだがどこにあるかわからなくてな・・・」

写真を見せてもらいスーツを見る

黒いスーツだが薄く縦模様が入っており、胸元の金色の刺繍が特徴
なんだろう

そしてそのブランドマークを知っているセシリアは笑顔を浮かべる

「そのブランドを扱っているお店なら知ってますわ」

「本当か!？」

その・・・案内頼めるか？」

(か、可愛いですわね!)

普段、司とは違ったカッコよさを見せる一夏が戸惑いながらも期待
の眼差しを向けるそのギャップにセシリアの母性がくすぐられる

「もちろんですわ!」

今日は一夏と会えて、良かった

そう思ったセシリアは一夏との買い物気分を楽しもうと思ったので
あった

それが後日からだんだん一夏に想いを寄せていることに気づかずに・
・

シャルルイベント(前書き)

ピロリン♪

一夏のレベルが上がった
称号「スケベ大魔王」を手にいれた

シャルルイベント

時刻は夜――――

『コンコン』

「開いてますよ」

一夏の声にドアを開ける

「司に筭か、どうした？」

「いんや、シャルルと親睦を深めようとな

シャルルはどうした？」

「シャワー中」

どうやらシャワー中だったようだ・・・

耳を澄ませば水音が聞こえる

「一夏、私がいなくなっても整理整頓はしてるんだな」

「そうだな、まあ家ではそれなり家事やってたしな」

確かにこの部屋は結構片付いている

そうだ、一夏は無駄に家事スキルを持っていたんだ

まあ、そんなこんなで雑談をしていると・・・

洗面所方面から水音が消える

なんでわかるかって？

そりゃ髪で隠しながらも耳の部分だけ部分展開して音拾ってますから

そこで計画を実行

「一夏、頭にホコリついてるぞ？」

「えっ？どこに？」

もちろんこれは嘘
だが、確認のためだ

「鏡見てこい
右側のほうだ」

「おう、わかった」

そのまま洗面所に向かう一夏

そんな一夏を見た箒が訪ねてくる

「ホントにこんなものでわかるのか？」

「ああ、ちょうどシャルルがシャワーから出たタイミングに合わせてたからな

このまま一夏が戻ってくれば杞憂だったということだ

何かしら悲鳴が上がったらアウトってことで箒の出番ってことさ」

「そういうことか

ところで司

アウトだったら一夏は制裁しとくべきだろうか」

「それなりに頼む」

うん、リア充の罰だ

我が嫁の制裁は喰らっておけ

などと思っていると・・・

「キャアア！」

「はい、アウト」

箒さんが出動しました・・・

「よう、変態」

「理不尽だ・・・」

そこには両頬に紅葉跡をつけた一夏がいた

「シャルルの感想は？」

「可愛かった・・・つか、胸がきれい・・・ハッ！！
(。；、)」

「墓穴掘ったな

そんなお前にスケベ大魔王の称号をやるう」

「入らねえよ！」

一夏はそう抗議するが時はすでに遅し・・・

司の背後には女子『二人』がいた

シャルルは顔を赤くし、箒はシャルルを背後に回し守るかのよう
に立っている

「一夏、明日皆にその称号を伝えておいてやる
安心しろ」

「ヤメテー！」

幼なじみにさえ、白い目を向けられる一夏はちょっと哀れであった

「で、シャルル

どうして男装しているのか聞かせて貰おうか」

「う、うん・・・」

バレてしまった影響だろう

顔色は悪い・・・

「実は実家からそう命令されてね・・・」

「えっ、けど親がそんな命令出すなんて・・・」

「一夏、僕は愛人の子なんだ

だから母が病死してから父に引き取られた

けど、実家では邪魔者扱い

父も僕を娘扱いしなかった

最初は引き取られた時はなんで迎えてくれなかったかわからなかったけど、父の現在の奥さんに

『この泥棒猫の娘が!』

って殴られた時に初めて理解したんだと思う

ああ、僕は利用する道具のために引き取られたんだってね・・・

で、この学園に来たのは・・・」

「各国ISのデータと世界で二人の男性IS操縦者のデータの採集つまり作業員として入れられた

仮にそのことがバレたとしても親を想う子が良かれと思ってやった勝手な行為だと

自分は娘がただ単にIS学園に入学したいだけだと思っていた簡単に切り捨てられるし、使い勝手がいい人間だろう」

「察してくれてありがとう」

元気のない笑顔を向けてくるシャルルがとても痛々しかった

「しかし、デュノア社は世界ISシェア第三位だろうなぜ、そんな外道な行為を・・・」

箒の意見はもつともだ

それをシャルルが説明する

「今欧州ではイグニッション・プランっていう各国が第三世代型ISの開発に急いでるんだよ

そのプランのトライアルの選定中のISがイギリスのブルー・テイアーズ、ドイツのシュヴァルツ・レーゲン、イタリアのテンペスト?

これで選ばればシェアは間違いないんだけど
僕の国、フランスは世界でも最後発でIS開発に入ったから今、や
っと第二世代型ができたところなんだ

だけど政府はそんなデュノア社に次のトライアルに選ばなければ
政府からの支援金はなしという命令が下ってね・・・」

「だから第三世代型ISが見れるIS学園に入学させたわけだな」

「そういうこと・・・」

まあ、入学初日にバレちゃったし、僕は呼び戻されて良くて実験台
悪くて極刑だろうね

ありがとう、最後にみんなに話して楽になったよ・・・」

年端もいかない十代の子がこんな表情をするなんて・・・
司は怒りが内心を占めていくのを感じた

すると一夏が口を開いた

「それでいいわけじゃないだろ・・・」

確かに親がいなけりゃ俺達子供は生まれねえ

けど、その子供に何しても許されるわけじゃねえ
誰にだって人権がある！

生き方を自分で決める管理はあるだろう！」

「けど、僕にはもう選択肢がないんだよ
今さらどうすることもできない」

シャルルの輝きのない瞳にはもはや力がなかった・・・
だが一夏はあきらめていなかった

「特記事項第二一に書いてある

内容はこの学園に在学中はいかなる国家や組織であってもそのいかなる存在に帰属しない

つまりこの学園にいる限りは安全だってことさ」

「一夏・・・

特記事項なんて五十五個もあるのによく覚えれたね」

「俺は勤勉なんだよ」

「そうだね、アハハ」

シャルルが笑い出したのをきっかけにさっきの雰囲気から一転

明るい雰囲気になっていた

そんな雰囲気蚊帳の外二人がわざとらしく聞こえる声で話し出していた

そう、わざとらしくだ

「ちよいと箒さんや

あの二人の雰囲気甘いすぜ？」

「全くけしからん

しかも先ほどから真面目に話していながらも彼女の胸ばかり見ている
やはりスケベ大魔王の称号は嘘じゃないな・・・」

「おい、聞こえるぞ！」

ひそひそと話す声に一夏は真っ赤になりながら抗議する
そしてシャルルを見てみれば・・・

「そうだったの？

一夏のえっち！」

もはや名言にもなっているシャルルのえっち発言に一夏はさらに慌
てて何か言おうとするが・・・

「やはりハーレム体質な一夏にはスケベ大魔王は素晴らしい称号だ
な」

「シャルル、襲われそうになったらいつでも隣の私達の元に来ると
いい

必ず保護し、一夏を制裁してやろう」

「もうお前ら、しゃべんな！」

火に油

一夏は叫ぶ

「うん、そうするよ!」

「ちよっ!そこ頷くなよ!」

もはやツツコミになっている

「「やだなく、冗談だ(よ)」」

「冗談に聞こえねえよ!」

存分に弄られた一夏はこの数コマの会話でかなり疲労した

その後、部屋に戻り就寝に就こうとしていたが・・・

「あのー、箒さん?」

「なんだ、司？」

「これは一体どういうことでしょうか？」

「なんだ？嬉しくないのか？」

ただいま理性が本能の襲撃に必死に耐えています・

なぜでしょう・・・

箒が自分のベッドに入り込んでいます

就寝着なんで服は薄く、メロンがかなりダイレクトに感じていて感極まらないです・・・

「・・・いや、嬉しいけど普段ならこんなことしないよな？」

付き合って同室になってから一週間

一度も一緒に寝ていない

さすがに健全な高校生活を送るにもそれはマズイと思うのだが・・・

「いや・・・な、あの鈍感一夏がシャルルの胸を見た時になぜシャル

ルの時は女として見ているのに

私の時は反応しなかったのか

何やら悔しくてな」

「つまり八つ当たりか？」

「む、そういうことだな」

八つ当たりで胸を当てるかのように男のベッドに侵入するのはどうかと思う

「俺が襲うかもしれないぞ？」

「いきなり身体を求めるような男じゃないと信じてるからな」

（クソー、なんか悔しいな

確かにそうだけども・・・）

確かに付き合っすぐ肉体関係はどうかと思うし、そこらへんを信頼してくれてるのは嬉しい

嬉しいけど・・・

「眠れません・・・」

「私は眠れる

おやすみ、司」

チクショー！

そう思いながらも理性と戦いながら夜はふけていった

司ザマァゝ（前書き）

女神の攻撃

司にはこうかばつぐんだ！

司ザマァ」

「ん？ここは？」

気づけば何やら真っ白な空間にいた

そうまるで死んだ時のような・・・

「やあ、お久し」

「女神！？」

「お、よく覚えてたね

ちなみに今は君の夢の中」

ふわりと現れた青い髪の女性――女神は相変わらずフレンドリーであった

「いきなり会いに来たってことは何か用があったのか？」

「いや、それがちよいと数十年の休暇を貰ったからさ」

「休暇！？

女神にも休暇ってあんの！？」

「そりゃあるよ

神様だってたくさんいるわけだしね

ってことで君の世界に遊びに行くことにしたよ」

Σ（。；）

「なんだい、その顔は」

「いや、驚きのあまりにな・・・

てか、どうやって現れるつもりだよ？」

「それはお楽しみ♪」

「嫌な予感しかしねー・・・」

ため息をつく

するとだんだん視界がボヤけていく

「さて起きる時間だよ
またね！」

そう言って消える女神

そして次に現れたのは・・・

「起きんか、馬鹿者！！」

「ゴフツ！？」

「ギャアアア！」

腹にアツパーを食らい、更にアイアンクロード締め上げられる

「起きたか、馬鹿者

いつまでも寝るんじゃないぞ、親御さんに恥をかかせるな」

ん？待て待て・・・

今、千冬さんは何とおっしゃいましたか？

「いえいえ、千冬さんの生徒指導はとても勉強になります

私の息子が悪いのですから、ビシバシ鍛えてやってください」

ギギギ

首を動かしたくないのか

錆び付いたかのようにうまく動かなかった

「わかりました

新城先生がそう仰るなら・・・

さて、紹介しよう

今の流れでわかるように

新城司の母親だが、今日からしばらくはIS教員実習生としてウチのクラスに来た

新城^{かいな}海奈先生だ

失礼のないようにな」

「わぁ・・・綺麗」

「ホントに新城君のお母さん？」

「若く見える・・・」

女子が憧れの眼差しを向けている

艶があり、腰まで届く長い髪は、色こそ青から黒に変わっているがその端正な顔立ちとソプラノの声は間違いなくフレンドリーな女神だった

「みなさん、よろしくね♪」

（くそ女神が1日中同じクラスだと?!）

俺の筈との学園生活があああ!）

司は血の涙を流したい気持ちだった

二日で13万アクセス・・・(前書き)

会話中心

二日で13万アクセス・・・

司、箒、一（一夏）

「13万アクセスおめでとう！」

作（作者）「ありり！」

作「いや、まさか作成二日目で13万行くとは・・・意外だったな」

司「これは俺の活躍でだな」

一「司、意外にも黒いからな・・・」

箒「読者の意見はどうなんだ？」

作「えっとだな、聞いて驚くなよ？」

一番人気は箒ちゃんです！」

三人「えっ!？」

作「デレたところや初々しいところがいいらしく
ギャップが可愛いそうです！」

これからもデレたら人気上昇、司も喜ぶ
一石二鳥！」

箒「司が・・喜ぶ・・一番人気・・エヘヘ

(自分の世界にトリップ中)

司、一「俺達は!?!」

作「ん? ああ、お前達はな・・・

死ねよ

首、もげろよ

消えろよ

もげちゃえよ

その他etc」

司、一「・・・なんで暴言?」

作「リア充死ねよ」

司、一「ブルータス、お前もか!?!」

作「ハイハイ、この辺で終わりにしましょう

箒、帰って来い

挨拶するぞ」

箒「あ、ああ」

作、箒「それでは読者のみなさんありがとうございます!」

司、一「ありがとうございます……」

作「次話から司の日常崩壊です♪」

司「イヤー！」

女神「イヤアア！」

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

・
・

女神「アハッ♪

読者のみんな、よろしくね♪」

母親・・・(前書き)

短めです

母親・・・

一限終了後――

「一夏、購ば「司ちゃん！」

海奈の抱きつきによって・・・

「たまには水入らずで過ごせよ」

と、逃げ切れず・・・

二限目IS実習訓練では・・・

「そのタイミングで相手の利き腕とは逆の方向に避けるんだ」

「なるほど・・・ありがとう、司」

「箒のためなら俺はなんだって「コラッ！」

愛しの箒の頭を撫でようとした瞬間・・・

打鉄を装備した海奈が二人の間に近接ブレードを挟む

「不純異性交遊はいけません！」

と、邪魔をされた
どこの優等生だ……

昼休み――――

「箒、一夏！

飯に行こ『1―1の新城司君、至急職員室まで来なさい』

と呼ば出されたと思えば、

「さあ、司ちゃん

お弁当食べましょ♪」

と一緒に昼飯を食わされた

放課後――――

さすがに放課後は先生権限使えないだろう

そう思ったが甘かった

「部屋まで来ればもう大丈夫……」

「お帰りなさい、司ちゃん♪
ご飯できてるわよ？」

「部屋間違えました・・・」

なぜだろう

鍵は俺と箒しか持っていないはず・・・

再び開けて見る

「あ、お風『ボタン!』」

間違いなく女神がいた・・・

確かに笑顔だったが、今の俺にはストレス対象だった

仕方なく、扉を開けて彼女の存在を認める

「はあああああ・・・・・・・・・・・・鬱だ」

諦めて扉を開ける

「なんて顔してるんだよ」

「お前のせいだ、女神

せめて部屋くらい邪魔しないでくれ・・・
箸との時間くらい取らないでくれ・・・」

俺は心底嫌そうに言う。と女神は驚いた表情なり、扉に手をかける

「そっか、ゴメンね

母親って難しいね・・・」

そう言い残して出ていく女神

残された俺は・・・

「なんだよ、それ」

居心地悪かった

まるで自分が悪かったかのように・・・

(怒られちゃったな・・・)

女神・・・海奈は苦笑を浮かべた

自分のミスで殺してしまった子

その子には母親がいなかった・・・

だから、休暇を貰った際に母親の代わりをやってみようと思ったの
だが上手いかず怒らせてしまったのだ・・・

「けど、簡単に諦めるもんか！
頑張るぞ！」

しかし、彼女は落ち込むわけではなく、前を向く

前向き、ポジティブな女神であった

司は・・・私のものだ by 帚（前書き）

司、大胆♪

司は・・・私のものだ by 箒

次の日――

昨日ほど過激なスキンシップはなくなったが・・・

「司・・・その弁当は？」

「えつとだな・・・母さんが俺に用意したみたいなんだ

あ、けど箒が作ったのも食べるぞ？」

「そ、そうか・・・

では・・・あゝん」

「あゝん、

ん、やっぱり箒の料理は最高だよ」

と、箒特製弁当を食べながらも折角作った弁当を無下にできるはずもなく女神の弁当も完食

ちなみに味は美味しいのだ

時間は変わって放課後

「一夏、今日も放課後練習するよね？」

「おう、シャルル

そうだ、司と箒も行かないか？」

そう言われた俺は考える・・・

そうだな・・・今の時間なら女神はもう来ないし・・・

「そうだな・・・箒の近接訓練もあるし、行こうかな」

というわけで第三アリーナに移動

第三アリーナの入り口付近に着くと、突如爆発音が聞こえた

「何かあったのか？」

「ならこっちで様子見ていこうよ」

一夏の疑問に答えたのはシャルル

そして示したのは観戦用のモニター

確かに中に入るよりもこっちで見たほうが断然早い

そして映し出されたのは、

「セシリア、鈴！」

装甲はボロボロの二人

そしてもう一機は損傷軽微のラウラー―シューヴァルツェア・レー
ゲンだった

（ああ、ラウライベントか・・・）

俺はモニターに釘付けになっている二人を放って先に行こうとした
が・・・

「気をつけてな・・・」

「ああ、行ってくる」

俺の嫁さんには気づかれたみたいだ・・・

そして、模擬戦から離れているBピットでISを展開

距離は900メートルほど離れている
それほどまでにアリーナはデカイのだ

L96A展開

弾薬選択

貫通弾

そしてスコープを覗く

狙うはあの鈴とラウラの間・・・
こちらに注意を向ければいい

タイミングを合わせて俺は引き金を引いた

「終わりか？ならば・・・私の番だ」

ラウラは目の前の獲物を見る
すでに装甲はボロボロであり、なんとか意識を保っているものの立

てないくらいにダメージを負っている鈴とセシリア

そんな2人にラウラは無慈悲にもプラズマ手刀を展開し、瞬時加速で留めを刺そうとした瞬間

『ピー、ピー』

いきなりハイパーセンサーから警告音が鳴り響く

「何!？」

ブースターで急制動をかけ、その場に止まった瞬間

『チュイン!』

ラウラの目の前を何か通りすぎ、直後すぐ横の土がそれによって捲れ上がった

それが攻撃というのがすぐにわかったラウラは振り返る

「射角・・・方向・・・そこかあ!!」

右肩のレール・カノンでBピットを撃つ

衝撃で煙が上がるがすぐにそれは払われた

L96Aを振りぬいた司だ

「また貴様か・・・」

転校初日・・・織斑一夏への宣言とともに出鼻を挫いた男・・・
冷酷のような睨みを利かせるラウラにひるむこともなく、むしろ笑みを浮かべている司はしゃべりだした

「よお、ちびっこ

弱いもの虐めは楽しいか？

偉そうな態度の割にはその職業とは反対のことしてるなよ、貧乳

軍人は民を守る職業だろうが

一步間違えればそいつら死ぬぜ？

それすらもわからないのか？

ああ、悪かった

身体も小さければそんなこともわからないガキだったか・・・

こりゃあ、失敬」

「き、き、貴様あああ！！！」

数々の容姿の暴言

ラウラは怒り心頭にレール・カノンを連射する

しかし司はそれをことごとく避けていく

「おーい、よく狙えよ」

それでも軍人かよ

さっきは『わざと外して』やったが・・・」

ワイヤーブレードでの攻撃をバレルロールや縦、横、時には弾いて捌く

「そこっ！」

ワイヤーブレードで司の動きが止まった瞬間、レール・カノンを叩き込む

「新城・・・」

ボロボロの鈴は煙の奥を見つめているが・・・
仮にも助けられた身だ、今は少しばかり感謝し、心配そうに見ていた

「司さんなら大丈夫ですわ」

「けど、さすがにアレは・・・」

鈴が言いよどむが、セシリアは笑顔で言った

「司さんは・・・今までまともな被弾率0ですわよ？」

そうセシリアが呟いた瞬間煙を貫いて弾丸が飛び出してくる

「実弾など！」

シュヴァルツェア・レーゲンの特殊装備A I Cが作動するが弾丸は突如目の前で割れると三つに別れた

一つはA I Cで止まるも、二つはラウラの横で止まる

その瞬間、小規模な爆発が起き、ラウラのシールドエネルギーを削る

「もう終わりか？」

やっぱり、特殊装備がなければただの雑・魚だな

まだ一夏のほうが楽しめるわ

ああ、けどまあ少しは褒めてやるよ

さっきの砲撃はよかったぞ？カス」

高らかに笑い声をあげる司はもはやラウラに取ってその声すら屈辱だった

するとある人物が現れる

「全く・・・火に油を注いでどうする」

「司ちゃん、もう少しまともな助け方があるでしょう・・・」

両者の間に入ったのは千冬と海奈であった

「模擬戦をするのは構わないがアリーナのシールドを壊すまでやるのは見逃すことはできない」

「だから続きは学年別トーナメントでやってもらうよ？
二人ともこれは命令だよ？」

言い方こそ柔らかいが威圧感を醸しだす二人

「教官がそう仰るなら」

「俺も別に構わないですよー」

その返事を聞くなり、千冬は改めてアリーナ内にいる生徒に向けて
叫ぶ

「では、学年別トーナメントまでの間、一切の私闘を禁ずる！解散
！」

千冬が強く手を叩いたのを合図に去っていく生徒

「おい、最後に言わせろ

お前が余裕ぶっこいているのは構わないが・・・俺と戦う前に一夏
に足元掬われるぜ？」

「ふん、あの男など壁にもならん」

それを最後に二人はその場を去った・・・

場所は保健室・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ベッドに座りながらも包帯ぐるぐる巻きの彼女達二人はムスツとしている

すると保健室に一夏とシャルルが入るなり・・・

「別に助けてくれなくてもよかったのに」

「あのまま続ければ勝っていましたわ」

「・・・ほう、私の司に感謝の言葉すらないのか」

「「いひゃい！」」

一夏が入ってくるなりこの言い草である

そう意地を張る彼女達に箒が軽く肩を叩くだけでこれである

「箒もよせて・・・」

まあ、怪我の割には元気で安心したぜ」

「こんな怪我程度・・・」

「別に対したダメージじゃないわよ」

「司が助けなかったら更に悪化したはずだから・・・」

「いたああ！」

「つつうう！」

「お前ら、バカだろ・・・」

再び箒にやられる二人を一夏は呆れた眼差しを向ける

「まあまあ、箒もその辺にしてあげたら？」

二人とも好きな人にカッコ悪いところを見られたくないだけだよ

箒だってわかるでしょ？」

「まあ、そうだな」

シャルルの言葉に顔を真っ赤にする二人

何やらトリップ中だが・・・

そんな二人にアドバイスが飛んでくる

「しかし、たまには素直になることだぞ
いつまでも意地を張っていると、バカには通用しねえぞ」

「司さん！」

「新城！」

セシリアと鈴は助けてくれた本人の登場に声をあげる

「司、大丈夫だったか？」

すかさず保健室に入ってきた司をすぐに心配する箒

司は安心させるかねように箒の頭を撫でる

「大丈夫だよ、職員室に呼び出し食らって怒られるかと思ったが、
意外にま状況説明しただけだ

悪かったな、

心配させて・・・」

「いや、司が大丈夫なら私は平気だ・・・」

（（いいな〜））

撫でられている箒を羨ましげに見つめる三人

それに気づいた司と箒は笑みを浮かべる

「物欲しそうな顔するならバカに頼めよ？」

「きっとバカなら意図に気づかずに撫でてくれるぞ？」

「バカって誰のことだ？」

てか、一体なんの話だ？」

そんな二人の言葉にいつもと変わらず鈍感な一夏
しかし、セシリアと鈴は納得いかない表情で
シャルルは乾いた笑みを浮かべていた

「そ、それでは意味ないですわ！」

「勝ち組の余裕・・・凄くムカつくわね・・・」

「アハハ・・・」

まさにリア充と非リア充の絵図とも言えるだろう

セシリアと鈴は目の前のリア充に怒りが湧く

すると突如、ドドドドと何かの突撃音が聞こえてくる

気のせいか・・・

だんだんこちらに近づいてくる気が・・・

すると・・・ボタン！

と、ドアが開いた

ちょっと待て・・・

スライド式のドアがボタンってなんだ？

見ればドアが縦に倒れている

壊しやがった・・・

「デュノア君！」

「織斑君！」

「新城君！」

そして現れたのは男という獲物を求めた、女子の皮を被った肉食獣だった

「一体なんなんだ・・・」

「みんな、ちょっと落ち着いて！」

一夏とシャルルが沈静化させようとするが女子の勢いは止まらない

「「コレ！」」

そして差し出されたのは緊急告知文の書かれた申込書だった

「ああ、コレか

内容は今回の学年別トーナメントは二人一組で戦うから同意の元、パートナーを決めるか抽選で選んでもらうか選べってこと

で、この人達は俺達男子三人と組みたい希望者ってこと」

「そういうこと！とにかく！」

再び手を伸ばす女子

「私と組もっ！織斑君！」

「私と組んで！デュノア君！」

「お姉さんと組まない？司君！」

「えっと・・・」

「司・・・」

シャルルは実は女・・・
箒は司を切なげに見る

ここで女を守れ、野郎ども

そう脳内に感じた二人は行動に・・・

「悪いな、俺はシャルルと組むから諦めてくれ・・・」

しーと沈黙が響くが・・・

「男同士なら仕方ないし・・・」

「他の女子と組むよりはいいし・・・」

「「じゃあ司君！」」

なんという切り替えの速さ

しかし司も・・・

「俺は箒と組むんで・・・」

そう答える司

しかし、ここで問題が・・・シャルルは見た目が男なため問題はなかったが、箒は女子・・・

不満の声が上がる

そんな反応に箒の気分はあまりよくなく、司もため息をつく

「まったく、面倒だな・・・」

ちゃんと理由言ったら諦めてくれます？

てか、もう諦めてください

根本的な部分を・・・

箒、こっち向け」

「えっ・・・なに、んっ!？」

司は箒の顎をつまみながら自分の唇で箒の口を塞ぐ

「んっ・・・ふっ・・・あっ、んんっ!」

時々舌を絡ませ、箒は赤くしながら、なんとも甘い声を出す

口から漏れる息とよだれが色っぱさを出しており、その場にいた二人以外全員が釘付けになっていた

「あっ・・・つかさ・・・」

口を離し、トロンとした表情で司を見上げる箒

腰が抜けたのかカクンツと膝を着きそうなところを司が抱き支える

「こういう関係です

諦めてください・・・」

「あ・・・うん」

何やら呆然としているようだが
力なく帰っていく女子達

「さあ、帰るぞ

一夏もシャルルもいつまでも病室にいちや迷惑だし、帰るぞ

じゃあな、二人とも」

「え、ええ・・・」

「じゃあね・・・」

出ていく四人に二人はぎこちなく挨拶する

そして残された二人は・・・

「箒さん・・・気持ちよさそうでしたわね・・・」

「なんか変な感じがするわ・・・」

モゾモゾと身体を動かしながら赤くなる二人

二人には司と箒の刺激は強かったようだ・・・

海奈の存在（前書き）

ここでシャルルフラグを公開・・・

ラウラやセシリア派の方にはすいません

海奈の存在

その日、俺達は天変地異の前触れかと思うくらい衝撃を受けた

「なあ、二人に相談なんだ・・・」

「「ん？」」

今、現在屋上で一夏と箒、司は昼食中

セシリアや鈴は昨日のラウラの攻撃で壊れた自機の修復中でシャルルは手伝いである

そんな昼休みの時である・・・

一夏から珍しく相談
しかも二人にである
一応、聞いてみた

「俺さ、シャルルに惚れたかもしれないんだ・・・」

「ゴフツ、カハツ！」

「ゲホツ、んー！」

司はパンを、箒はお茶を吹き出しそうになるが必死に堪える・・・

落ち着いたところで再び聞く

「お前がシャルルを？」

「ああ、俺がだ」

「ライクじゃなくてラブで間違いないな？」

「そうだよ、男としてだ」

質問に潔く答える一夏に目眩を感じた二人・・・

「ああ、箒・・・」

あの女に無関心だった一夏がこんな日が来るとは・・・」

「きっと天変地異の前触れかもしれん・・・」

私は最後までお前を愛してる・・・」

「箒っ！」

「司あっ！」

「やめんかい！」

抱きつく二人にどこから出したのかハリセンを叩きつける一夏

「そんなに俺がシャルルに惚れるのが珍しいかよ」

「「ああ、この世の終わりくらい・・・」」

「お前ら、酷くね？」

シレッと言う二人に呆れる一夏
すっかりツツコミ要員である

「まあ、とにかくシャルルに好かれるにはどうしたらいいか、教えてくれないか？」

真剣な表情で聞く一夏にこれ以上現実逃避できないとわかった以上、
真面目に聞く二人

しかし・・・

「答える必要ないと思うぞ？」
アイツは脈はありそうだしな・・・」

「だな、男からのアドバイスは告げるなら男らしくストレートにだ
というか、なんでシャルルなんだ？」

今までセシリアや鈴だっていただろ？」

もっともな疑問だろう

あんな彼女達でも容姿のレベルは高いのだ

「えっ、鈴は幼なじみだけどいつも意味のわからない文句と一緒に殴ってくるし、

セシリアは第一印象最悪だったろ？」

それからはまあ、いい友達だと思ってる

それにシャルルは女の子だったのは驚いたけど、気が利くし、優しいし、気が合うんだよ

まあ、惚れたのは・・・

シャルルの笑顔かな？

それにいつも俺に怒ってるセシリアや鈴が俺のこと好きなわけないだろ？」

恥ずかしそうに頭を掻きながら答える一夏を見るからに嘘は言っていないだろう・・・

しかし、まあ・・・

「照れ隠しというのがコイツには変な意味に捕らわれるんだな・・・」

「ああ、その点素直なシャルルが勝ち越したわけだな・・・」

（（御愁傷様・・・））

頑張っていた二人にはそれしか言えなかった・・・

まあ、ここまで来たらシャルルを応援するべきだろう

「今日の夜、部屋で二人っきりになった時に告白してみろよ

主導権はできるだけお前が持てよ？」

流れは大事だからな

最後まで諦めるなよ？」

「ああ、わかった

流れの最後まで主導権は譲らないだな

よし、ありがとう二人とも！

必ず最後まで頑張るぜ！」

自信が沸いた一夏はぐっと拳を高らかに掲げると教室に戻っていく

だが、ここで不安が・・・

「なあ、司・・・

アイツ、最後までの意味間違えてないか？」

「え、俺は最後まで諦めずシャルルの心を掴めのつもりで言ったんだが・・・」

「いや、その、だな・・・

最後までって、アイツは・・・」

顔を赤くしながら恥ずかそうに言う筈

その様子から察した司は・・・

「あゝ、わかった・・・」

「・・・仮にそうだとしても恋人になるなら大丈夫だろう」

「・・・そうだな、ここからはアイツらの問題だしな」

投げ出した二人はなんて無責任なんだろう・・・

しかし、あの特殊な一夏だからこそ不安になるということを考えて
やってほしい・・・

そして放課後の職員室・・・

「ということなんだが・・・邪魔されないような仕掛けないか？」

「それを普通、先生に言う？」

不本意ながらも女神の元にいた

一夏の部屋に鈴やセシリアが訪れる可能性は高い
それを防ぐことができそうな人物に心当たりあるのは一人しかないな

かったのだ

「それがこの物語を変えるものだとしてもかい？」

これは神としての質問だろう・・・

なぜこんな質問をと思うが・・・考えてほしい

一夏とシャルルが繋がった場合、セシリア、鈴、ラウラ、更織姉妹
フラグがなくなるのだ

イベントすら消滅する可能性がある

しかし、司は迷わなかった

「俺が・・・俺自身、この世界にイレギュラーとして存在してるこ
と自体が物語を変えてるんだ
もう、今更だろう？」

そう、今更

司はすでに物語を変えてしまっているのだ

「ふふっ、変わったね君は・・・」

「うわ！

やめろって！離せっ！」

ぎゅうと司を抱きしめる海奈

いきなりのことに慌てる司を見る海奈の表情は慈愛のようだった

「よしっ、司ちゃんのためにお母さんが一肌脱いであげる！」

司を離れた海奈はウィンクしながらそう宣言した

（母さんか・・・

あんな感じなのか・・・）

職員室から出た司は未だに残る温もりに戸惑いを感じていた・・・

それはとても素直な子供心とは知れずに・・・

そして夜・・・

「うん、司ちゃんはいいい彼女を持ったね」

可愛くて、家事もできて、しっかりしてて

お母さん嬉しいよ」

「いえいえ、お義母様には料理の腕はまだまだ及びません」

「もう、謙遜しちゃって！

いつでも私の娘になってもいいわよ！」

なんでだろう・・・

俺の彼女があのだと仲良く料理を作っているのが不思議な光景だった

嫁、姑の仲が悪いのはたいていどの家庭もそうだと思うのだが・・・

「ほら、司ちゃんも食器とかコップとか出しなさい」

「働かざる者食うべからずだぞ？」

「はい・・・」

胃袋を握っている者には逆らえず、従う司

尻に敷かれるとはこういうことだろう・・・

隣の部屋に術を掛け続けるにも女神ということを箒に話すわけにもいかず、彼女紹介という面目で海奈を部屋に入れたが・・・

箒と海奈は話してしばらくすると気があつたらしく現在に至るといふことだ

「さあ、食べましょうか」

海奈の合図に席に座る

そして手を合わせるなり、

「いただきます」

そう言って食事にありつく箸

なぜだろうか、生まれてから父と二人っきり、もしくは一人で食べていた夕飯

しかし、今こうして笑顔で食べる二人との食事がとても楽しく感じたのは、

今日は女神の存在に感謝した

二組目の・・・(前書き)

ちよつと内容薄いかも・・・

ごめんなさい

二組目の・・・

「んっ・・・朝か」

ベッドに朝陽が差し込み目が覚める

そこで自分のすぐ横でぬくぬくと動く者が・・・

「まったく、無防備な顔しやがって・・・」

もはや毎日のように自分のベッドに入ってくる箒に司は何も言わずに受け入れた

しかし、昨晚は・・・まあ、運動をしたため服はベッド周辺に散乱している

そのまますぐに制服に着替えるなり、彼女の服も含めて洗濯機へ

そしてそのままスイッチを入れる

時間は六時ちよつと過ぎ

そろそろ食堂が開く時間だろう・・・

「箒、起きろ、朝だぞ」

「んっ・・・」

しかし彼女は布団を更に被り、繭のように布団の中へ

「起きないと、飯食う時間なくなるぞ」

「司・・・のせい・・・」

布団の中からの答えはそれだけ

だが、司はそれだけで理解する・・・

「おかしいいな・・・

昨日は珍しく箒から誘って来たんだろ？

しかも第一ラウンドじゃ、足りないって言って、第二までやったじゃないか

それでもまだ起きないってんなら、このまま目覚まし変わりに第三開始というか

あいにく男の朝は元気でな・・・」

そう言った瞬間、彼女は跳ね起き、司の差し出した制服などを持って洗面所に入っていく・・・

全くだったら最初から素直に起きればいいのに・・・

しばらくして出てきたのはいつもと変わらず、ポニーテールの箒だった

「おはよう、そんじゃ隣の奴誘って飯行こうか」

ちよつと不機嫌だが、それでも司に着いていく彼女だった・・・

「・・・」

「・・・」

四人テーブルで朝食を食べる四人

少々、まだ早朝なため、人は数える程度しかないがそれでも食堂のおばちゃんなどからこのテーブルは注目されていた

特に司と箒の目の前の二人が・・・

「はい、一夏

いつも醤油だね？」

目玉焼きを食べようとした一夏に醤油ビンを差し出すシャルル

「ああ、ありがとうシャル」

それを笑顔で受けとる一夏

今、愛称で呼んだのは気のせいだろうか・・・

二人を取り巻く空気がピンク色
つまり・・・

「お前ら、付き合っただんな」

「ああ、二人のおかげだ
ありがとう」

「一夏から聞いたよ
一夏を応援してくれてありがとう
おかげで、僕も勇気を出せたよ」

「あ、ああ
それは良かった・・・」

二人はただ、ただ頷くしかなかった

そう・・・一夏はシャルルに想いを伝えて成功したのだ

しかし、こう目の前で初々しいカップルを見ると微笑ましい光景だ
と思えた

「セシリアや鈴には悪いが・・・こりやシャルルの勝ち越しだな」

「ああ、お似合いだ」

司と箒そう言いながらも目の前のカップルに負けなくらい甘い雰
囲気を醸し出しながら寄り添っている

正直、早めに来ていた学生の中にはブラックコーヒーを買っていた
生徒がいるほどだ

全く朝からお熱い四人なこと……

時間は変わって放課後……

「なあ司、なんで司は鈴やセシリアが避けなかったあのシュヴァ
ルツェア・レーゲンのワイヤー避けれたんだ？」

学年別トーナメントに向けて訓練してるいつものメンバー

司はシャルルと射撃訓練を

一夏は箒と近接訓練を

そこで一夏が学年別トーナメントで強敵であり、友を傷つけたラウ
ラには印象があったのか

そんな疑問を訪ねられる司

「あゝ、あれだ

いくら六本もワイヤー操れるって言っても攻撃してくるのはせいぜい2本くらい

多くても4本くらいだから
それに集中しただけだ

ほら、人間ってどうしても狙う所は眼で追うだろ？

それを感じながら迫ってくるのを避けていく

無理だと思ったら弾けばいい

その辺は剣道で習わないのか？」

そこで箒が答える

「ああ、やはり目線だな

そこで決まるからな

あとは雰囲気と勘だろう

勘は当てにならないというが、経験やその人物の情報、試合の流れからうまく読み取った勘は当たるときが多い

どんなプロスポーツ選手などもそう言った自分の勘・・・先読みを
大事にしていることが多いからな

だからといって闇雲に予想するのは間違えるな、一夏

冷静に分析し、賭けに出やすいお前がどれだけ焦らずに予想するのが大事だ」

「なら、早速練習してみよっか？

僕と司が撃つ攻撃をひたすら避ける訓練

ついでに箒もさ・・・」

「「えっ・・・」」

シャルルが笑顔で提案した訓練に固まる二人

「そうだな、箒も格闘メインだしやって損はないしな・・・

動く的のほうがいいしな

ああ、あと回避と防御以外するなよ

まあ、させないけど」

「「攻撃なし!?!」」

司の言葉に狼狽する二人
見ればシャルルも両手に
アサルトカノン『ガラム』
連装ショットガン
『レインオブサタデー』
を装備している

そして司は少々遠目に移動し、L96Aの照準を合わす

「用意はいいか？」

俺がラウラのレールカノン

シャルルがワイヤーだと思って避けるよ」

プライベートチャンネルからの司の声に肩を落胆させ、諦める二人

「大丈夫、死なないから♪」

そういう問題じゃないだろう！

そう言いたいのがこれで状況が変わるわけじゃないため諦めた二人は
剣を構える

「じゃあ・・・」

「頑張ってね♪」

それを合図に二人は弾丸の嵐に包まれた

孤高VS連携（前書き）

雪片式型の零落白夜って、ガンダムとかのビームサーベルと似たようなもんだと思うんです

だから、武器から手を離してもすぐに零落白夜が消えるとは思えないんですよね

孤高VS連携

学年別トーナメント当日

一夏とシャルルは準備を終え、最初の対戦相手を確認しに行ったがその相手に驚いた

その相手は・・・

ラウラ・ボーデヴィツヒとニーナ・アクティーンという同じクラスメートの一人であった

そして現在、対ラウラ戦の作戦の最終チェックをしており、一夏の脳内に鈴やセシリアを含めた作戦を考える会話が蘇っていた

『A I C？何だそりゃ？』

『シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されてる第三世代型兵器だよ
アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で、日本語だと慣性
停止能力だよ』

『ちなみに一夏さん、さすがにP I Cはご存知ですわよね？』

『・・・わからん』

『あ、あのねえ・・・』

I Sの基本知識でしょうが！

全てのISはこのパッシブ・イナーシャル・キャンセラーで、浮遊、加速、停止をしてんのよ！

あんたの頭、腐ってカビ湧いてんじゃないの！？』

『……すまん』

『まあ、鈴もそこら辺にしといてやれ

ところでセリアや鈴はPICの理屈はわかるのか？

私はそこら辺はデータを見たことなくてな……』

『理屈はまあ、詳しくはわからないけど私の龍砲と同じで空間圧作用兵器と似た感じで制御してるはずよ

空間に干渉して、攻撃を止めてるから』

『ってことは、俺の零落白夜なら切れることだよな？』

『理論上はな

だが、俺だったら零落白夜に触れないならそれを操作してる一夏の腕にPICを掛けて止めるぞ』

『腕って……腕だぞ？

結構早く振る腕をピンポイントに止められるのか？』

『あのPIC操作の完成度ならできるでしょうね

まあ、一つ申し上げるとしたら一夏さん自身に問題が……』

『昔からそうだったが、

一夏の動きは性格がそのまま出ているからな』

『ぶっちゃけると、あんたの動きが読みやすいのよ』

『ぐっ……言い返せない』

『特にお前の攻撃は、縦の袈裟、逆袈裟、横は払い、返し刃のどれかだしな』

だから打鉄の箒にも負けるんだ』

『……』

じゃあ、対抗策にはどうすればいい？

俺には雪片しかないんだ』

『それを今、考えてるんでしようが
あんたやデュノア達には私達の仇取って欲しいんだから』

『まあ、鈴も熱くなるなって
それに俺に一つ案がある』

それは――――』

そこでブザーがなったため

一夏とシャルルは互いにISを纏うとアリーナのグラウンドに出る

「一戦目で当たるとはな、待つ手間が省けた

私はお前が心底許せない

お前が教官の弟だというのを認められない！

貴様の存在は教官を変える！

だから、私は貴様を！」

「・・・という当て付けだが知らないが、俺はお前にやられた仲間のためにお前を！」

「叩きのめす！」

そして両者が開始と同時に瞬時加速を行い、ぶつかり合う

一夏の零落白夜を両手のプラズマ手刀で受け止めたラウラは追撃を行う一夏にA I Cを掛ける

それにより身体全体が金縛りにあったかのように動かなくなった一夏

「開始直後に先制攻撃とは、わかりやすいな」

「そりゃあ、以心伝心で何よりだ」

「以心伝心なら次に私がすることもわかるだろう？」

一夏は聞かれなくともわかっていた

その右肩にある巨大なリボルバー機構の電磁砲・・・レールカノンによる零距离射撃

射撃武器の初速の威力はとてつもなく強力だと司から聞いている

ハイパーセンサーがアラーム音を発しながら警告している

しかし、一夏の内心は余裕だった

「一夏はやらせない！」

一夏の背後から飛び出したシャルルがラウラのレールカノンの砲口にアサルトカノンを集中射撃

それによりレールカノンの砲口はズレ、発射された砲弾は空を切る

そしてAICの呪縛から抜け出した一夏はシャルルに打鉄で仕掛けようとしていたニーナに気づく

「すまんが、邪魔はさせない！」

「きゃっ!？」

まだまだISには慣れていないようで零落白夜で数度打ち込んだだけで打鉄はシールドエンプティになる

これで第一段階はクリアだ

『ラウラと戦いながらたぶん抽選で決まったパートナーと戦うのは正直言うとなんか勝つのは難しい

だから、先に一夏かシャルルのどちらかが速攻でラウラのパートナーを落として、ラウラとの戦いに集中できるような状況を作るんだ』

そして・・・

「シャルル！」

「起き土産にどうぞ！」

一夏の合図にシャルルは両手のアサルトライフルを投げ捨て、高くジャンプすると

ラビット・スイッチ

得意の高速切替で呼び出した対IS用グレネードをラウラにありつたけ投げつけ始める

「ツチ、この程度！」

しかしAICを後方以外自分を包むように展開し、爆風をやり過ぎすラウラ

よってダメージを与えられない

しかし目的はダメージではなく……動きを止めること

『確かに零落白夜はAICに効くが、腕を止められて当たらないって言ったよな？』

そこで思ったんだが、一夏が零落白夜を持たなければいいんじゃないか？』

『だが、一夏じゃないと発動しないんじゃない？』

『そりゃあ、一夏以外持ったってただの近接ブレードだろう武器としては使えるがな』

俺が言いたいののは零落白夜の状態で雪片を……』

一夏は零落白夜を発動した状態で雪片を右手で持ち、高く掲げると『投擲』した

「当たれええ！」

「くっ!？」

A I Cが効かない零落白夜を避けるには前面から来ているため横か上に逃げるしかない

しかしA I Cを解けば、爆風の餌食になる

まっすぐラウラに向かっていく雪片式型はすでに避けられない距離だった

だが、さすがプロ

ラウラは簡単にはやられなかった

「舐めるなああ！」

零落白夜はA I Cを貫くもその穂先を身体を捻り、直撃を避ける
零落白夜はレーゲンのレールカノンを貫き、彼女の後方の地面に突き刺さる

「はあ、はあ

貴様にしては中々良いアイデアだったな
だが、得物を失った貴様など！」

そう言ってプラズマ手刀を展開し、突撃体制に入るラウラ

しかし・・・

「僕を忘れないでよ！」

「なっ、それは!？」

雪片式型を『持った』シャルルの斬撃を驚きの表情をしながらも展開したプラズマ手刀で受け止めるラウラ

確かに専用機の武器は他の機体が勝手に使えないようになっているが、その持ち主が使用許可をしている人物は使えるようになっていく。そしてその許可を持つシャルルは単一仕様の零落白夜こそ使えないものの近接ブレードとしては使える

そしてシャルルが一夏の武器を使えるということは・・・

「ツチ! 雑魚共が！」

ギリギリで一夏が両手に持ったアサルトライフルの弾を片手のプラズマ手刀でシャルルの攻撃を防ぎ、もう片方でA I Cを展開し、実弾を止める

そのラウラの表情にはすでに余裕が消えていた

「それにしても織斑君が武器を投げたのは驚きましたね」

「大方、新城の入れ知恵だろう」

まあ、的は射ているがな」

「それにデュノア君との連携もピッタリ
やはり相性的に合っているからですか？」

「いや、そこはデュノアが奴にあわせているからだだろう」

もし合わせるとしたら・・・新城とデュノアの相性が一番敵としては嫌だろうな

新城は武器こそ射撃だけだが、オルコットと違って懐に入られても近接射撃ができる全距離対応型後方支援タイプだ

デュノアは近接も人並み以上、射撃も中々だ

それに器用で遊撃タイプには最高の立ち位置だろう

あの二人が組めば、懐に入るのは難しいだろうし、入っても対応されるとなると堪ったもんじゃない」

「織斑先生でもですか？」

「ふん、ちゃんとした機体があれば赤子の手を捻るようなものだ

さあ、試合が動くぞ」

「あ、はい！」

二人は再びモニターに顔を向ける

・
（あの娘は昔から強さがすべてだと思っているのは変わらないな・・

しかし、それでは私の弟には・・・）

『勝てんぞ』

そう確信めいた自信満々なことを思う千冬は弟の映る画面を見ながら小さく笑みを浮かべた

知らない貴方が不安（前書き）

ちよつと短め

知らない貴方が不安

強い・・・

一夏は素直にそう思った

司の射撃訓練と回避訓練をしてなくシャルルがいなかったら10分も持たずに沈んでいた

「はぁ・・・ふっ」

「一夏！」

「シャル！」

第一試合だがこの試合が一番白熱してるのだろう

専用機持ち同士ということからギャラリーは興味を、各国からの役員は他国の自国の戦力比を・・・

そう思うはずが・・・

この試合がそんなことを忘れ、夢中になるほど高度な試合だ

再び距離をとったラウラ
そこで一夏が雪片を

シャルルがアサルトライフルを

互いに武器を持ち主に戻す

そこで再び日本とフランス対ドイツの戦いが再戦される

「はあっ！」

距離を取ったラウラはワイヤーブレードによる精密操作に集中した
集中したことにより二人に対して6本すべてを操っていた

縦横無尽に駆け巡る刃の糸の中、二人は縦に、横に、身体を捻る、
弾くなどして避ける

しかし軍人であるラウラの攻撃は計算された正確無比な攻撃である
そこでシャルルがその包囲網を掻い潜る

「貴様さえ止めれば奴など簡単だ！」

シャルルを止めるべくラウラはA I Cを展開するが、

「僕のパートナーを甘く見ないでよ！」

シャルルがそう叫んだ時には一夏はダメージを受けながらもシャル
ルに対して最高の援護を行った

「うおおお、最高のプレゼントを喰らえ！」

ありつただけのエネルギーを食った絶大な零落白夜を再び投擲する一夏
当たるわけにもいかず、A I Cを解除するラウラ

「懐に入ったからには！」

「たかが第二世代の攻撃力などっ!？」

そこでラウラはシャルルが防御のはずの左手を構えてることから、
ある武装を思い出す

『実弾武器であり、超近距離型武器だが、その攻撃力は第二世代最
強である』

『灰色の鱗殻』
グレー・スケール

通称『盾殺し（シールド・ピアース）』

左手の盾の装甲が炸薬により弾け飛び、そこにはリボルバー式の巨
大な杭打ち機が露になる

『ズガァン!』

その巨大な杭がラウラに打ち込まれ、その至近距離の攻撃力シール
ドを突破し、絶対防御を発動させる

衝撃による痛みに耐えながらも打ち込まれた反動を利用し、距離を
取るラウラ

「逃がさない！」

「瞬時加速だど!?!」

「今、初めて使ったからね」

データ上シャルルは今まで一度も使ったことがなかった

つまりこの戦いが初の瞬時加速

一夏やラウラの瞬時加速を見よう真似で実現してしまったのだ

もはや、それは天才の域だろう

すでにA I Cも間に合わない距離にいるシャルル

しかも気づけば背後は壁

そして避けれぬままラウラは再びシャルルの切り札の餌食になる

そしてラウラのI Sに強制解除の紫電が走り始めた

(力が欲しい・・・どんなものも敵わぬ最強の力を)

そう思ったラウラに答えるかのように自分の相棒であるシュヴァル
チェアがドクンと答える

(ならば受けとれ・・・世界最強の力を!!!)

「ああああっ!!!」

紫電を纏い、叫び声を上げた瞬間
シュヴァルチェア・レーゲンはだんだんとラウラを呑み込みながら
その形を変えていく

『VTシステム』作動

アリーナにパニックが起こった

少し時は遡り、シャルルがラウラに突撃を仕掛けた時観客席にいた
司は席を立つ

「どうしたのだ、司？」

「あ、いや、ちょっとトイレにな・・・」

そう言って出口階段にいく司を箒は不安そうに見ていた

最近よく見せる苦笑

そして何か呟く姿はなぜか遠くに行ってしまいそうだった

しかし箒はそんな不安な表情を笑顔で隠す

司を信じて・・・

強さの理由（前書き）

ラウラ編終了です

強さの理由

「一体どうしたんだ・・・」

「ISが変形するなんて・・・」

紫電が走り、近くにいたシャルルを吹き飛ばしたあとシュヴァルチエア・レーゲンは装甲を溶かしたかのようにドロドロになり、ラウラに纏い始めた、

そしてそこには肩、胴、脚部、頭部を覆う

頭部は目を表すかのように赤いツインアイが現れ、その姿は前回襲撃した全身装甲のISのような姿だった

何より一夏を驚かせたのは装甲と共にできた『黒い雪片』だ

そして一夏が本能的に無意識に雪片式型を構えた瞬間、ラウラは自分の雪片を居合いの構えをして一夏に迫る

そして放たれた強烈な横一閃をなんとか防ぐも、その勢いにより打ち負け、雪片式型が弾かれる

すぐさまラウラは雪片を上段に構える

その居合いからの上段構えは一夏の記憶にある人物の戦術・・・いや、剣技と全く一緒だった

雪片とその構えからすぐさま次の攻撃がどんな軌道で迫る攻撃かわかった

剣は弾かれ、防御は無理

残るは・・・

一夏はすぐさま白式に緊急後退回避を命令する

全力で避けた一夏は左腕の装甲を壊されながらもなんとか避ける

そして今の緊急回避と左腕を食らったダメージの影響か、一夏の白式はエネルギー切れで強制解除される

しかし一夏の内心は強制解除に気にかかることもないほど、怒りが占めていた

（許さねえ！

千冬姉の技を、千冬姉の情報を、千冬姉から受け取ったこの武器を勝手に使いやがって！）

自分の姉のデータを勝手に使われたことに怒り心頭の一夏は白式を纏っていないにも関わらず、ラウラに向かっていこうとしていた

しかし・・・

「自殺願望か、お前は
目を覚ましやがれ！」

ガッ！

突如現れた司により、右ストレートをもろに食らった一夏は吹き飛ばされる

「邪魔するな、司！」

あの野郎、千冬姉を侮辱しやがって！
邪魔するんなら、お前でも！」

「アッ？」

やるか、雑魚！？

テメエの攻撃なんて掠りもしねえよ！

人がせつかく命を助けてやったつうのに何様だ、テメエは！

そのまま行つて、呆気ない死に方してみろ！

悲しむのは誰だ！

テメエのやろうとしてるのはカスがする無謀だとわからねえのか！

シャルルの目の前で、

死ぬ気かテメエは！」

司の言葉にハッと我に変える一夏

急激に怒りが冷えていき、自分の愚かさを自覚していけ

見ればシャルルは心配そうな表情だった

「・・・すまん、もう大丈夫だ」

そう言った一夏は一度大きく深呼吸する

それが終わった表情には落ち着きが戻っていた

そこで司はラウラを指差しながらゆっくりと説明していく

「いいか、ラウラはたぶん意識がなくISのプログラムによって動いてるはずだ

じゃなき今頃攻撃されているはずだ」

確かにそうだ

今は敵を前に話してるというのに全く攻撃してこないのだ

「前みたいに容赦なくやればいいんだが、中にはラウラがいるだからラウラを取り出さない限り、奴は止まらないだろう

でだ、お前はあのISをぶっ飛ばしたいんだろ？」

「・・・ああ、千冬姉の弟として、千冬姉の剣技を教わった者として俺は倒したい・・・」

その強い意思に司は黙って自分のISのシールドエネルギーを譲渡するコア・ケーブルを白式に繋げる

「俺のリクルアのシールドエネルギーを半分やるからぶっ飛ばして来い」

「ああ、まかせろ！」

・・・来い、白式！」

エネルギーの受け取りが終わった一夏は白式を起動させる
そこで確認したシールドエネルギーの残量に一夏、目を見開いた

（2000っ!？
これで半分かよ!）

出鱈目なエネルギー量に驚きながらも一夏は零落白夜を発動させた
そして一夏の対応に反応したのか、ラウラも武器を構える

（一撃だ・・・
この一撃で決める!）

「うおおおっ!」

互いに振り下ろす雪片

瞬時加速で勢いをつけた一夏、全身全霊をかけてその一撃を振り抜いた……

そこには確かな感触が

「ぶっ飛ばすのは勘弁してやる」

見事に勝った一夏はラウラを抱き止めながらそう呟いた……

「なあ、俺はさ……強さってのは、心の在処

つまり自分自身がどんな風になりたいかじゃないのか？

他人に……千冬姉に求めるのは違うんじゃないのか？」

——そう、なのか？

真っ白な空間で一夏はラウラに語りかけ、ラウラは不思議とその一夏の言葉から耳が離せなかった

「そりゃそうだろ？」

千冬姉にばかり頼って、自分が何をしたいかもわかってない奴が強いわけもないだろう？

自分の人生だし、どう生きようがお前の勝手だろ？

誰も文句は言わねえよ

だからさ、まずは自分がやりたいことを見つけてから強くなってみろよ

きっとお前なら強くなれるさ」

強くなれるか――

ラウラは目の前の男が自分の敬愛する者と同じことを言ったことに、コイツがあの人弟だと言うことを思わされた

――では、お前は・・・なんで強い
なんで強くなろうとする・・・？

「俺は強くねえよ
むしろ、まだ弱い」

自分に勝って、なお弱いと言った一夏にラウラは驚く

「俺は、司や千冬姉よりも力はないし、何よりもまだ人間性が弱い
と思う・・・」

そんな俺に最近大事な奴ができたんだ

そいつが今の俺にとって強くなりたいと思う理由だ

自分の素を気兼ねなく晒しだすことができる大切なそいつを失いたくない

そいつを守りたい

自分の全てを使ってでも、守りたいからさ」

そう、その強さの理由はまるであの人のような・・・

「だけどよ、強くなるにもやっぱり仲間は戦友は大事だと思うんだ

自分一人じゃどうすることもできない時があるからなだからさ・・・

今回のことはこれで互いに洗い流して終わりだ

これからは仲間として、友として仲良くやろうぜ

・・・一緒に強くなろう

ラウラ・ボーデヴィツヒ」

言われて、ラウラの胸には熱いものが込み上げてくる

自分を必要としてくれる

自分と対等に接してくれる彼の言葉を嬉しく思った

何より今まで軍人として生きて来た中、友という存在ができたことに嬉しいと感じていた

「ああ、強くなろう」

織斑一夏・・・

千冬教官と弟だということを認めよう・・・

そして私は戦友として彼と一緒に強くなろう

ラウラは一人の人間として成長した時だった

司の厄日（前書き）

今日は一夏とシャルがメイン

それとその・・・R18描写がある話があるのでそちらを見たい方はノクターンノベルズのほうで探していただいて見てください

この小説サイトのタイトル名で探していただければ出ると思いますし、タグには『一夏×シャル』『オリ主×箒』をつけておりますので

司の厄日

「あゝ、終わった」

一夏がそう呟きながら食堂の席にドツと座り、それに続くシャルル、司、箒

あのラウラのことが終わったあと、一夏、シャルルは教員から事情聴取をされ、

それが終わったあとに試合が終わった司と箒の二人と合流をし、少し遅い昼食を摂りに来たのだ

ちなみに四人のメニューは

一夏は海鮮塩ラーメン

シャルルはミートスパゲッティ

司は山菜大根おろしそば

箒は焼き鮭定食

「結局、何が原因だったんだ？」

箒の質問に一夏とシャルルは首を捻る

「それがわっかんね」

あの時はどちらにしても倒したいから倒しただけだしな」

「僕達も原因がわからないんだ」

「そうか・・・」当事者でさえわからないことに三人は謎のまま、納得するしかない・・・

しかし原因はVTシステム

通称

『ヴァルキリーレースシステム』

過去のモンド・グロッソの部門受賞者のデータをトレースするシステムだ

それを知っている司はもちろん言わない

それは本来、極秘事項扱いのデータだからだ

知らぬ顔で話を聞いてる司は食べ終わるなり、話し出す

「さて、試合が終わったことだし帰らないか？
部屋に帰って休みたい」

「そうだな、私も司と部屋でゆっくりしたいしな」

「相変わらず仲がいいんだね・・・」

ちょうど羨ましいな・・・

シャルルがそう思ったその時、山田先生がこちらに向かって来ていた

「織斑軍にデュノア君、それに新城君もここにいましたか」

そう言われた三人

箒が入っていないということは男子関連だろうか・・・

その大きなメロンをたゆんと揺らしながら来る姿は男子として目のやり場に困る

（山田先生のはシャルルより大きいよな・・・）

（箒といい勝負だな・・・）

などと思いつつ自分の彼女と比べる雄二人

しかし、つい無意識にそう思った二人に背後から怒気が感じた

「一夏のスケベ」

「司、今日はナシな」

「「なっ!?!」」

彼女からの判決に驚く二人

口には出していないのになぜ考えていることがわかるのだろう

女は不思議な生き物だ・・・

「誤解だ、シャルル！」

俺は悪気があったわけじゃない！」

「そうだ！それに俺は箒のほうが好きだ！」

必死に代弁してる二人

しかし、その司の発言に問題があったのだろう

少なからずまだ他の生徒がいる中、意味が違って男が女に好きだ
発言するのは注目を浴びるわけで・・・

「場所と誤解を生む言い方をするな！」

「ごふっ!!」

誤解ではないのは照れ隠しだろうが注目されるのは恥ずかしい

見事なアッパーが司の腹に決まった

そんな仲のいい二人に苦笑しながらも真耶は本題に入る

「えっとですね、朗報が会って来たんです三人に！」

実は今日から男子の大浴場の仕様が解禁です！」

「おお！そうなんですか！？

てつきり来月からになるものばかりと！」

大喜びする一夏

シャワーだけじゃ物足りないのは日本人の文化的な本能だろう

同じ日本人である司も少なからず喜びを感じていた

「それがですね」

今日は大浴場のボイラー点検があったので、生徒たちが使えない日
なんです

でも点検自体はもう終わったので、それなら男子三人に使って貰おうって計らいなんです!」

「ありがとうございます!」

一夏は嬉しそうな声で礼を言った

そして現在・・・

一夏とシャルルは脱衣場にいた

司は?という・・・

「まあ、あれだ

恋人仲良く二人で入って来い

俺は浮気もするつもりもないし、お前らが入った後でいいさ」

という気遣いのおかげで二人っきりで着替えをしている

「しかし山田先生も粹な計らいをしてくれるよな
こうして男女仲良く『婚約者』同士で風呂を堪能させてくれるなんて」

「『男女』と言っても僕は男で通ってるからね」

一夏の言葉に苦笑しながら着替えを脱いでいくシャルル

しかし一夏はシャルルの言葉に驚いていた

「どうしたの、固まっちゃって？」

「……いや、ちゃんと婚約者って認めてくれたことに感動してな……」

「今更だよ……」

シャルルは呆れた目で一夏を見ていた

服を脱ぎ、タオルを身体に巻きながら入る準備をした

「それに……混浴も男の夢の一つなんだ

しかも大風呂付きという

しっかり楽しませてもらおう」

「あはは……

一夏、手付きがイヤらしいよ」

そう言いながらも肩に回した一夏の手を振りほどくこともせず、むしろ一夏の腕に抱きつきながら

二人は仲良く風呂場に入って行った

「今頃、一夏とシャルルはニャンニャンしてるんだろうな・・・」

「こんな時に何を言う！」

「うおっ、危ねえ！」

野菜を切っていた包丁の先を司に向け、司はそれを仰け反りながら避ける

肉を焼いていたフライパンをよくひっくり返さなかったと思う

「照れ隠しに包丁を向けるな！」

「す、すまん・・・」

しかし、いきなりあんなことを言うな・・・恥ずかしい」

顔を赤らめながら答える筈

だからといって包丁を向けるのは危ないだろうに・・・

「まったく、ほれ

盛り付けて後は持つて行くぞ」

箸が切ったレタスの千切りの上に焼いた豚のしょうが焼きを乗せ、汁をかける

そしてお盆にご飯とサラダも乗せ、最後に小皿に持った白菜の浅漬けを乗せる

「じゃあ、一緒に持って行くか？」

「ああ、お義母様にも会いたいしな」

箸と海奈が俺の彼女として会ってからというもの結構仲良くなってしまい、

海奈の願いを良く聞く箸になってしまったのだ

そして今回も・・・

『あゝ、昼の食堂閉まっちゃったからご飯作って持って来てゝよろぴくゝ』

などと司に

一方的に電話を掛け、なんの返事をするこもなく、一方的に切られたのだった

仕方なく箸にそれを伝えと何の電波を受け取ったのだろうか

いきなりやる気になり、仕方なく司も手伝う羽目になった

「失礼しまゝす

新城先生いらっしやいますかゝ」

職員室に入るなり、出迎えたのはエドワース・フランシィ……
数学教員の先生だ

ちなみに海奈は世界史・日本史担当らしい

「新城先生ね、ちょっと待っててね

新城先生！」

給湯室に行くエドワース
すると海奈と共に出てきた

「ありがとう！

待ってたよ！

豚のしょうが焼きにお新香付きだね！

いただきます！」

お盆を受けとるなり、早速食べる海奈

それを見ていたエドワースはじつと海奈のお盆を見る

「美味しそうですね……生徒二人が作ったんですか？」

「はい♪

息子と義娘が作ったお昼ご飯です！

姑の特権ですね♪」

「姑！？」

海奈の言葉に瞬時に振り返るエドワース

その言葉に気づいた司は苦笑混じりに答える

「あはは・・・」

母さんはまだ気が早いだけです
まだ箸とは、交際中です」

「交際中うう！？」

満更でもない司と箸

その表情は互いに目が合えば笑顔になる恋人同士そのものだった

「う・・・う・・・うわーん！

今日は榊原先生と飲んでやる！」

小走りで去って行くエドワース

「なんで泣いたんだ？」

「まあ、負け組の叫びね」

司の言葉にシレッと答える海奈である

しばらくして食べ終わり、箸と海奈が雑談していると千冬と真耶が
職員室に入ってくる

「ん？新城に篠ノ乃か」

「あれ？新城君は大浴場行ってないんですか？」

「えっと実は母の昼飯作っててまだ行ってなかったんです
今から行きますよ」

空になったお皿の乗ったお盆を見せながら答える司

「そうか、まだ行ってなかった
なら、もしアイツがまだ入っていたら風呂で泳いでないか確認しと
いてくれ
アイツは風呂好きだからな」

「なら織斑先生が直接行けばいいじゃないですか
俺が確認、遊んでたらその場で制裁

いなかったら・・・自分の部屋に母さんに作った昼御飯が余ってま
すし、食べますか？

山田先生もまだ昼御飯食べてないんじゃないですか？」

司の提案に千冬は真耶と顔を見合わせる

トーナメントの処理に加え、ラウラの件で昼飯を食べる暇がなく、
海奈と同じく食堂にいなかった二人だ

ありがたく頂くことにした

そして雑談する筈を残し、司は千冬と真耶と共に職員室を出た

そして現在、大浴場の前にいるのだが・・・

『一夏あゝ、ああっ!』

「「「・・・」」」

Σ（。∴;）真耶

>（「―;」）<司

（・○・ポカーン）千冬

・ 中から聞こえるシャルルの喘ぎ声に思わず顔文字のような表情に・

（・・・一夏、シャルルやるなら声抑えろよ
防音されていなく更に反響しやすい風呂場だぞ）

もはや弁解の余地なしと判断した司は諦めていたが、ここで思いがけない人物の弁解が・・・

「これは・・・止めるべきだ」

「いや、ダメです織斑先生！」

Σ（◇＊）エエツ

司は真耶の発言に驚く

教師はそれを止めるべきだろうに！

しかし、その教師から出た発言が・・・

「今、止めれば教育的にも悪いですし、織斑君とデュノア君の絆を切るきっかけになるかもしれません！」

それに世界にはいろんな愛しかたがあります！

この学園だって女の子同士って方は少なくありません！だから・・・

一夏君とデュノア君という組み合わせも中々・・・」

（まさかの腐女子ですか！？）

ウヘヘ・・・という笑い方が正しいのだろう

そんなツツコミを内心で行う司

たぶん千冬も同じようなことを感じているのだろう

表情からに困っている感じだ

結局、その場で司も介入なし

そのまま三人は司の部屋で昼御飯を取ることに・・・

「まさか一夏がそっちの趣味に走るとは・・・」

「アハハ・・・一夏君が攻めよね」

気落ちしている千冬に幸せそうな真耶

司はなんと声を掛ければいいかわからなかった

（なんて言えばいい・・・

ホントのことを言えば千冬さんの悩みが解決するがそれは一夏たち本人が言わないといけないし・・・

だあああ！

早く帰って来い！糞リア充！）

なんという言い草だろう

糞リア充は君もだろうに

などという非リア充の作者の声も届かぬまま司は二人が帰るまでこの重苦しい雰囲気味わった

司の厄日（後書き）

オマケ

「ただいま〜・・・キャッ！」

「箒っ！」

箒が帰って来るなり司は彼女を抱き締める

困惑しながらも何があったか聞くと・・・

「もうやだ・・・

なんで一夏とシャルルの問題で俺が苦勞しないといけないんだよ！
一時間ずっと千冬さんの愚痴相手疲れた！」

ギュウと抱きつく司

普段カッコよかったり頼りになるがこんな風に弱々しい一面が可愛く見える箒は母性がくすぐられ、司をそっと抱き締める

（今日は甘やかしてやるか・・・）

お姉さん気分を味わった箒であった

失恋と成長（前書き）

あれ？

ラウラを妹キャラにしちゃった・・・

鬼で厳しい千冬はどこに行った！？

最後、手抜きっぽく見えたらすいません

失恋と成長

次の日・・・

「おはよう、二人とも」

「「おはよう」」

いつも通りの朝・・・なのだがなぜか一夏は1人

「シャルルはどうした？」

「いや、なんか朝早くに先に登校したみたいでなかなか千冬姉にようがあったみたいなんだ」

「ふむ・・・」

何気なく聞いた箒は納得したかのように相づちを打つ

そんな二人を他所に司は回らない頭をなんとか回しながら脳内IS本二巻を捲っていた

（えっと・・・うーん

そうか一夏とシャルルの混浴イベントがあったからシャルルが女子として再入学するんだった！）

「んっ？

けど、待てよ・・・

シャルルは一夏とすでにフラグを立ててるわけで・・・」

そのまま食堂に入る三人

「ラウライベントは消えるのか？」

箒は俺で・・・

残るは猫と銀狐とロール頭で・・・」

朝食を終え、食堂を出る三人

「銀狐は教室に入ってからで・・・まあ、ロール頭と猫は殺る側で・・・」

教室に向かう三人

そこで雑談を終え、司を指差す一夏

「なあ、箒

さつきから司おかしくないか？

なんかブツブツ言ってるけど・・・」

「気にするな、一夏

ああいうことは大抵何か起きる時だ」

「・・・なんか嫌な予感するが気のせいかな？」

「案ずるな一夏

私は嫌な予感ほしない

つまり私に被害はない

司もたぶんだらう

安心したよ一夏」

「いや、安心できねえよ！

っ！か、お前幼なじみに酷くねえか！？」

「当たり前だろう

一夏と司だったら躊躇なく司を取るぞ」

(TΔT)

幼なじみの容赦ない一言にorz・・・と落ち込む一夏

そんなこんなで教室に入る三人

「お・・・来たな織斑一夏」

そこで迎えたのはなんとラウラであった

「その昨日はすまなかったな・・・

いや、それまでの行為や態度もだ

私自身の我が儘で周りに一般人に迷惑をかけた

ホントにすまない

許してくれるだろうか？」

(。Δ。)(。Δ。)(。Δ。)

あんた誰ですか？

きつとクラスのほとんどがこんなことを思ったはずだ

冷徹無比

軍人氣質の一匹狼

そんな近寄り難い雰囲気だったラウラがあの子の敵にしていた一夏にしおらしく謝っていたのだ

「許すも何も昨日言っただろ？」

もう怒ってないし、友達になろうって言っただろ？」

強いて言うならクラスの人々にも謝って友達になってもらうんだ」

「謝ったら許してくれるだろうか・・・」

「謝ることが大事なんだ

ほれ、伝わるように言ってみろよ」

一夏に押され、教室の前に立つラウラ

「その・・・みんなにも傲慢な態度を取ってすまなかった
これからは対等・・・いや、下でもかまわない・・・
だから許して欲しい」

下を向きながらも上目遣いで前を見るラウラ

背が小さいからか更にその可愛さが出ていた

「「「ラウラちゃん!!」」」

クラスの女子がラウラに群がる

ラウラはいきなり囲まれ、抱き締められたことに困惑する

「私達のことお姉ちゃんって言ったら許してあげる！」

そう1人の女子が言う可他の女子もウンウンと頷く

ラウラは困惑しながらもそっと口を開く

「お・・・お姉ちゃん？」

バタバタ！

数人の女子が鼻血を出しながら倒れる

その表情は幸せそのものだ

「うん、許してあげるね！ラウラちゃん！」

笑顔で言われたラウラは許されたことについて笑みが生まれた

「良かったなラウラ」

「ああ、ありがとう一夏

これからよろしくな

後は箒だな・・・」

「ああ、よろしくラウラ」

「その箒もお姉ちゃんと呼んだほうがいいか？」

小首を傾げるラウラにガチリと固まる箒

実は先ほどのラウラの発言に箒もぐっと来たようだ

「その・・・頼む・・・」

「わかった、箒お姉ちゃん」

「・・・アハッ♪」

なぜか箒が少し壊れた気がしたが気にしないほうがよいだろう

そしてラウラはセシリアに歩み寄る

「セシリア・オルコット

ホントにすまない・・・

私のやったことは「もういいですわ」

ラウラの言葉がセシリアによって遮られる

そしてため息をつきながら続きを話す

「今さら過去のことをグチグチ言うのは情けないですし、何よりこれくらいのことを許すくらいの器の大きさはイギリスの貴族として合わせ持つべきですわ

許す代わりに・・・」

「代わりに？」

「わたくしをお姉さまと言いなさい」

腰に手を当て、そう言うセシリアにラウラはニッコリ笑って答える

「わかった、セシリアお姉さま」

「・・・ウフフ♪」

セシリアも箒同様に壊れたようだ

そこで司が入る

「箒がお姉ちゃんなら俺はお兄ちゃんかな？
箒の恋人だし・・・」

「失せろ、新城司」

「「「えっ・・・」」」

先ほどの可愛いラウラはどこへ行った？と思うほど冷たく低い声が
ラウラから放たれた

余裕の表情で近づく司を睨みながら威嚇するラウラ

更にラウラは続ける

「貴様だけは許せん
私を雑魚扱いにした貴様は許せん

箒お姉ちゃんの恋人というのがムカつくがそれは口出しできる立場じゃないのが悔しいがな

お前を兄呼ばわりするくらいなら一夏のほうがマシだ」

なんという差別

しかしラウラのそう言われた司はそのままヨロヨロと箒に抱きつく

「最近、妹が反抗期だよ箒」

「「いや、お前が悪いだろう」」

箒は抱きついた司に竹刀の先で、

一夏はどこからか出した巨大ハリセンで頭を叩く

そんな漫才をしてると教室に千冬が入って来た

「お前ら席につけ

今日は改めて転校生を紹介する

いや、私からも紹介しよう」

はて、千冬自ら紹介する転校生とは？

そんな疑問を浮かべながら席に着くと入って来たのはクラスメートがよく知る人物だった

「うそ・・・あれって」

「デュノア君？」

「まさか美少年じゃなくて美少女だったの！？」

嘘ではない本物の美少女である

シャルルはニツコリ笑って答える

「改めてよろしくお願いします
シャルロット・デュノアです
そして・・・」

「立て、一夏
そして私の横に來い」

千冬が教室内にも関わらず『一夏』と言ったのはプライベートということだ・・・

（ちょっと待て・・・まさか、まさか！）

そのまさかであった

「デュノアはコイツの女だ
そして今日、私も認めた
いや、認めてしまったのだ」

「えええええっ！？」

「まさか・・・こうなるとは
そうなるにあの二人は・・・」

・
ラウラを見るなり祝福のような眼差しだったので心配なかったが・

セシリアは・・・

下を向いていた

「まあ、聞きたい奴がいるだろうに・・・
一限目は少し遅めにしてやるから聞き終えるように
では、解散」

千冬の合図で二人に群がる女子

しかしセシリアだけはポツンと座っていた

そして席を立つなり教室を出ていく

「セシリア・・・」

司はセシリアを追いかけてようとしたが・・・

「司・・・」

ぐっと肩を掴む箒

同じ女子としての判断だろう
司は渋々、箒に従った

「あら、鈴さんもいたのですね」

「そういうあんたもね」

屋上でバツタリ会う鈴とセシリア

セシリアは黙って鈴の隣に立ち、同じように柵越しに景色を見る
しばらく二人は黙って景色を見ていた

・・・が

「いつまでそうするつもりだ、小娘共」

「千冬さん・・・」

「織斑先生・・・」

振り返るとそこには腕を組んでいた千冬がいた

はあくため息を吐く千冬は二人に近づくとそっと抱き寄せる

「女はな・・・恋をして失恋するたびに強くない女にするのだ

失恋したお前らなら強く男共の目を惹くイイ女になるさ
だから今だけは我慢せず泣け」

「「う・う・う・ああ!!」」

きっと彼女達二人は女として一人の人間として強くなるだろう

こうして二人の少女の初恋は散ったのだった

失恋と成長（後書き）

けど妹ラウラは萌えると思う

千冬の許可（前書き）

千冬が性格崩壊

千冬の許可

早朝・・・職員室にて

「失礼します、織斑先生いらっしゃいますか？」

（き・・・来た・・・）

昨日のあの場の遭遇で寝不足になっている千冬

その前の机である真耶も寝不足だが、その表情は幸せそうだ・・・

「実は僕の学園生徒としての『変更』をお願いしに来たんですが・・・」

変更？

その単語に首を傾げる千冬と真耶は話を聞いてみることにする

カクカクジカジカ

小説仕様って便利だね！

っと、

まあシャルルが自分の性別が明かしてシャルロット・デュノアとして再編入することを伝えたのだ

そして二人の反応は・・・

「やったー！

私の心配は嘘だった！

一夏は正しい恋愛をしていた！

義妹よ！あの一夏を頼む！」

超ハイテンションMAXで喜ぶ姿はまるで逆転サヨナラ勝ちのようだ

嬉しさのあまりシャルロットを抱き締めている千冬

そして真耶は・・・

「なんで・・・なんでこのタイミングで・・・せっかくの夢ライフが・・・」

一発逆転サヨナラ負けのような落ち込みのような落ち込み様である

シャルロットは千冬に抱き締められながらも千冬の言葉に答えるかのように自分からも抱きつく

「これからもよろしくお願いします！」

えっと・・・千冬お義姉さんですよね？」

恥ずかしながらも上目遣いでそう訪ねてくるシャルロット

しかし、その『お義姉さん』という言葉に先ほどまで感情を占めていた熱が急激に冷めていく

（ん？

今コイツ、

私を義姉と言った？

・・・いつの間にそんなことに？

いや、待て・・・先程私はなんと言った？

先程の回想

『やったー！

私の心配は嘘だった！

一夏は正しい恋愛をしていた！

『義妹』よ！あの一夏を頼む！』

（・・・確かに言った

私から言った

つい勢いで言ってしまったあああ！）

顔に出さず、内心で頭抱え叫んでいる千冬

するとそこへ・・・

「あら、織斑先生

デュノア君と抱き合っちゃってどうしたんです？」

海奈がニコニコ顔で現れる

そんな海奈にシャルロットは満面の笑みで説明した

「僕が正直に自分は女子ですって明かしたら、

僕と一夏の交際を千冬お義姉さんから認めてくれたんです！」

「良かったわね、シャルルちゃん

シャルルちゃんならきつといいお嫁さんになるわね」

優しいし、気が利くし、お料理もできるもの♪」

「えへへ♪」

シャルロットは海奈に頭を撫でられ、照れている

そんなシャルロットを見ながら千冬さfum・・・と考え込む

（確かにコイツは性格や容姿など凄くいいな・・・
仮にオルコットの場合・・・

ダメだ・・・あの性格と妙なドジ加減といい不安だ・・・

あのセカンドは・・・

内弁慶だろう・・・一夏が心配だ・・・

ラウラは？

軍人一筋のアイツは割りとしっかりしてるが・・・世間知らずなのがな

そう思うとやはりデュノアが一番『普通』なんだよな・・・

そう・・・一夏の回りにいる女子が異常なのだ

イギリスの貴族にして代表候補生

家柄は普通だが中国の代表候補生・・・

人体実験から生まれた15年間軍人であり、現役軍人のドイツ代表候補生・・・

そして凡庸型ISの世界シェア第3位の会社・・・デュノア社の社長
長の腹違いの娘であり、フランスの代表候補生・・・

この中に何の突飛した才能も持たない、普通の一般的な女子はいるだろうか……

否、いない……

しかし、性格的に選ぶならシャルロットが一番安心できるのだ……

「それに織斑先生

義娘や義妹ができるのはいいですよ♪

いろいろ手伝ってくれますし、私だったら箒ちゃんただけど……

まるで娘ができたみたいにといろいろとおしゃべりしたり、お料理したりって楽しめるんです♪

だから織斑先生も義妹ができたって思えばいいんですよ

そんなにぐるぐる考えるのは疲れるだけです」

（これが子供を持つ親の考えなのだろうか……）

確かに千冬は一夏を自分一人で育てて来たため、子育ての大変さは知っている

しかし、それでも千冬は一夏の『姉』なのだ

そこが千冬と海奈の違いだろう

千冬はふうーと一息吐くと改めてシャルロットと目を合わせる

「はぁー・・・」

なんでこう問題が次やら次へと・・・

シャルロット・デュノアで合ってるな？」

「は、はいっ！」

千冬から鋭い眼差しを受け、緊張しながら返事をするシャルロット

「お前は一夏を、

私が今まで私が守って来た一夏を預けてもいいか信用がまだ足りない
確かに今一夏の周りにいる女子と比べたら安心できるが、私からす
ればまだまだだ

そんな一夏を好きになった理由を言え」

「僕は・・・僕はただ守られるのは嫌です

一夏に守ってやるって言われた時は嬉しかったですが、ただ守られ
る存在なんて嫌です

僕は一夏のパートナーで居たいです

一夏の背中を支えて、守れるパートナーとして・・・

僕は一夏の恋人でも互いに背中を預けられる
そんな恋人になりたいです！」

「ただ守られる存在は嫌か・・・」

千冬は一言呟き、じっとシャルロットを見る

シャルロットは不安を押し殺しながらも強く千冬の瞳を見ていた

「……いいだろう

交際は認めてやる」

その一言にシャルロットはパアッと笑顔が溢れた

しかし、シャルロットの頭にどこからか取り出した出席簿が直撃する

「ただし！

声は抑えろ、馬鹿者

風呂場の声が響き渡っていたわ、アホ！」

「あう……」

若干涙目になりながら頭を抑えるシャルロット

やはり千冬の出席簿アタックは相当痛いようだ

だが、次の千冬の行為にシャルロットは痛みを忘れた

「だが、まあ敵が多いこの学園にあの鈍感が気づかないだろう……

そこら辺は安心しろ
私がサポートしてやる

その代わり、私の信用を大きくしてみろ」

なでなでと千冬が自分の頭を撫でながら微笑む笑顔に同性でありながらも見惚れてしまいそうになった

しかし、すぐさま意識を戻したシャルロットは元気よく頷いた

きっかけは保健の授業（前書き）

無性に甘いのが書きたくなりました

本編とは全く関係ないです
読まなくても構いません

ちよいとR-15以上かも・・・
糖度50%くらいです

きっかけは保健の授業

「司・・・これから何をするつもりだ？」

ベッドに押し倒された箒は目の前に笑みを浮かべている司に聞く

これからの出来事の予想が簡単すぎて引きつった笑みしか出ない箒

「わかってるだろ・・・」

今日の保健の授業聞いてたら我慢できなくなった」

司はそう言いながら自身の上着を脱ぎ捨てる

「・・・まだ風呂に入っていないんだが？」

「どうせ汗かくし・・・」

箒の上着を手慣れた手つきで取っていく
言っていることとは反対に箒は抵抗せず、司に身を任せているようだ

「夕飯の仕たっ、あっ！」

「今日は学食でいいだろ

てか、箸も準備万端じゃねえか」

「あう・・・」

身体に腕を巻き付けながら司を恥ずかしそうに上目遣いで見る

その顔は火照っており、

瞳も少しばかり潤んでいる

男からすればなんとも本能を刺激する姿だろうか

そんな彼女の姿に司は笑みを浮かべた

「大人しく食べられろ

いただきます♪」

「あっ・・・ダメ!!」

そのまま大人な夜を過ごすお二人だった

きっかけは保健の授業（後書き）

やっぱり攻められるより攻めるほうが好き

- ・友達からはMと言われましたが彼女からは隠れSと言われました・

司の技術（前書き）

更新できなくてすみません・・・

実は携帯が壊れまして小説家になろうにインできなくて・・・

この話はぶっちゃけ最後だけが本編に関わる話なんで他はすっ飛ばして構いません

箒や一シヤルのイチヤイチャは全くありません

司の近距離射撃の話です

ただいま活動報告にてアンケート中

司の技術

「だから・・・正確性を出すならスラスタ―に割くエネルギーを増やせばいいのよ!」

「それだと零落白夜の威力を落とすしかないだろ!」

「必要最低限以外使用してる時間を減らせばいいでしょ!」

常時展開してるからすぐエネルギーがなくなるのよ!」

鈴と一夏は白式のスラスタ―整備に互いに意見を言い合ってる

今日は機体整備の日であり、専用機持ちだけしかここにはいない

整備科の人間もいるべきではと思うとだろうが使用者はやはり操縦者が最終的に調整するのであって整備科の人間がいない時に整備できないというのはよくないのだ

だからこうして操縦者だけで整備する時間を設けているのだ

で、今は近距離型と射撃型で別れているのだ

「やはり何かしら対応はしたほうがよいのではないか、セシリアお姉様」

「そうですわよね・・・」

「俺みたいに近距離射撃ができるようにするか
もしくはラウラみたいに近接武器をつけるかだ」

「僕は何かしら近接武器を持ったほうがいいと思う
さすがにインターセプターはね・・・」

現在セシリアのブルー・ティアーズのデータを見ながら射撃組はこうして悩んでいた

セシリアの唯一の近接武器
インターセプター

だが、それは近接武器でありながらあまりにも心細い武器であった

「そもそも司さんはどうやって取り回しの難しい狙撃銃で近距離射撃をしてるんですの？」

その意見にはラウラやシャルも同意見のようだ

「近づかれたらそれだけ近くに標的がいるってことだろ？
後は銃口が敵の機体に当たって撃てなくなるのを防ぐためにスラス

ターで少し下がる

で、あとは一瞬だけスコープを覗いて微調整
零距离射撃は威力大だしな

例えば・・・

シャルはさ、銃撃戦のゲームとかやったことあるか？
パソコンのオンラインゲームみたいなの」

「一応、かじった程度ならあるけど」

それが今、何の関係が？
三人の表情はそんな感じだ

「クイックショットは聞いたことあるか？

あれと同じ感じなんだけど」

「えええ・・・！！」

聞いたことあるシャルは驚きの声をあげる

だが、そういうゲームをやったことのないラウラとセシリアわけが
わからず、苛立ちを見せる

「どういふことですか？」

「ええい、分かりやすく説明しろ新城！」

セシリアはシャルに詰めより、ラウラに至っては司の胸ぐらを掴んでいる

「ちょ、落ち着けラウラ！」

シャル止めてくれ！」

司が苦笑しながらもシャルに助けを求める

それに答えるかのようにシャルは提案した

「ラウラはパソコン持つてみたいだし、聞くより見た方が早いと思う」

てなわけで一同（射撃組のみ）ラウラもとい千冬の部屋に入る

なぜ千冬？

その疑問にまず説明しよう・・・

それは

ラウラの相部屋になる女子生徒がいなく、ラウラの要望で千冬の部

屋をご指名

当人は拒否したものの

知人であり、同じ女同士だから問題なし

そう周りから固められ、千冬は渋々了承したのだ

シャルとセシリアはあの完璧超人の千冬の部屋ということで緊張した表情だ

しかし・・・

「うわ・・・汚な」

「すまない、朝やる暇なかったからな・・・」

散乱してる衣服や酒ビンに缶など酷い有り様だ

それにより二人は一気に緊張が解けたようだ

ラウラは深いため息とともに毎朝こんな状態になると愚痴混じりに説明する

一応毎日片付けをしてるようなのだが今日は忙しかったようだ

「シャル、なんかオススメのシューティングオンラインゲームあるか？たいてい、どのゲームでも俺はクイックショットできるから」

「ん、わかった

一応検討ついてるから

会員登録とゲームダウンロードやっておくよ
だから司とセシリアは手伝って来て」

シャルはラウラを指指す

そこにはせっせと片付けるラウラが・・・

頷いた司とセシリアはラウラの元に行く

「片付け手伝いますわ」

「ありがとう、セシリアお姉様
では、衣服の片付けを頼む」

「ええ、わかりましたわ」

洗濯カゴを持っていたラウラはセシリアにベッド周りを指差しながら指示を出す

だが残された司は慌ててラウラに詰め寄る

「なあ、俺は！？」

「ああ、忘れてた
貴様だけよく忘れる体質みたいだな」

「扱いひどくね!？」

司のツツコミのような一言にラウラはため息と一緒に返事を返す

「貴様の印象は正直最悪だ

なぜ貴様のような男が箒お姉ちゃんと付き合ってるか不思議だがな

こちらの言葉で『りあじゅう』だったかな・・・

こんな女だらけの学園に箒お姉ちゃんみたいな良い人間と交際してる貴様なんて落第すればいいのに・・・」

「誰だ・・・こんな知識をつけた上に毒舌少女にしたのは・・・原作と違うじゃねえか」

あまりの変わり様に司は呆然としていた

そんな司にラウラは指示を出す

「缶類の片付けと台所の洗い物をやっておけ
サボるなよ？」

それと衣服には1mmも触るなよ？
触れたら問答無用で箒お姉ちゃんに

「新城が織斑先生の部屋を物色してた」と報告するからな」

「そんな嘘が通るわけ」「同居人の言葉であり、女の嫉妬は怖いぞ？」

司の言葉を遮り、冷ややかな笑みを浮かべるラウラ

主導権を握られ、司はラウラに従った・・・

まさに女尊男卑だ・・・

「ダウンロードまで終わったよ」

ちょうど掃除に区切りがついたところでシャルの一声がかけられた

司がシャルと交代し、椅子に座りマウスを動かしていく

そしてパソコンの画面はアップデート画面からゲーム画面に変わる

「ショットアタック・・・」

ずいぶんシンプルな名前だな・・・」

と呟きながら司はシャルと交代してキーボードの前に立つ

そして画面にはキャラクター名入力画面が映る

「IS学園生でいいかな・・・」

いや、待て・・・シャルは会員登録時に生年月日とか正しいの入力した？」

まさかと思いつつ聞く司

そんな司にシャルはキョトンとした表情で答えた

「そうだけどマズかったの？」

その答えに司はため息を吐きつつ名前を変更する

「こういうゲームではハッキングとか個人情報流出しやすいから基本的情報入力は適当でいいんだよ・・・

個人情報正式だし・・・

名前は・・・T大女子大生」

その名前に女子三人は引いた・・・

「司・・・君、男だね？」

「まさか、そっちの趣味があつたとは・・・」

「不潔ですわ！」

酷い言い様である

またもやため息を吐く司はちゃんと説明した

「あのな・・・こんなゲームだと男なのに女名とか・・・俗にネカマなんだがザラにいるぜ？」

逆に女で男、ネナベもいるしな

まあ、これも個人情報流出対策みたいなもんだ、俺はな
第一、ただ単に名前がこれなだけだ」

そう説明するも妙に納得しない三人
だが司は無視し、ゲームを始める

「サブにデザートイーグルとメインは・・・L96A1ないのかよ
他は・・・ロシアのSV-96とドラグノフ・・・お、フィンランドのTRG-21があるな
これでいいか・・・」

司は慣れた手つきで進めて行く

そして画面は変わり、ゲームルーム画面へ

「ずいぶん人数が少ないのですね・・・」

「いや・・・818なら結構な人数だぞ？」

まあ、プレイすればわかるさ

これはチームデスマッチ
決められた点数まで早く殺せば勝ちだ
もちろん死ねば生き返るしな

初心者はこういうチームデスマッチで鍛えるべきだな」

などと言いつつ、画面を見ながら操作する

ゲーム画面に映るステージは港のようだ

貨物船が相手の陣地であり、こちらが港の倉庫のようだ

中間には多数のコンテナがあり、障害物の多いステージだ

「まずはスナイパーはこうやってスコープを覗いて打つよな？」

敵を狙撃しながら説明する司はベテランなのだろう、次々と点数を稼いでいく

「じゃあクイックショットを説明するけど
まあ、とにかく見てくれよ」

そこで司は画面に集中する

自分のキャラを操作し、前線に出る

その間も司は移動しながらも敵を倒していくので

すると急に前からナイフを持ったプレイヤーがコンテナの陰から飛び出して来た

だが、司は焦ることなく、そのプレイヤーに銃口の向きを合わせ、一瞬だけスコープを覗いた瞬間撃つ

結果は敵プレイヤーに見事に命中

倒したのだ

しかしレーダーには背後にまだ敵が映っている

振り向けばアサルトライフルを今にも撃とうとしていたキャラクターがいた

司は数発ダメージを喰らいながらもまたもやクイックショットで倒す

その瞬間

司のキャラクターは狙撃され、死んでしまった

「まあ、こんな感じがクイックショット

一瞬だけスコープを覗いて照準の微調整

だいたい照準は基本的銃口の向きってことさ

で、俺はこの銃口の向きで照準を合わせるのをISに転用してるわけだ

スコープを覗けば視界は狭くなるがクイックショットなら銃口の向きで合わすから視界が狭くなるのは一瞬だけ

それじゃあ死んだら交代ってことでセシリアは訓練だけど他二人は普通に楽しみなよ

一応、N押せば死んだ時にアサルトライフルと交換できるから」

訓練もあるがたまにはこうやって遊ぶのもいいだろう

三人の様子を見ると・・・

ラウラ

「ええい、リロードが遅い！

AKはリロードしやすいはずだろう！」

さすが軍人

連続3キルを叩き出した

しかしキャラクターの動きに不満があるのか
愚痴連発である

セシリア

「ああ、もう当たりなさい！

ああ、

後ろから！

ナイフ！あああ！」

後ろを取られ、前から挟み撃ちになり、大慌て

見ていて笑えるプレイだった

シャル

「確かGで武器捨ててるんだよね・・・」

撃って敵を倒すなり武器を捨て、相手の銃を奪い、次の敵を撃つ

それを繰り返し、見事5キル

リロードなしでやったそれはまさに高速切替のようだった

そして司

「よ、ほい、孤城チキンはボムで死んでろ！」

コンテナの影から素早く狙撃し、二人を倒した後
三方をコンテナに囲まれたバリケードのようなところから籠って
いるところにグレネード爆弾を投げ入れる

すると三人が吹き飛んだ

次の瞬間、いきなり現れたアサルトライフルに撃たれながらもコン
テナの影に一度隠れる

そして追いかけて来た敵を一瞬だけ銃口を出し、狙撃する

更にもう二人追いかけて来たのに気づいた司は素早く狙撃

1人を倒したが、そこでスナイパーライフルのマガジンの弾切れになる

すでに敵との距離はリロードしてる暇すらない距離だ

直ぐ様サブ武器のハンドガン、デザートイーグルに持ち換え、数発撃ち込んでヘッドショットを決めたがそこで飛んできたグレネード爆弾によって死んでしまった

計8キルだ

「凄い・・・強いね司」

「なんですぐに照準が合いますの・・・それに敵の位置も・・・」

「お前よりも下手というのが少々不満だが確かに巧いな・・・」
感心して見ている3人に司は満面の笑みで答える

「まあ、経験だな

アドバイスは視界を広く

やられそうになっても落ち着いて

あとセシリアにアドバイス

これはISでのアドバイスね

正確に狙い撃つのもいいけどフェイントや誘導射撃も戦略に入れる
といいよ

そしてもし、クイックショットができるようになればB T兵器も持
つセシリアは鈴や一夏のような近距離メインの敵からすれば天敵だ
ろう

離れればB T兵器も兼ねた射撃の雨

近づいても零距离射撃による大ダメージ

だから頑張ってみろよ

近距離武器をつけるのはそれからだ」

「・・・わかりました

早速、パソコン買って特訓しますわ!」

セシリアはグッと拳を掲げる

そんな姿に司はニコリと微笑んだ・・・

「ただいま」

司が重い足取りで帰ってきた

「お帰り、だいぶ疲れてるみたいだな・・・」

私は受け取った制服の上着をハンガーにかけながらそう声を掛けてやると司は笑みを浮かべていた

「疲れたけど、楽しかったさ

今日はセシリアがな・・・」

楽しそうに話す司に相づちを打つが、正直、全く頭の中に入ってこなかった・・・

（専用機か・・・）

自分だけの力が欲しい・・・

司と共に背中を預け、歩める力が・・・

私はそのことで頭が一杯だった

前の謎の無人IS事件やラウラの時、司は一人で解決しようとした
だが私にとっては不安、何よりも自分が好きな人の力になれないの
が一番の不満だった

「ごちそうさま」

「片付けはやっておくから、大浴場に行ったらどうだ？
確か今日は男子が使える日だろう？」

「おう、サンキュー
行ってくるぜ！」

手早く準備を済ました司は笑顔でそう言うなり部屋を出て行く
それを確認した私は携帯に手を伸ばし、ある電話番号の前で指を止めた

「・・・嫌いな姉さんだけど、この時ばかりは感謝しよう

もしもし・・・」

元氣よく電話に出た姉に筭はそっと自分の気持ちを打ち明けた

胸を揉んでも大きくならないらしい（前書き）

アンケート募集中

詳細は活動報告にて

胸を揉んでも大きくならないらしい

「なあ、3人とも」

一年の中で蒸し暑い梅雨が終わったにも関わらず、しとしとと雨が降る土曜日

司、箒は一夏、シャルの部屋にお邪魔していた

そんな中、クーラーの効いた部屋でゴロゴロ談笑していた時、突然、一夏が何か思い出したかのように話を切り出した

「明日、Wデートしないか？」

その発言に3人は我が耳を疑った・・・

「ふー、いい天気だな
夏らしい天気だ」

「まさにデート日和だな」

翌日の日曜日

待ち合わせの駅前の時計の前で一夏は手で遮りながら空を見上げ、
司は周囲を見渡していた

一夏の服装は白い七分シャツ、茶色の革ベルトにメッシュの入った
ジーンズ

左手首にある黒の腕時計

シンプルだが季節的にも程よい私服だった

司は黒と灰色の縞模様の七分シャツに黒のジャケット、紺色のジーンズ

長い髪は下ろさず、ポニーテール縛っている

二人の姿はまさに白と黒だ

「けど、まさかお前からデートって言葉を聞くとは思わなかったわ」

「失礼な、俺だってそれくらいの知識はある

それにどのみち買い物はしないといけなかったしな」

（知識はあっても超絶鈍感じゃ意味ないだろ）

口には出さずにそう思った司だった

そして今日は来週行われる臨海学校で水着が必要になるのだ

そこで今日は水着を買うついでにデートということになったのだ

すると前から見知った黒と金が歩いて来ていた

「お待たせ、結構待った？」

「いや、それほど待ってないさ

箒はずいぶん大人っぽい服だな
うん、綺麗だよ」

「あ・・・ありがと・・・」

箒はニツコリと笑みを浮かべた
その笑みは満面の笑みだ

箒の服装は白で小さな花柄の模様が入った薄い生地シャツに黒で袖口を折ったジャケット、ジーンズに茶色のサンダル
首には金色のネックレス

そして普段ポニーテールな髪が下ろされているためか、新鮮であり大人っぽかった

和風が似合う箒だが、こういったお姉さんっぽい服もなかなかだ

「一夏、どう僕の服？」

「似合ってるよ、シャル
華やかでオシャレだと思うぜ」

「一夏もシンプルでカッコいいよ」

シャルの服は原作とだいたい一瞬であり、半袖のホワイトブラウスの下にグレーのタンクトップ、ティアーズスカート
違うと言えば、髪型がサイドテールに纏めているところだろう

可愛さを更に引き立ていた

「じゃあ、電車に乗ろうか

おいで、箒」

司はそつと箒に手を差し伸べ、箒はその手に自然と自分の手を重ねる
その一連の動きが息ぴったりカップルであり、エスコートされてる
箒をシャルは羨ましく思い、一夏を見る

しかし・・・

「どうした、シャル？」

電車のチケット買いに行こうぜ」

「はぁ・・・期待した僕が悪いんだよね」

「ん？なんか言ったか？」

「一夏が馬鹿ってこと！

このニブチン！」

「・・・どっか変なこと言ったか？」

少しは成長？したがやはり唐変木っぷりは健在だった

「じゃあ20分後にここな」

駅前の大きなショッピングモール『レゾナンス』

その2階にある水着売り場に来ていた

司はその男性用と女性用の境界線の通路を指差す

司と一夏はスタスタと男性用水着売り場に向かった

「これでいいか」

司は決まったか？司？」

一夏はネイビーブルーのシンプルな水着を手にしたところで先ほどまで一緒にいた司の姿が見えないことに気がついた

一回り男性用水着売り場を探したところで試着室から出てきた司を見つけた

「司、その格好・・・」

「おう、カッコよくね？」

（高校生がする格好じゃないだろ・・・）

内心でそうツツコむ一夏

司の格好は紫に近い赤色の水着に黄色のアロハシャツ
髪はオールバックにし、サングラスをかけている

正直、20代のお兄さんがするみたいな格好だ

「まあ・・・いいんじゃないか」

ツツコムのも面倒だと思った一夏はそう相槌を打ち、司と一緒に会
計に向かう

「あれ？ 箒達はもう買い終わったんか」

「2人とも早いな」

合流地点に戻れば箒とシャルは待ってたかのようにこっちに歩み寄る

「ううん、ちょっとね・・・僕の水着は一夏に」

「私の水着は司に選んで欲しくてな・・・」

「じゃあ実物見に行くか」

一夏の決まりの一言に司と一夏は女性用水着売り場に入る

「いざ入ったが・・・」

「恥ずかしいな・・・」

一面、女性用の水着が視界に入る

水着売り場は下着売り場ほど抵抗感はないものの、やはり恥ずかしい

目のやり場に困るのだ

それから2人は互いの彼女の水着を選ぶために一度別れた

司は箒と一緒に水着を探すが・・・

そこには落ち込んでいる箒が・・・

「どうした、箒？」

「・・・ない」

「なんて言った？」

「すまんがもう一度言ってくれ」

ポツリと呟いた言葉が聞き取れず、もう一度と促すと箒はガバツと顔を上げて答えた

「私のサイズに合う水着がないんだ！」

「・・・」

半ば自棄に答えた箒に司はつい言葉を失った

サイズに合わない水着

痩せているのはいつも夜に見ているからわかるため胸のサイズだとわかったが試しに聞いてみたところ・・・

「・・・Eだ」

「マジで!？」

「おかげで買える種類が少ないのだ！」

まさかここまで育っているとは・・・

驚きながらも内心でガッツポーズを決める司

すると箒が2着の水着を持ってくる

「サイズがあるのがどっちなか知らないんだが、選んでくれないか？」

差し出されたのは

白い生地にも黒の線が入っており、胸元にリボンがあり、首後ろで紐を縛るタイプ

黒い生地にも胸元は金色のリングが左右の胸の生地を繋げるようについでいて、こちらも首後ろで縛るタイプだ

（白は原作と一緒に黒はアダルトなビキニ・・・
どちらも捨てがたいが・・・）

司は水着から箒の顔へと視線を移す

見れば彼女はチラチラと白の水着を見ている

「（箒は意外と可愛いものが好きだしな・・・）
白いほうにするよ

こっちのほうが箒には可愛いと思うしな」

「・・・そうか、じゃあ会計を済ましてくる」

「・・・ったく、可愛いな」

嬉しそうに笑みを浮かべながら会計に向かう箒の姿に司は惚れ直す
気持ちになる

正直に言おう

端から見ればリア充、社会的に死ねばいいと感じる表情だ

余談だが一夏達の元に行けば原作通り試着室の前でお説教が始まっていたので箒と司はそのまま二人っきりでデートをし、その空気は糖分70%だったとさ・・・

胸を揉んでも大きくならないらしい（後書き）

胸を揉むと胸にある細胞が死滅するから揉むと大きくなる説は黒らしい

実際揉まれても大きくならなかった（親友説）

今回は短め

一シャルは後半カットしてしまいました
すみません

アンケート、待ってます！

海奈はSです（前書き）

海奈視点

先に臨海学校の温泉に行った山田先生と海奈を書いてみた

海奈はSです

「暑い・・・」

私はそう呟きながらもパソコンの画面を見ながら文字を打っていく

「これが人間界の脅威なのね・・・」

私はタオルで汗を拭いながらも仕事を進める

今やっているのはIS学園への報告書の制作だ
来週行われる臨海学校の実地調査の報告なのだ

山田先生と同行してものの山田先生は部屋を出て行ったきり帰ってこないため、こうして一人で制作をする羽目になっている

何より少しでも経費を安くするため一番安い部屋を取ったのだがクーラーはついておらず、扇風機一台のみ

今は真っ昼間なため炎天下だ

そんなので暑さが和らぐはずがない

私は永らく神界にいたため『暑さ』を忘れてしまっていたのだ
そのせいか、顕現した身体は暑さに全く抵抗力がなくなっていたのだ

「力使って涼しくしちゃおうかな・・・」

自分の力は水

近くに海水があるためここら一帯の温度を下げるのは息をする程度のように簡単なのだ

空いてる窓に手を向ける

それだけで海奈が見ている10kmほど先の海で渦潮が起き、竜巻によって海水が空に立ち上る

海水が遥か上空まで溜まったところで海奈は広げていた手を閉じる

その瞬間、莫大な海水は霧のように霧散した

しばらくしたあと、辺りはひんやりとした空気が漂った

「新城先生！」

ビクッウウ！

いきなりの山田先生の登場に心臓が止まる勢いでびっくりした

「どうしたんですか、山田先生？」

冷静さを装いながら笑顔を向ける

内心は心臓ビクビクだ

「さっき外で凄い自然現象が起きましたよ！」

急に竜巻が起きた瞬間、空に水ができたと思ったらいきなり消えて

しまったんです！」

それは自分がやりました♪

内心で笑みを浮かべる

誰もこんな一教師がやったとは思わないだろう

悪戯が成功したような気持ちが私には心地良かった

さてと……

「まあ、そんなことが起きたんですか
私は全く気づきませんでしたよ」

「ええ！？

音も結構大きかったですよ！？」

身体も小さいからかコロコロ変わる表情は可愛いと思いつつ、ささやかな復讐をする

神である自分が山田先生が何をやっていたかなど調べるなど造作もない

「報告書の制作を『1人』でやっていたので集中していたのでしょう
山田先生がいなくて大変でした

確かこれは今日中、しかも夕方までの報告ですし」

「あ……」

しまった……

そんな表情だ

すっかり忘れていたみたいだ
だが、忘れていたからと言って暑い中報告書を制作した私のストレス発散には足りるわけなく

「例え山田先生が海に夢中で視察という名目で遊んでいたとしても私は気にしませんが・・・」

サアーと山田先生の顔が青ざめる

そして顔にはどうして知っている？と書いてある

「できるなら私もしばらく休憩が欲しいのですがよろしいでしょうか？」

「は・・・はい

どうぞご自由に休んでください」

「ありがとうございます♪」

私は自分の荷物を持って部屋を出ていく

山田先生は泣く泣くパソコンの前に座っていた

「人間界はこういう弄りがいがあるところがあるから好きなのよね」
」

ルンルン気分で廊下を歩く海奈であった

海奈はSです（後書き）

ここで海奈の力の欠片を説明

海奈は水を司る神で担当が司のいた世界だったということです

楽しみ（前書き）

束しかでない話

前置きみたいな感じなので短いです

楽しみ

「やっぱりいないな」

とある地下室にて

部屋全体パイプやパソコンによって埋め尽くされている

そんな中、うさミミを着けた女性――篠ノ乃東は笑みを浮かべながら世界中の人物名簿を見ていた

『新城海奈、新城司』

その名前の人物が一切ないのだ
経歴はあるが出世歴がどこにもないのだ

ましてや『自分が作ったはずがないコア』を使っているのだ

『おかしい、わからない』

この2つが今の東の脳内を占めている感情だった

普通の人間だったら慌てるが全てわかってしまうこの天才には楽しさを生むスパイスになっていた

「何よりお姉ちゃんとしてこの人に興味あるね」

自分の妹が幼なじみの弟ではなく他の未知の男を好きになった

妹の性格をわかっている以上、悪い人間ではないと判断しているが『存在するはずがない』人間というのが束が認められない理由だった

「楽しみだな」

新たな楽しみが増えたのは束には堪らなく嬉しかった

彼女の特権（前書き）

今回は微糖

そしてうさぎが燃えます

彼女の特権

・・・・・・・・

「――きろ」

（・・・・ん？）

「そろそろ起きろ、もうすぐ着くぞ」

（ああ、臨海学校か）

隣の席の箒の声で目が覚める
バスの窓から外を見ればキラキラと太陽の光によって輝く海と砂浜
が見えた

ちなみに本当は隣が他の女子だったのだが、その女子と箒の隣だった女の子に一夏寝顔写真で買収

無理矢理、箒の隣にしてもらったのだ

訓練の時に公言して以来、箒が嫌われるなどと言った虐めもないよう
うで、むしろツンツンしていた箒が丸くなり、仲良くなることが多
くなったようだ

「なんだ？私の顔見て・・・・寝惚けているのか？」

「いや、ちょっと寝起きの栄養補給しようと思ってな」

「わぁっ!?!」

そう言うなり箒を胸に抱き寄せる

彼女特有の甘く、心地よい匂いに司は心が落ち着き、程よい目覚ましになる

「ちょ・・・離せ、司!」

「落ち着けよ、箒」

「あ・・・わふっ・・・」

恥ずかしいのか、

じたばた暴れるが額にキスをすれば大人しくなり顔を埋める

そして落ち着いたところで箒成分をおもいつきり堪能する

やっぱり箒は可愛いな

自分の胸に顔を埋めている箒の頭を撫でてやる

気持ちいいのか目を閉じながら、小さく息を吐いていた
頬は少しばかり赤くなっている

そんな箒を見ていた女子達は・・・

「わぁゝ、いいなゝ」

「新城君って、結構大胆だね」

「箒ちゃん、顔真っ赤で可愛い」

「彼女の特権、羨ましい」

周りから黄色い声上がる

そろそろ離してやるか・・・さてと静めるか

「頑張って男を見つけるんだな

俺は箒専用だから期待はするなよ

それと騒ぐと前から制裁鉄拳が飛んでくるぞ」

そう言って一番前の席を見れば我がクラスの先生である千冬がこちらを睨んでいる

女子達はそっと静まり返った

「ここがお前達の部屋だ」

案内されたのは二人部屋の小部屋

俺達が荷物を置くなり、千冬姉は入浴時間の説明と問題を起こすなという注意をしてから部屋を出て行った

「司、早く着替えに行こうぜ」俺はせっせと水着など準備をする

「まあ、慌てるなよ

シャルは逃げないぜ？

顔、緩ませやがって♪」

うわ、顔に出たか・・・

けど、シャルの水着姿早く見たいんだよな・・・

絶対シャルの笑顔にあの水着、砂浜は似合うって・・・

「わかった、わかった

さあ、行こうぜ」

「おう！」

俺は楽しみにしながら更衣室に向かった

「なあ一夏、コレは？」

「・・・無視しよう」

吹き抜けの廊下から見える庭に生えているうさミミ
横には『抜いてね♪』と看板が立っている

誰かわかっている一夏だがシャルの水着姿を見たいがために無視し
ようと決め込んだ

もちろん原作を知っている司もわかっている

二人とも厄介ごとに関わって千冬の鉄拳制裁を食らいたくないのだ
ろう

「一夏、迅速かつ穏便にこれを抑える方法思い付いた
織斑先生にコール、俺が説明する」

「なるほど、頼む」

一夏は素早く携帯を操作し、司に渡す

そしてしばらくして・・・

『どうした、一夏？』

「すみません、新城です」

『なんだ、新城か・・・
何かあったのか？』

「（うわ・・・声低くなったよ
絶対不機嫌になったな）

うさミミ生えた庭を見つけたんですが・・・」

『・・・場所を言え』

それと食堂から簡易ガスコンロのガスを借りてそこで待っている』

「更衣室付近の吹き抜けの廊下です」

それを説明するなりブチリと切られる

「千冬姉、なんだって？」

「なんか食堂からガス借りて来いってさ」

「・・・ああ、千冬姉

かなり不機嫌だぞ

ちよっとガス借りてくる」

一夏は急いで食堂に向かって行った

（そんなに不機嫌なのか？）

姉弟だからわかるのだろうか？そう疑問に思っていたが、どれほど不機嫌かはすぐにわかった

一夏が戻って来てからすぐに千冬がやって来た

なぜか不気味な笑い声が聞こえる

「さすが我が弟
何をするかわかってるじゃないか」

ガスピレーの吹き出し口に千冬が持つて来たライターをテープで
固定

即席の火炎放射器だ

「司、さっさと行こう
巻き添え喰らう」

「あ、ああ・・・」

壊れかけている千冬の笑い声と間高い悲鳴は悪夢に出てきそうだった・・・

臨海学校1日目（前書き）

セツシー離脱です
オルコツ党の方、すみません

臨海学校1日目

「あ、織斑君だ！」

「鍛えてる筋肉、逞しいな〜！」

「もしかして隣にいるの新城君!？」

「ちょっと怖いかも・・・」

などと俺たちの姿の感想を言われている

もちろん、聞こえているわけで俺はともかく司の怯えの女子が何人かいるわけで・・・

見れば司はちよつと落ち込んでいる

「なあ、そんなに怖いか？」

「サングラス取れば大丈夫だ

正直、サングラスあるかないかでだいぶ変わるぞ」

「仕方ないか・・・」

不満そうにサングラスを外し、オールバックの素顔が出された

やっぱりサングラス外せばカッコイイと思う

女子の反応を見れば・・・

「わっ・・・サングラス外せばカッコイイ」

「ちよつと大人っぽいよね〜、身長もあるし」

「あのシャツから見える胸筋が色っぽいかも」

180度変わって好評価

司も満更でもないようだ
ちよっと笑ってる

さてとそろそろかなと思った時、ちょうど目的の人物が出てきた

「やっぱりこういう場所で着たほうが一層似合ってるな、シャル」

「ありがとう、一夏♪」

夏の太陽によって輝くように見える白い肌

シャルの金髪に似合う黄色の水着

そして美しい四肢は綺麗な線を描いていた

自分の彼女がここまで綺麗に見える

恋は盲目

そう聞いたことがあるが、たった今、その意味がよく理解できた

「シャル、一緒に泳ごうぜ！」

「うん！行こ、一夏！」

俺はシャルの手を引いて、海に向かった

「ったく、あの2人は元気だな」

「お前は泳がないのか？」

元気よく駆け出したカップル2人を見ながら司は箒の手を引きながら学園側が用意したテントにビニールシートが引かれた休憩所に向かっていた

「俺はのんびりとしてるほうが好きなんだよ

それに箒と一緒にいたいしな」

「そ・・・そうか・・・」

嬉しかったのか、箒の表情に笑みが浮かんでいる

なんだかんだで甘い空気を生んでいる2人であった

「あつれ、何してんだ？」

「その声、新城か!？」

シートに来てみればタオルミイラ・・・もといラウラがなぜか正座

して座っていた

「タオル取ったらどうだ？」

「うう・・・それは・・・」

箒の一声にラウラは言葉を濁しながら言い淀む

なぜラウラがこんな格好をしているか理由を知っている司は笑みを浮かべながら促してやる

「ラウラ、お前の水着姿は似合ってるぜ
だから自信持てよ

箒もラウラの水着姿見たいだろ？」

司の促しを理解した箒も笑顔で促す

「そうだな・・・

可愛いラウラならどの水着も似合うだろう

きつと、千冬さんもそう思うだろう」

「教官が・・・なら・・・」

千冬という名前に反応したのか、ラウラは一枚ずつそつと外して行く

「お、可愛いじゃん」

「ああ、似合ってるぞ」

原作と同じ黒のレースの水着だ

違いと言えば、アップテールではなくサイドテールになっているが綺麗な銀髪は太陽の反射で輝き、可愛らしさを醸し出している

「そうか・・・可愛いか・・・」

ラウラは頬を紅く染め、嬉しそうに笑みを浮かべる

自ら嫌っている司の前、しかもその本人に言われていることに気づかないほどだ

「えへへ・・・」

「おーい、ラウラ」

「きっと嬉しさにいっぱいなんだろう
そつとしといてやれ」

まるで自分のことのように言い告げる
たぶん、自分も体験したから言えるのだろう

するとこちらに1人歩み寄って来ていた

威風堂々

そんな言葉が似合いそうな人物――千冬だ

「ほら、餓鬼どもは休んでないで泳いで来い」

普段纏めあげてる髪をストレートに降ろし、ビキニのような黒い水着は長身ナイスバディの千冬にかなり似合っており、言うならばエロい・・・

（黙ってれば一流女優並みに美人なんだけどな）

（千冬さん、その性格さえなければきっとモテてるんだろうな・・・）

2人してなんと失礼なことを・・・だが事実

それを口に出していないにも関わらず・・・

「お前ら、失礼なこと考えてただろう」

「「いえ、そんなこと思ってません！」」

さすがバカップル

息ピッタリで高速の如く返事を返す

こんなところまで来て、アイアンクローは受けたくないのだろう

「それじゃあ、僕たちは遊んで来ますのでごゆっくり

あ、ラウラお願いします

行こうか、箒」

「ああ、少しほど水浴びでもしよう」

そう言ってその場を後にする

余談だが、トリップから戻ったラウラは自分の隣にいた千冬の姿に鼻血吹いて気絶したという・・・

時は経ち、夜

楽しい食事を終え、箒やシャルなどいつもの女子5人は千冬の部屋にいた

ちなみに一夏はマッサージを終え、風呂に
司は用事があるらしく、海奈の部屋に行っていた

「まあ、そう硬くなるな
これでも飲んで落ち着け

今は教師、生徒としてではなく普通に女同士として話せ」

「は、はあ・・・」

5人は勧められるままジュースを飲む

それを見た千冬はニヤリと笑い、冷蔵庫からビール缶を出しては勢いよく飲む

「じゃあ聞くんがオルコット、鳳は一夏のことはまだ好きか？」

単刀直入の問い

それに最初に答えたのは鈴だ

「私は・・・私はまだ好きです！
シャルロットに取られたのは悔しいですがあと2年半諦めません！」

「僕は絶対に渡さないよ！」

鈴が龍ならシャルは虎だろう

2人の瞳にはメラメラと炎が灯ってる

そしてセシリアはというと・・・

「私は・・・鈴さんを応援しますわ」

「「え・・・」」

まさかの戦線離脱

シャルと鈴は啞然とした表情でセシリアを見る

「正直シャルロットさんが再転入した時の一夏さんとの雰囲気を見ればどういう関係がわかりますわ

その時に心のどこかで諦めたんだと思いますの

けど鈴さんがそれでもなお、諦めないって言った時、決めましたわ

私は彼女を応援しますわ！」

笑顔で鈴に向け、強く頷くセシリア
そんな彼女を鈴は笑顔で答えてやる

それは同じ人を恋した絆だろう・・・

だが、そんな2人を前にラウラが立つ

「ならば私は戦友と友の恋の邪魔をする者から2人を守ろう

これで2対2で対等だろう」

「ラウラ・・・ありがとう」

シャルは心強い味方に安心する・・・

まさに頂上決戦だ

「ハハハ、青春してるな

餓鬼ども、ほどほどにしとけよ」

「アハハ、そうですね」

端から見てる千冬と箒は4人の姿に笑っていた

しかし・・・

『ガシリ』

「えっ・・・？」

隣にいる千冬にガツチリと肩に腕を回され、ホールドされた箒

振り向きたくないが振り向いてしまった

そこには悪戯っぽい笑みを浮かべた千冬が・・・

「こいつらは好きな男の話をしたんだ

お前だけ新城のことを話さないのは不公平だろう

全部吐いてもらうぞ

そうだろ、お前たち」

「「「はい、織斑先生！」「」」

（う・・裏切り者おおお！）

話終えるまで終始、箒は茹で蛸のように赤面していたそうだ

『コンコン』

「どーぞー」

「俺だ、女神」

「来ると思ってたよ、司ちゃん」

真剣な面持ちの司を海奈は笑顔で迎え入れた

海奈はベランダ付近の椅子に腰かけており、向かいの椅子を指差す
司はそのまま向かいの椅子に座るとそっと首に掛けてあるＩＳ－
リクルアを外し、テーブルの上に置く

「明日、専用機持ちの訓練があるが必ず篠ノ乃東が来て、リクルア
について聞かれると思うが・・・聞かれても大丈夫なのか？」

自分はイレギュラーの存在
そしてこのＩＳもイレギュラーだ

不安はあるのだろう

だが、そんな司の言葉を聞いている海奈は未だに笑顔だった

「大丈夫だよ、そのコアは『４６８』個目として篠ノ乃東が開発し
た設定にしてあるから

もしデータを見せてと言われたら見せてもいいよ

データを君以外勝手に弄れないようにしてるし、コアへの強制アク
セスもできない

私自身が創ったＩＳだからね

けど、まあ聞かれるだろうね

彼女の記憶だけは一切弄ってないしね♪」

「えっ・・・弄ってないのか？」

「私が弄ったのは篠ノ乃東以外の人間全て
君が２番目のＩＳ男性操縦者として認識させ、君は織斑一夏ほどじ

やないにしても日本のIS政府の研究対象だよ？

まあ、君のIS開発責任者は私の設定で無理矢理、私にしたけど」

そこまで聞いて司は啞然とした

そして1つの疑問が・・・

「そこまで世界を弄ってもお前に影響はないのか？」

そんな心配紛れの疑問

だが海奈は安心させるかのようにニコリと笑いながら答える

「大丈夫だよ

この世界の担当の神とは旧い付き合いだし、世界の崩壊もしくは世界の欠落になるほどの影響がない限りお咎めはないよ

それに彼も暇潰しにはいい話題らしいしね」

「そうか・・・」

司はふうと息を吐き、胸を撫で下ろす

なんだかんだ言って、海奈を心配してるようだ

「ならもう用はないよ

せっかくの人間界の温泉、楽しめよ」

席を立つ司

すると海奈が何か思い出したかのように顎に人差し指をあてる

「そうそう・・・」

篝ちゃんの挨拶は頑張りなよ？

篠ノ乃東は気に入らない人間には話すらしてくれないみたいだから
頑張って挫けずファイト！」

「うっせやい！」

顔を真っ赤にして出ていく司に海奈はクスクスと笑う

「あーもう・・・久々の人間界、いや人間としての存在は楽しいな
罪がこんなに楽しいとは思わなかったよ」

彼女は空に浮かぶ月を見ながらそう呟いた

紅椿登場（前書き）

・・・箒、束、千冬、一夏、司以外空気・・・

出てきたのは最初と最後だけだった

紅椿登場

臨海学校2日目・・・

学年の生徒が海岸に集まる

そしてその整列している生徒の前では千冬を筆頭に教師職員が並んでいた

「では各自、追加パッケージなどの整備料の生徒とともに試運転な
ど行うように！解散！」

千冬の合図を期に生徒達は打鉄やラファールなどを展開し、各々活動していく

そんな中、専用機持ちだけ箒とともに海岸沿いの一角に集まっていた

402

「専用機持ちだけ集まってるのになんで箒がいるんですか？」

その鈴の質問にセシリアやラウラ、シャルル、一夏は同じ疑問を感じていた

「それは今日、こいつの・・・」

千冬がそう言いかけた瞬間、遠くから砂煙を巻き上げながらもの凄い速さでこちらに突進する女性がいた

「ちゅゅちゅゅあうっ！」

「その名前で呼ぶなと何度言ったらわかる」

千冬は必殺技のアイアンクロードでギリギリと彼女――篠ノ乃束を締め上げる

だがその尋常じゃない迎撃を尋常じゃない身のこなしで抜け出す

そして束はそのまま箒の前に着地した

「やあ、元気そうだね」

「どうも」

笑顔の束に箒は素っ気ない返事をする

束は箒の身体をじっくり見ながら鼻を鳴らした

「フフン、剣道でも有名な箒ちゃん

私は鼻が高いよ

背もおっきくなっただし、何年ぶりだろうね

特におっぱいもこんなに成長し、ゴフツ！」

「蹴りますよ？」

「蹴ってから言ってるよ・・・

しかも、まさかの蹴り・・・」

普段反撃を行う際、竹刀を使うのだが今回は膝蹴り

おっぱいを揉んでいた束は膝蹴りを顎にモロに食らった

そんな束は周りからすれば乱入人であり、皆が手を止めている

「束、自己紹介をしたらどうだ？
うちの生徒が困っているんだが」

「おお、そうだね
私が天才開発者、篠ノ乃束だよ
よろぴく〜♪」

クルリと一回転
最後に某美少女戦隊のようにウインク&右目の横にチョキピースを
決める

だがそんな自己紹介に再び騒然
ノリについていけなかったようだ

「はぁ〜、コイツに常識を求めた自分がバカだった・・・
各生徒及び職員はコイツを無視してください
大事なことですのでもう一度言います
無視してください」

珍しく千冬の念を押す指示に皆、各自の作業に戻る

そして箒は姉に期待を込めた言葉を促す

「姉さん、あれは・・・」

「もっしろ〜ん、用意してあるよ
箒ちゃん、専用IS特と御覧あれ〜!!」

束が自分の横を手で示す

しかし、そこには何もない

そこで束がパチンツと指を鳴らした瞬間

「「「えっ!?!」」」

その場にいた全員が目を疑った

いきなり何もない空間に突如、ひし形の塊が浮いていたのだがら

「フッフ、私特性のステルス機能には驚いたね〜♪
さて、驚くのはまだまだあるよ

これが箒ちゃん専用機、『紅椿』!

全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ!

全体が真紅のボディアーマー

その真新しい装甲は太陽の光の反射により、光輝いている

「さあ!箒ちゃん、今から私と一緒にパパッとフィッティングとパーソナライズを終わらせようか!」

そう言って空中投影ディスプレイに映るデータを見ながら同じく空中投影されているキーボードを打っている速さははや神業だ

そして5分ほどフィッティングを終わらせてしまった

「あとは自動処理に任せておけば終わりだよ
さてさてその間にいっくんのIS見せて
東さんは興味津々なのだよ」

「え、あ、はい」

一夏は戸惑いながらも白式を呼び出す

そして東はどこからか出したコードを取り出すなり、白式の装甲に
ブスリと差し込む

すると先ほどのように空中投影ディスプレイが浮かび上がった

「データを見せてね」

ん、不思議なフラグメントマップを構成してるね」

などと面白そうにデータを見ていく東

そして一通りデータを見るなりディスプレイを消し、次は司に向き
合う

「さてと・・・君が箒ちゃんの彼氏だね？」

ふと東の雰囲気は冷たくなった

だがそれに気づいたのは千冬、一夏、箒の昔から東を知っている3
人だけだ

3人の表情が強ばる

「妹さんにはとても助かってます・・・

自分を支えてくれる大切な人です

こうして天才開発者の篠ノ乃博士として

そして箒のお姉さん、篠ノ乃東さんとして挨拶できて良かったです」

司は緊張しながらも精一杯言葉を絞り出す

原作と実際会うのは実感が全く違い、雰囲気も全く違っていたのだ

「いっくんじゃないのはちょっと不服だけど・・・

まあ、日本人だし第一印象は合格かな

君もIS専用機持ってるんでしょ？

データ見てあげるよ」

「お願いします」

できるだけ反抗的な態度はしないように

今、ここで束の機嫌を損ねるのは大変マズイ

司はそう心に感じながら相棒のリクルアを展開する

そして一夏と同じようにデータを見ていく束

「へえ、これは面白いISだね

白式と似てるけど全く逆のタイプか」

スペックは化け物並みだね・・・
紅椿といい勝負だよ

このISは誰が作ったんだい？」

やはり予想通りの質問に司は焦らずに答える

「新城先生・・・自分の母が開発責任者です」

「そっか」

・・・

はい、ありがとう

交際の件だけど、今は良しとしてあげるよ

箒ちゃんが選んだんなら仕方ないもん

けどね、箒ちゃん泣かしたら許さないよ」

『ゾッ!!』

その場にいた千冬を除く、近くにいた全員がビリビリと肌が震えた
とてつもなく冷たく鋭い殺気

司はなんとか耐えながら頷いた

「わ、わかりました・・・」

「ならばよし

さて箒ちゃん試運転してみよっか」

武器は画面に表情されるからいろいろ試してみなよ」

「わかりました」

箒は意識を集中させた・・・

飛ぶイメージ

スラスター吹かし、瞬時に上昇

そう思った瞬間、紅椿は自分の想いに答え、上空200メートルの位置に滞空していた

（す、凄い・・・）

打鉄の数十倍の反応の速さだ

まるで自分の身体の一部のように・・・

「武装は・・・」

両腰に携えられた刀を抜き、画面を見る

「突きによる『雨月』
斬りによる『空裂』」

画面データを見るだけで使い方が感覚でわかった

まずは『雨月』

右肩を引き、一点集中をイメージする
目指すは目の前に滞空している雲

「はぁっ!!」

気合い一喝と共に素早い突きを放つ

同時に雨月と共に箒の周囲に紅い塊が展開し、そこから順番にレーザーが放たれ、雲を蜂の巣に変えた

次に『空裂』

「箒ちゃん、今からミサイル打つから空裂で迎撃してみなよ」

「わかりました」

いつもと変わらぬ姿なのになぜかプライベートチャンネルから通信してくる姉に箒はさも同然のように返事をする

束は言うなり、自分の横に16連装ミサイルポッドを展開し、全弾を箒に向かって打つ

「箒！」

一夏が心配そうに叫んだ
だが、司は

「大丈夫だ、箒ならー！」

ISのマイクは細かな音までも拾う

もちろん箒はそれが聞こえており、それに答えるかのように右脇下に空裂を構えた

「やれる、この紅椿ならっ！！」

そして回転するかのように横一閃

その斬撃は紅く帯状のレーザーになり、ミサイル全弾を撃ち落とした

「すげえ・・・」

「これが・・・」

「第四世代・・・」

「全距離対応型の力なのですね」

「言葉が出てこないよ」

全員が哑然とし、その表情に束は満足そうな笑顔だ

だが、そんな束を距離において千冬は見ていた

まるで敵を見るかのような視線で・・・

「お、おっ 織斑先生、大変です！」

するとその時ウシ乳を揺らしながら慌てて真耶が駆けてくる

それはIS学園、専用機持ち達の最初の難壁だった

番外編 嫉妬（前書き）

誤字、修正しました

番外編 嫉妬

カチカチ、カタカタ

司は真剣な表情でパソコンと向き合っている

その左手はキーボード

右手はマウスに置き、忙しく動かしている

その真剣な横顔がカッコよく、時々不満そうな表情が可愛く、嬉しそうに笑みを浮かべた笑顔が微笑ましく

そんなことを感じながら箒は自分の恋人を観察していた

こういった観察もたまには悪くないが、ゲームに夢中で自分に構ってくれないのが少々不満なわけで・・・

「司、休憩しないか？」

「いや、全然疲れてないけど？」

「司、そろそろ昼飯だが・・・」

「うーん、今日は休みだからいらねえや」

ことごとく、無視される筈

「・・・なぜ、無視される」

自分よりゲームに夢中になった司にだんだん怒りが募っていき、穏便な手段はやめることにした筈

「司!」

「んっ、おわっ!」

司が振り向いたタイミングでおもいきり抱きつく筈

司はいきなりすることに驚きながらもその華奢な身体を抱き止める

「ちょ・・・いきなりだな

いつにもまして積極的だけど、どうかしたか?」

微笑みながら彼女の甘い香りを感じ、訪ねる

すると突如、後ろで流れていたゲーム音がブツリと切れた

「ちょ、おい!」

司が慌てて振り向こうとするが筈が両手で顔をガッチリホールドし、振り向けず彼女と向き合う

「えっと、なんか知らんけど・・・怒ってる？」

眉を寄せ、不満そうな彼女は明らかに怒っていた

「私を無視するな・・・」

「無視してたつもりは・・・ああ、なるほど」

司は彼女が何に不満か、先ほど行動でやっと理解できた

「ゲームに”嫉妬”してたんだな」

「なっ！？違う！

私をただ無視されたことが不満で・・・」

「はいはい、それが嫉妬だよ
ったく、可愛い奴め」

「んっ・・・んあっ・・・ふぁ・・・」

何か言いそうだった筈の口をキスで塞ぐ司

気持ちいいのか筈の口から甘い声が漏れる

しばらくしてそっと口を離してやると彼女の目はトロンとし、頬は
紅くなっている

「ゲームに嫉妬してくれるなんて愛されてるな」

さてと・・・

嫉妬させちゃった分はしっかり可愛がるよ、箒」

「ふえ？

・・・うん」

優しく箒を抱き上げる

そして司はそのまま寝室まで彼女を運んだ

（明日も日曜で休みだし、存分に弄ってやるか・・・）

次の日、箒がどうなったか言うまでもないだろう・・・

番外編 嫉妬（後書き）

原作S気味な筈はこの小説サイトだとMです

司の決意（前書き）

福音は原作設定でも充分チート

てか福音、あんだけ広域殲滅エネルギー兵器撃つても専用機6機相手にできるって、どんだけシールドエネルギー高いねんって思う

ホント、セツシーの言う通り

軍用でも機能高過ぎだよ

司の決意

「では、状況を説明する

二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走監視区域より離脱したとの連絡があった」

専用機持ちが案内されたのは大きな宴会用の広間

照明が落とされ、前にある大きなモニターが唯一の照明だろう

「そして衛星による追跡の結果、ここから2キロ先の空域を通過することがわかった

よってIS学園の訓練機及び専用機でこの事態を対処することになった」

その一言で各専用機持ちの表情が一変

真剣な表情に変わる

変わってないのは一夏と司

一夏は未だに現状を理解していないのか戸惑い、

司は目を閉じ、腕を組んでいる

司は原作を知っているからこそ悩んでいた

(・・・福音戦

このまま行けば必ず一夏と箒で行って、一夏が落ちて帰ってくる

それを知っている俺はそれを止められる
だけど堕ちないと一夏は、白式は成長しない・・・
それに・・・)

箒を『一夏が守って』帰ってくる

それが司の内心を何よりも占めていた

自分が箒を守りたい

他の男じゃなく自分の手で例え、それで自分の身が危険になろうとも

「偵察は行えないのですか？」

ラウラの一言に千冬が頭を悩ます

それを見た司は覚悟を決めた

「・・・俺のリクルア

そして箒の紅椿なら偵察可能ですよね？篠ノ乃束さん？」

「「「えっ?」?」」」

司の一言にその場にいた全員が目点をし、辺りを見渡す
しかしどこにも束の姿は見当たらぬ

すると気づいた千冬がため息

「はぁ、降りてこい束」

千冬の一言に束が天井から降りてきた

「ちーちゃん、ちーちゃん

この子の言う通りなんだよ！

ここは断・然！紅椿の出番なんだよ！」

「なに？」

眉をひそめる千冬

周りのみんなも首を傾げている

「紅椿の展開装甲を調整して……ホラ、これでスピードはバツチリ！」

さて、みんなわかんないみたいだし説明しましょー」

クルリとこちらを向き、笑顔を向ける束
するといつの間にか、前にあった大画面のモニターは福音データから紅椿のデータに変わっていた

「展開装甲

これが第四世代に搭載された一番の特徴！

攻撃、防御、機動

装甲を変容することで

装備やパッケージなどを換装することなく『全距離対応型万能機』を目指したコンセプトなんだよ！

ちなみにいっくんの雪片も展開装甲だよ」

束の説明に皆が興味津々で聞いている中
司は黙って説明、解説を受けて行く

そして説明が終了し、クルリと振り向いた束は司を見る

「で、次は君だね

スペック的に見ればブースターの調整で紅椿と変わらないスピード
出るから行けるけど、
なんで君が行きたいんだい？

私はいっくんと箒ちゃんのコンビでいいと思うけど」

「大切な人を守りたいだけです

守るなら自分で

例え友達でも他の男に守らせたくないだけです」

「・・・ふうん

なら、箒ちゃんが大怪我したらどうするの？」

「大怪我させる前に俺が大怪我してでも守りますよ
守れなかったら箒の前から消えますよ」

「「!？」」

司の言葉にその場の全員が、特に箒が驚いていた

だが、こんな場でそんな冗談を言うわけがなく、彼の表情がそれを物語っている

そんな司に対して束は平然の会話に答えるかのような笑顔で答えた

「なら、いいよ」

正直、箒ちゃんといっくん、ちーちゃん以外の人間なんてどうでもいいしね

まあ、君だけは興味対象ってレベルだからね」

「ありがとうございます!」

束の冷たい返事

だが司は不満一つない、むしろ元気よく返事をする

彼は既に彼女の性格はわかっているのだ

彼女が常人ではないことを

彼女が大切な物以外、景色を見るのと変わらないことを

だからこそ、自分を見る対象が景色から興味に格上げされたただけでもマシだと感じている

司はクルリと千冬に向き合う

「さて、偵察に出る予定時間は何分後ですか？」

「え・・・ああ

30分後だ

それまでにIS調整・点検を済ませておけ
今日行った試運転をした浜辺に集合だ」

「わかりました

じゃあ、リクルアの調整に行きます」

司の切り替えの速さに少々驚きながらも千冬はしっかりと指示をする

司が部屋を出ていったタイミングで束もやはり笑顔で箒に話かけた

「さうて、箒ちゃんも最終点検しよっか

最初のデビュー戦だもん
しっかり調整しようね」

「あ、はい・・・」

束に連れて行かれる箒

残されるは待機組になる専用機持ち達

哑然と立ちすくす生徒達を動かしたのはやはり千冬で・・・

「お前達は偵察する2人が帰ったらすぐに戦闘になるんだ
お前達もパッケージのインストールやら調整などできることをやって
おけ」

「「「「はい・・・」」」」

千冬の指示でやっと切り替えができたのか
一夏達も部屋を出ていく

残された千冬は・・・

「全く・・・アイツが関わると必ず問題やら事件やら面倒なことが
起きるな

今回も、やはり・・・」

幼なじみの性格を一番よく知っている千冬は深いため息を吐いた

リクルアと約束（前書き）

うゝ・・・風邪が治らない

なんとかアップ

リクルアと約束

「やあ、遅かったね」

「ったく、試運転にも緊急会議にも出てこないから探したわ」

浜辺にある岩に座り、海を眺めている海奈に司は背後から言葉を投げ掛ける

「リクルアのパッケージとかないのか？」

そこら辺は作ったお前じゃないとわかんないからさ」

「んー、ちよつと展開して」

言われた司はリクルアを展開する

海奈はクルリと振り向き、岩から降りるとリクルアに近づくなり手をかざした

するとリクルアの画面が海奈周辺に展開し、彼女は空中投影されたキーボードを叩いていた

「リクルアの構成プログラムを弄れば、ブースターの威力は上がるよまあ、多少は装甲は落ちるけどね」

彼女の説明に答えるかのようにリクルアはその姿を変えていく

分厚く、少ない装甲が更に細くなり一枚鉄のようになり、形状も少し丸みを帯びていた

そして肩の小型ブースターが消え、代わりに両腰側面に板状の中型ブースター二門
背中の大型二門が三門に増えていた

「小回りはちょっと利かなくなっただけどスピードとブースターに割くエネルギー量をできるだけ抑えておいたよ
けど、薄い防御が更に薄くなったから被弾したら大ダメージに直結するから気をつけてね」

海奈の説明に司はリクルアの画面に映るステータスを見ながら笑みを浮かべる

「いや、ここまでしてくれてありがとな

あと聞いていいか？

リクルアは何世代目に当たるんだ？」

「何世代目？」

「・・・無世代って言葉が一番合ってると思うよ」

「無世代？」

海奈のその言葉に司は眉をひそめる

海奈はその疑問に答えるようにリクルアの装備画面を表示する

「リクルアの武装は狙撃銃のみ
まさに人型兵器の確立で第一世代

武装は一つだけとその多彩な弾薬はどの局面・状況に対応してるし、対IS用武装でもある点から第二世代
そしてシールドエネルギーはどの世代よりもある上に瞬時加速の連続使用の可能

その機動と攻撃力は第三世代に並ぶ

最後に第一形態でそれだけの高性能なんだよ
第二形態になったらどうなんだろうね？」

「確かに・・・」

改めて自分のチートISの凄さを実感する司

海奈はパチンと指を鳴らしてモニターを消す

「そろそろ時間でしょ？」

大切なあの子を守って来なよ」

「もうそんな時間か」

携帯を開けばすでに20分も経っていた

「んじゃ、行くわ
調整ありがとな」

「あ、最後にアドバイス」

「なんだよ・・・？」

「『強く願えばきっと答えてくれる』

それじゃあ、いってらっしゃい
頑張ってね」

「ん??」

ああ、行ってきます」

アドバイスの意味をうまく理解できていないような表情をしながら
砂浜を駆けて行く

「さてと・・・欲深い兎ちゃんでも探そうかな」

「すまん、待たせた」

自分以外みんながいることに司は慌てるかのように走ってやって来た

そしてすぐさまISを展開

浜辺に真紅と深緑が並び立つ

「いいか？」

目的は敵の近接戦闘が可能か、射撃威力・範囲の確認など戦闘データの回収が目的だ
くれぐれも無理はするな」

「はい、わかりました！」

「了解です」

司は冷静に、箒はどこか自信に満ちた表情で答える

「それじゃあ・・・」

新城司、リクルア行きます！」

しゃがみジャンプの要領でジャンプしながら滞空する司

「篠ノ乃箒、紅椿出ます！」

箒も司の真似をし、勢いよく空に飛び上がる

「頑張れよ、司、箒」

自分たちの戦闘組のために偵察に向かった二人を一夏達待機組は無事に帰ってくるように見ていた

『新城、篠ノ乃が見て分かるようにだいたいぶ浮かれてる
くれぐれも注意しろ』

『わかってます

最悪、箒だけでも守りますから』

『馬鹿を言うな、無事に帰ってこい
健闘を祈る』

『了解』

プライベートチャンネルから送られた千冬の通信を閉じ、最高速度
で移動してる中、司は自分の恋人に真剣に話しかけた

「箒、今から言うことを黙って聞いてくれ」

「ん？わかった」

いきなりなんだ？

といった表情だが箒は黙り込みコクリと頷いた

「力を持って、こうして一緒に戦えるようになったのは嬉しく思っ
てる」

恋人でもありパートナーでもある彼女と戦えるのは司にとっても望

んだことだ

だが・・・

「だけど理解して欲しい

ISの力は振るうためにもあるが同時に生身の人間を殺すこともできる力だ

IS同士の戦いしかしてないからわからないかも知れないがシールドバリアもない人間がISのエネルギー攻撃食らったらどうなる？

叫び声すらあげれずに身を焼かれ、即死だぜ？

もしくは骨を碎かれ撲殺か・・・どちらにせよ、ISの力は強大だ」

司に言われ、箒の表情は険しくなる

たぶん想像してしまったのだろう

「だから約束して欲しい

もしISの攻撃で生身の人間が危なくなった時

ISの力で守って欲しい

お前には力を振るうだけの人間にはなってほしくないからな

それに箒は俺が前みたいになんと守ってやるさ」

「・・・わかった」

彼女はコクりと頷いた

堕ちる深緑・救う深紅（前書き）

頭痛い・・・内容、大丈夫かな？

堕ちる深緑・救う深紅

「鉢合うぞ！」

「ああ、見えてる！」

目標まで500と言った距離だ

ISのハイパーセンサーでハッキリと福音が見えていた

そして相手は止まっている

まるで迎え討つように銀の一对の羽を広げて制止していた

「余裕ぶっこきやがって！」

箒！切り込め！」

「まかせろ！」

司はその場で停止

弾薬選択 貫通弾

最も速い弾薬を選択し、素早くスコープを覗く

箒は奴の左側から切り込む

狙うは・・・

奴と奴の上、右、下

回避先を絞り出す

そして弾は福音に向かっていく

だが、最も速い弾にも関わらず福音は左側にズレながら最小限の動きで回避する

しかしあくまで弾は囷

「はあああっ！」

居合いの要領で右の雨月を抜き放つ

だが福音はそれを身体を捻り、紙一重でかわした

そしてその捻った身体を戻すついでに回し蹴りにし、箒を自分から引き離す

箒は雨月でガードしながらそのまま後退した

「近接戦闘力は大して強くないが、あの回避力はな・・・」

「ああ、私もまさかガードではなく避けられるとは思わなかった

化け物だな・・・」

データでわかっていたが実際に見るのとはだいぶ違っていた

すると福音は頭から生えている銀の羽を開き、展開する

「来るぞ！」

二人はすぐさま散開した

そして次の瞬間、二人に光の雨が降り注ぐ

縦横無尽に駆け巡り、二人は雨の中を避けていく

（ucci・・・撃つ暇がない・・・）

通常・・・スナイパーライフルは止まって撃つ

アサルトライフルはスナイパーライフルほど反動も高くなく、連射も利き、近・中距離なら命中もしやすいし、動きながらも当たるしかしスナイパーライフル止まらなければならない

例え、動きながら撃っても動いてる最中に銃口はズレ、照準がブレるのだ

だから撃つ瞬間だけでも止まるべきだが、止まった瞬間にこの弾丸の雨を食らうことになるだろう

そんな中、箒は縫うように雨の中を進み、肉薄していた

「墜ちろ！」

雨月を横薙ぎに振るう

しかし福音はそれを後退して避ける

だが、箒の攻撃は3段構えだった

後退した福音に空裂を降り下ろす

だが、その刃もわずかに届かず・・・

しかし

「吹き飛ばえっ！」

降り下ろした空間から紅いエネルギーが生まれ、それが帯状になり、福音に迫る

それでも福音は右側ブラスターを吹かせ避けようとする

そこに・・・

「逃がすかよ！」

瞬時加速で右側に回っていた司がその無防備な脇腹に散弾をブツ放す

そして押し返された福音は箒の攻撃に呑み込まれ、爆発した

「やったか・・・？」

「手応えはあるが・・・」

司と箒は警戒しながらも機体を並べ、煙を見据える

そしてしばらくして煙が晴れ始めた

「っ!？」

避ける、箒!」

司はドンッと箒を押し退けながら左に避ける

そしてさっきまで2人がいた空間にエネルギー弾の雨が降り注ぐ

「っち、腕一本だけかよ!

箒、後退するぞ!」

「ああ、わかった」

福音は左腕の装甲が吹き飛んでいるだけで攻撃に支障はなく、全門展開し、撃ちまくる

2人は降り注ぐエネルギーの雨を避けながら後退する

もはや弾幕のようだ

すると後退しながらも箒が海上にあるものを見つける

「船?・・・なんで」

港は確か閉鎖されている
にも関わらず、船がいるということは・・・

（密漁船！？犯罪者め！）

箒はこの雨が船に当たると思ったが犯罪者を助ける必要はないと判断しようとした

しかしある言葉が脳内に響く

『ISは人を殺すこともできる
生身の人間が食らったら叫び声をあげることもできずに即死だぜ？』

こんな軍用ISの攻撃だ

あの船は一発でも食らったら終わりだろう

「・・・ツク！」

覚悟を決め、箒は密漁船の前に向かった

後退しながらも司は避けるのが精一杯だった

装甲が薄いため一発でも食らったら即アウト

それに司のISはスピードが上がった分あまり小回りは利かなくな
ったのだ

今まで避けてこれたのは攻撃範囲がそんなに広くなく、小回りの利
く瞬時加速ができたから

福音のような広域殲滅型はリクルアには天敵だった

避ける&位置取りの連続瞬時加速も避ける方向を間違えれば流れ弾
を食らうことになる

そんな中、いきなり箒が下降したのに気づいた

「なんで・・・降下？」

って、アレか！？

ちくしょう、なんで忘れてたんだ俺！

しかもこのタイミングでかよ！」

原作なら先ほどの一撃を入れるタイミングで

しかし、現実が変わっていた

そして司はすぐさまバツと振り返り、福音を見る

するとやはり目標を箒にズラしていた

（いくら第四世代と言っても！）

エネルギー弾の集中砲火を食らえばひとたまりもないだろう

刀をクロスさせ、防御体勢を取っているが盾をもっているわけではない

大ダメージは確實だ

下手をしたら怪我をする

「箒っ!!」

司は全力で箒に向かった
彼女を守るべく

（頼む、リクルア
間に合ってくれ！）

全エネルギーを注ぎ込み、司は箒の前に機体をねじ込む

そして巨大な爆発音と同時に司は背中にとてつもない圧力を受け止めた

そして押し寄せる壮絶な痛みと熱

「クッ・・・ッッ！」

見えないためわからないが左側が不安定なことから左側ブースターは吹き飛んでるだろう

右側もたぶん半壊だ

肩と足のブースターでなんとか飛んでいる感じだ

「司！」

「相手に背中を向けるな！」

司の声に箒は留まる

司の言葉の意味を理解した箒は攻撃が迫っているサイレンが鳴っているのに気付き、慌てて福音の攻撃を避ける

福音が箒を狙っている間に、司は痛み堪えながらも装填した弾を福音のほうに照準も合わせず撃つ

『バシユ！』福音は余裕を持って避け、さらに止めを刺そうとした瞬間、弾は分裂

その福音の周囲一帯を覆い尽くす

そして福音のセンサーはなぜかエラーが出て、熱探知機能も使えなくなった

「箒・・・煙幕のうちに・・・うつ！」

「司!？」

ヨロヨロと真下にあった密漁船に着陸していき、箒も着陸するため降下する

司は船に降りるなり、ISを強制解除し、バタリと倒れる

いきなりのことに密漁者達は困惑し、ケガを負っている司を見ているだけだった

そんな密漁者達に怒りを感じた箒だが司の先ほどの言葉を思い出した

「貴様達！」

今すぐこのまま北の砂浜に迎え！

全力でだ！

従わなければこのまま船を叩き割るぞ！」

空裂の切っ先を密漁者達に向けると慌てて船を発進させる

発進させたのを見たあと箒はそっと司を抱き上げる

「箒・・・」

「司！」

今、みんなのところに戻ってるからな！
それまで我慢してくれ！」

「ハハッ・・・大丈夫・・・だ

密漁者、しっかり・・・見張っとけ・・・よ」

「大丈夫だ、逃げようとしたら船を叩き割るまでだ」

こちらを見ている視線に気づいた箒は本気で怒気を含んだ眼差しで睨み返す

すぐさま密漁者達は視線を外した

「箒・・・」

「なんだ、司!？」

司の掠れた声に箒は凄く嫌な予感を感じた

「悪い・・・ちょい、寝るわ」

「つ・・・かさ？」

ゆっくりと目を閉じていく司に箒は時間が止まったかのように思考が止まった

ぐったりと目を閉じている司・・・

息もせず、ただ眠っている

まるで死んだかのように・・・

「つかさ?」

肩を揺さぶるが起きない

「つかさ、起きて・・・」

何をしても反応しない司

そんな司に箒は彼がどうなったか理解し、一気に悲しみと絶望を彼女に押し寄せた

「つかさあああ!」

司を抱きしめ、叫び声をあげる

悲痛な少女の叫び声

だが、その叫び声に小さな光が灯る

『トクン・・・』

「えっ・・・?」

目を点にし、流していた涙が止まる

そして耳を司の胸に当てた

『トクン・・・トクン・・・トクン』

微かな・・・

本当に小さな心音が聞こえたのだ

この今にも消えそうな希望が彼女を奮い立たせた

「死なせない・・・」

彼女はスクリと立つ

自分は人工呼吸の正しいやり方を知らない
ならばどうするか

「絶対に間に合わせる！」

ならば一刻も早く彼を助けてくる人達に運ぶまでだ

彼女がそう叫ぶと紅椿はその決意に答えるかねように輝き始めた

そして背中 of 装甲が開き、二門の巨大なブースターが展開する

彼女は船のエンジン部に回ると一気にブースターを吹かせた

「絶対に司を死なせない！」

彼女は船を押しながらそう叫ぶ

その速さは船の最高速度をはるかに凌駕し、軽く船を浮かせていた

紅椿は急いで陸に向かって行った

仲間のために（前書き）

・・・ドンドン原作崩壊していくこの小説

仲間のために

「急いで救護班を呼べ！

密漁船！？」

そんなもん海軍に任せておけ！」

「頑張ってくれ、司！！」

千冬の指示により、慌てて動き回る作戦本部

そんな中、担架に運ばれる司に箒の叫び声が響く

「どうしたんですの！？」

セシリアと鈴など待機組が何事かと集まって来た

そしてたまたま作戦本部にいたラウラがいち早く状況を理解し、みんなに説明した

「偵察を兼ねた戦闘を終了し、後退しようとした最中に密漁船が戦闘区域に侵入した

そこで箒がその密漁船の護衛に回った

だが防御シールドのない紅椿に福音の計36門の一斉射撃に耐えきれないだろう

福音の攻撃が当たりそうになったところで箒を司が庇って被弾

実際に実戦映像を見たほうが早いだろう
ついて来てくれ」

ラウラに言われ、待機組は旅館の一室の作戦本部に向かう

その一室のモニターの横でノートパソコンを操作する教員達

「山田先生

戦闘データを一夏達に見せたいのですが」

「あ、わかりましたよ」

真耶はノートパソコンを操作し、パソコンに繋がっている待機モドの紅椿からデータを取り、スクリーンに映す

『堕ちろ！』

紅椿の3段構えの攻撃と司のフォローシーンが映る

「やはりこの2人のコンビネーションは凄いですわね」

「普段から一緒にやってるものね」

「だけど、これで倒せてないんだよね・・・」

「ああ、奴の回避力は異常に高い」

煙が晴れ始める

『避ける！』

煙からのエネルギー弾を司の機転で箒は避ける

「あの完璧なコンビネーションでも腕一本かよ！」

一夏は舌打ちをしながらも画面を見る

そこには腕の装甲がない

しかし武装の部分は無傷だ

『後退するぞ！』

「ここでの引き際良い判断だった
だが、ここで問題が起きたのだ」

ラウラの説明

そして次に現れた映像に一夏達は目を見開く

「船！？海上は閉鎖されたはずだろ！」

「なんでこんな沖合いにいるんですの！？」

「船・・・密漁船だね」

「それでもたかが船がISのしかもエネルギー弾に耐えられるわけがないわ」

一夏とセシリアは驚いているだけだが頭の回転が早いシャルと鈴はすぐにこの後の展開が読めた

「ああ、その通りだ」

ラウラの言葉を合図に箒の視点の映像からわかるように刀をクロスに構えるシーンが映る

そして多くのエネルギー弾が前から迫ってくるのがわかる

そしてエネルギー弾が今にも当たりそうになった瞬間
人型の何かが前を遮った

そして爆発

画面が爆風に覆われるがすぐさま煙が晴れる

『司!』

『敵に背を向けるな!』

すぐさま司に近づき、司のほうを向こうとした箒に彼は一喝する

「ボロボロじゃねえか」

「強制解除してもおかしくないですわ!」

「司・・・」

「けど、アイツが今言ったのは正しいわ」

「ああ、せっかく守った存在を再び危険に晒すようなものだからな」

場面は代わり、煙幕を張って逃げるシーンに入った

そこで映像は切れる

「化け物ですわね」

「うん・・・あの回避力と殲滅力がね」

セシリアとシャルの表情には余裕がない

鈴やラウラも脳内で戦闘シュミレーションをするも勝率が中々上がらない

そんな中、一夏だけが倒せるか？勝てる確率は？と言った不安な表情をせず、熱い闘志を持っていた

「絶対許さねえ・・・民間人を打ったのも

司をあんなにまでしたのも・・・

絶対に倒す！

みんなで奴を止めるぞ！」

「一夏・・・」

シャルがポツリと彼を呼ぶ

こんな状況下でも関係無く彼の馬鹿みたいな素直っぱさや仲間想いの優しさが彼女達の不安を打ち消した

「もう一夏・・・」

そんな事言ったら頑張らなくなるよ・・・
けど、そういう優しいところが好きだよ、一夏」

「シ・・・シャル!？」

いきなりストレートな発言に一夏は困惑した

そしてシャルに続きラウラ達も軽く呆れながらも笑みを浮かべた

「全く・・・私の戦友は無茶を言う

だが、私は戦友だからこそお前と共に戦ってやるさ」

「一夏さんの無茶は今に始まったことでありませんわ
それに司さんを落としたのはわたくしも許せません!」

「一夏!

私が一緒に戦ってあげるんだから感謝しなさい!

帰ったら・・・一緒に買い物に付き合いなさいよ!」

「ちょ、ちょっと!？」

僕の旦那さんを誘惑しないでよ!」

「少しくらい貸しなさいよ!」

いきなり始まる言い合いに他3人は笑い出す

先程の暗い雰囲気から一変し、いつもの学校での楽しい雰囲気に変わる

「とりあえず、千冬姉に出発することを言いに行こうぜ」

5人は良い表情で作戦本部を出た

相棒の応援（前書き）

リクルアは男性にしてみました

相棒の応援

「司・・・」

箒は布団で眠る司の手を両手で覆いながら彼を見る

頭や背中に包帯を巻かれ、点滴を打たれている

一番酷かった左上半身は骨が複雑骨折して内出血が酷い状態で、手術が必要だと言われていた

左肩から左肩甲骨、あばら骨にヒビ及び粉碎しており、骨の破片が内臓を傷つけているようだ

「お願いだから死なないで・・・」

目を閉じ、祈るようにそつと意識を無くした

「ハハ」は・・・」

目が覚めた司は言うならば神社の前に居た

その神社は古く、周囲一帯と空までもを樹や枝、ツルで覆われており、枝の葉の隙間から漏れる太陽の光は綺麗だった

「よく来たな・・・」

いきなり声を掛けられた司は後ろを振り向く

そこには男性で軽装の軍人がいた
防弾チョッキは来ておらず、服だけ

だが足回りには多くのポーチを着けている

髪は腰までありそうな深緑の長い髪でポニーテールにしており、目はサングラスをかけている

「ここはどこなんだ？」

「ここは・・・お前の精神世界だ」

「精神世界・・・」

通りで感覚がないわけだ・・・

けどなんで俺がこんなところに？

「お前は・・・護りたい人はいるか？」

いきなり男はそんな質問をしてくる

「ああ、いる

例え世界が敵になろうとも彼女は護りたい」

「命を掛けてもか？」

「ああ」

「そうか・・・」

ならお前は護れないな」

「なっ!？」

その言葉に俺は驚き、次に怒りが湧いてくる

「俺が護れないだって？

その根拠はなんだよ！」

怒りをぶつけるように叫ぶ

自分の決意を真っ向から否定されたからだ

だが、男は表情を変えず、ごく自然のような口調で俺の怒りを両断した

「お前が死ぬ、怪我をする

そしたら彼女の『心』は護れない

そしてお前が死んだら誰が彼女を護る？」

「こ・・・ころ？」

冷水をぶっかけられたかのように怒りが冷えていく

そして、ふといきなり脳内に映像が映る

眠っている俺と泣いている筈

そして気づく

「そうか・・・身体は護っても心は護ってないんだな」

コクリと頷く男

そして再び話出す

「彼女を護るなら死ぬな

全てを避ける

そして・・・敵がどこに居ようとも

どんな状況下だとしても狙い撃て

そのために俺の力を貸してやる」

「ああ、ありがとうリクルア」

相棒に、俺の愛機はそう言って右手を差し出す

「さあ、彼女を迎えに行ってこい」

「ああ、行ってくる！」

俺はリクルアと握手を交わし、視界は真っ白になった

圧倒的な力を前に・・・（前書き）

鈴とセシリア・・・呆気なくしてごめんね（^| ^;）

圧倒的な力を前に・・・

「はぁ！」

鈴は双天牙月を振り降ろす
だが簡単に避けられる

しかし、鈴はそれだけで終わらせない

見向きもせず機能増幅パッケージ『崩山』によって増設された四門
の龍砲を撃つ

炎を纏った拡散型衝撃砲は直撃こそしなかったものの福音はガード
し、身動きが取れなくなる

そこに亜音速の弾丸が福音の背後を撃つ

2キロほど離れたところから機能増幅パッケージ
『パンツァー・カノニア』を装備したラウラが両肩の二門のブリ
ッツが火を吹いていた

遠距離からの砲撃を煩く感じた福音がシルバーベルを展開

ラウラにエネルギー弾が迫る

「させないよ！」

しかし前側はラウラのパッケージによって増設されたシールドによ

って

左右はラウラの頭上にいる防御パッケージを装備したシャルの四枚のシールドにより塞がれる

そしてシルバーベルを展開した福音の隙を強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したセシリアがその無防備な背中を狙う

しかし紙一重で避ける福音

だがそれも布石

「一夏さん！」

「うおおっ！！」

零落白夜を展開した一夏がすでに背後の右側に回り込んでいた

「これで終わりだああ！」

思いつき振り下ろした一夏の零落白夜は福音の両翼を切り落とした
そして福音は海上に落ちる

「よっしゃあ！」

一夏の雄叫びに賛同し、シャル達も歓喜の声をあげる

「やりましたわね、一夏さん！」

「みんなのフォローがあったおかげさ」

ラウラがいた小島の上にみんなが集まり、喜び合う

しかし・・・

『バツシャーン!』

突如、海上が水飛沫をあげる爆発が起きる

「おい・・・まさか、あれは・・・」

ラウラは震えた声で水飛沫を見る

そして水飛沫が消え、その正体が明らかになったのと同時にラウラの声が重なる

「『第二形態』だと!?!」

そう・・・

そこには切り落としたはずの翼がエネルギー体の羽根になっている
福音だった

「散開！」

ラウラの指示にみんなが散り散りになる

しかし次の瞬間、福音は姿を消した

「えっ・・・？」

突如、鳴り響く警告音

いきなり目の前に現れた福音は鈴の首を掴む

「グッ・・・はな・・・」

せ・・・までは言えなかった

零距离の一斉射撃に一気に機体のシールドエネルギーは消え去り、海面に落ちる

「鈴さん！クッ・・・」

こちらに向かって来る福音

狙ってるものの全てを避けられる

そして懐に入られる瞬間

「まだですわ！」

瞬時加速で左に避けると最大火力で引き金を引く

この反撃のやり方は司の戦い方と同じだった

だが・・・福音は見向きもせず、エネルギー体の翼でレーザーを防ぎ、鈴と同じように墜ちるセシリア

次にラウラとシャルに向かう福音

しかし2人の前に一夏が立ちはだかる

「これ以上やらせるかよ！」

上段からの振り下ろし

それを右に避けられるが左からの横一線

更に避けられることを考えていた一夏は間髪入れずに回し蹴りを叩き込む

見事脇腹を捉えた福音は吹き飛ぶ

・・・かのように見せられたのだ

福音は吹き飛ぶ衝撃を使い、旋回しながら動けないラウラに迫る

「ラウラ！」

ブリッツを連射してるラウラにシャルも加わり撃ちまくる

しかし全てを避ける
もしくはエネルギー弾で相殺し、迫る福音

そしてすぐ目の前まで来た福音は全門36門を全て展開した

「クッ・・・!!」

「ここで・・・」

目の前でシルバーベルの門が臨界し、ダメ元でシールドを展開する
がこの距離なら全方位360。から撃たれるだろう・・・

しかも零距离射撃

無事で済むはずがない

2人が諦めかける

しかし・・・

「やらせるかああ!!」

「「一夏!?!」」

連続瞬時加速で追いついた一夏は福音の前に立ち、雪片式型を振り
降ろす

福音は射撃体制で回避不可と考え、照準を後ろの二機ではなく一夏
に変更した

そして広域殲滅型のシルバーベルと一点粉碎型の零落白夜

同じようなエネルギー型殲滅武器だが真逆のスタイルの武器がぶつかり合う

至近距離の拮抗

次々と発射されるシルバーベルのエネルギー弾を零落白夜は次々と消し去って行く

しばらく続くとはいきや、勝負は呆気なくついた

明らかに燃費の悪い零落白夜の負けだ

攻撃を相殺しても相手のシールドエネルギーを攻撃しているわけではない

むしろ相殺に使うエネルギーは自分のエネルギーだ

すぐさま雪片式型の刀身は消え去った

反対に福音のシルバーベルはすでに発射しようとしている

それでも一夏は彼女を守ろうと身体を盾にしようとした

別々の道を行く対の2人（前書き）

ちよつとグダグダ感が・・・

別々の道に行く対の2人

・・・・・・・・

あれ？ここは？

気づけばそこは海

そしてその浜辺では少女が歌を歌い、踊っていた

その少女が突然、歌と踊りをやめる

「どうかしたのか？」

「呼んでる、行かなきゃ」

そう聞いてやると、少女は突然、パッと消え去った

左右を見渡しても誰もいない

仕方なく後ろを向き、浜辺を出ようとしたところで声を掛けられた

「力を欲しますか？」

振り返り、見てみれば膝まで海水に入っている騎手の格好の女性が立っていた

チリーン

ふと気づけば、そこは道場だろう・・・

ヒンヤリとした木の床

静まりかえった空気

目の前には巫女姿のような服装の女性が左右に刀を置いた状態で座っていた

そして自分も同じように刀こそないがその綺麗な正座姿をしている

「お前は・・・力を欲するか？」

そう静かなこの空間に彼女の声が響く

「難しいことを言うな・・・そうだな友達を、いや仲間を守る力が欲しい

せめて自分の大切な人だけでも・・・」

一夏は自分の掌をグッと握りながら答える

「・・・力か

私はみんなと肩を並べられる力が欲しい

せめて大切な人を支え、共に背中を預けられる対等な力を・・・」

箒を両手を合わせ、自分の胸に押し当てながらも答える

そして二人の空間は景色を変えた

何もない真っ白な空間に・・・

そして一夏と箒、騎手と武士が並ぶ

「一夏？」

「箒か・・・」

互いに顔を合わせたが何故か然程、驚かず冷静にだった
そして騎手が口を開く

「本来・・・貴方達は二人で一つだったはずでした」

「我が創造主はどのように私たちを創った」

騎手と武士が交互に話していく

「エネルギーを消す力と」

「エネルギーを生み出す力」

「互いが対を成す存在であり」

「互いが抑止力に成す存在だ」

「しかし貴方達は」

「対にならなかった」

「貴方は金色の風を・・・」

「お前は深緑の狙撃手を」

「本来なら貴方達は二人じゃないと自分たちの力を出せない」

「それでも我が道を行くか？」

2人に剣を、刀を向ける

その穂先には揺るがない瞳がある

「それが例え間違った選択だとしても、俺はシャルを選ぶ
シャルを自分の手で護りたい
だから護る力が欲しい」

「一夏との対を成す力だが、私自身が選んだパートナーは司だ
だから私はこの選択に後悔はしない
司の背中を私が支えたい
だから支える力が欲しい」

じつとその決意を決めた表情を見つめる

そして・・・

「仕方ないですね、私たちの相棒は」

「ホント、頑固者だな
全く誰に似たんだか」

クイツと自分の剣を鞘にしまい、騎手は一夏に
武士は箒にそれを渡す

「ならば厳しくてもその荊の道を進みなさい」

「互いの大切な人を信じ、我が道を行くがいい」

「頑張ってね」

ふと明るい声が混じり、振り向けば一夏が最初に見た少女がいた
そこには扉がある

「ありがとう、白式」

「助かった、紅椿」

新たな力を持って2人は扉を開き、進んで行った

「行っちゃったね」

「いいの、伝えなくて？」

「深緑の狙撃手の存在を・・・」

騎手と少女は武士に訪ねる

武士は扉のほう向きながら答えた

「我が創造主を止める時が来た時に伝えるさ

我と同じ存在であり、我と違う彼の力を・・・」

深緑の髪を思い浮かべながら・
・
・

別々の道を行く対の2人（後書き）

原作者のイズルさんは行方不明って噂だし、新刊でないし、もうオリジナルに進んでいいよね・・・

紅椿、白式、能力変えちゃいます
いや、新たに付けちゃいます

もう護られるだけじゃない(前書き)

連続更新！

てか、まだ更新するかも・・・

もう護られるだけじゃない

「んっ・・・」

「司!」

目をゆっくりと開ければ心配そうに、だけど嬉しさが垣間見える箒の表情

ゆっくりと上半身を起こすとギュッと彼女が抱きついて来た

抱きつく箒に俺はそっと頭を撫でながら抱き返す

「悪い・・・心配かけたな」

「馬鹿、馬鹿、馬鹿っあ!

この大馬鹿者っ!」

「はは・・・悪かったって」

涙声の箒・・・

司は箒を自分の胸に押し寄せる

「怪我はないか?」

「うん・・・」

「良かった・・・

そうだ、今日はさ・・・」

「?..?」

箒をゆっくりと離すとスクリと立ち上がる司

箒は慌てて司を支えようとするが彼は何の問題もなく、グルグル巻きの包帯を取って行く

そこには痛々しい火傷の後はなく、綺麗な肌があるだけ

「司、怪我は!..?」

「ん?..なんか治った

てか、ついてきてくれ

渡したいもんがあるんだ」

なぜ、重症だったはずの怪我が治ってるのかと、戸惑いながらも箒は司に着いて行く

「お、あった

持って行くの忘れてたんだよな」

司が取り出したのは長方形のブランドのような箱

その箱を箒に見せながら蓋を開けた

そこには・・・

「こんな・・・司」

「学校から出る金をケチって、母さんの仕事を少し手伝って稼いだからさ」

箱に入っていたのはシルバーのネックレス
それには椿の花を形を模した飾りがついている

「ハッピーバースデー
おめでとう、箒」

「っ!？」

「ありがとう・・・司」

ネックレスをギュッと胸に抱きしめながら瞳に雫を溜める
しかし、その表情は悲しみではなく嬉しさ
笑みを浮かべている

「泣くなよ」

「嬉し涙だ、バカ・・・」

「ありがとよ
ほら、せっかくだし着けてみろよ」

「うん・・・」

ネックレスを首に通す

シンプルなシルバーにワンポイントの椿の花が箒を可愛らしく見せる

「うん、似合ってるよ」

そう言われ、笑顔になる箒を司は内心でホッとすると一息吐く

「さてと・・・そろそろ行こうか、リベンジにさ」

「リクルアは治ったのか？」

「ああ、新しい力付きでな」

自信に満ちたその言葉に箒を表情を曇らす

「もう・・・無茶はしないでくれ

私は「大丈夫」

そこで箒は司に抱きしめられ言葉が途切れる

「もう無茶はしない

そのための新しい力だ」

首に掛かってるリクルアを握る

もう彼女を悲しませないようにと・・・

「私も・・・」

ポツリと箒が呟く

「私も、もう護られるだけじゃない

司の背中を護る

司と共に戦える

互いに背中を預けられる

それだけの力を私は得た！

だから・・・戦うなら私も一緒だ

パートナーだろう？」

もう彼に痛い思いを、辛い思いをさせたくない

そう決意を抱きながら・・・

「・・・わかった

お前は俺が護る

だからお前も俺の後ろを守ってくれ」

「ああ、まかせろ」

これが2人のパートナーとして一歩前進した時だった

この一歩が後に世界で異名を轟かすコンビになるとは、この時の2人は全く予想しなかった

墮ちる福音（前書き）

対エネルギー攻撃には無敵な一夏君

勝手に第二形態に能力つけちゃいました

堕ちる福音

「一夏 あああ！」

大切な彼女の悲痛な叫び声と共に福音のシルバーベルの零距离フルバーストが一夏を包む

キィーン！！

発射と同時に響く金属音

そして現れたのは真っ白な球体

そしてその球体から出てくる白い装甲

「まさか・・・第二形態！？」

「一夏・・・」

ラウラの驚きの声にシャルはポツリと彼の名を呼ぶ

「俺の仲間は誰一人やらせねえ！」

右腕を振るい、零距离にいた福音の左腕を切り落とす

零落白夜だ

福音は慌てて距離を取り、シルバーベルを発動する

「雪羅！」

一夏は左手の大型クローを突き出す

そして手のひらからは零落白夜と同じ色のシールドを展開していた

「まさか零落白夜のシールドか!?!」

シールドに当たっては次々と消えていく福音のエネルギー弾

ラウラの画面に目を走らせる

ISに一夏の白式のデータが流れて来たのだ

「おい・・・これじゃあ一夏に対してエネルギー兵器は食べ物同然じゃないか!?!」

「エネルギー吸収能力!?!」

ラウラとシャルは驚愕の表情だ

画面に載っているのは白式の武装の詳細データ

雪片式型―零落白夜追加機能

切断した物体にエネルギーに換算できるものであればそのエネルギーを吸収、自機のシールドエネルギーにとして回収

雪羅ーシールドモード

シールドした攻撃がエネルギー弾ならばそのエネルギーを吸収、自機のシールドエネルギーとして回収

雪羅ーカノンモード

荷電粒子砲として射撃モードになる

雪羅ークローモード

零落白夜を爪に展開したクローになる

「じゃあ福音の攻撃は一夏には・・・」

「ああ、一切効かない！

むしろ回復させるだけだ！」

勝利を確実に感じた2人だった

「うおおお！」

迫り来る福音攻撃の雨を雪羅でどんどん回収していき、福音に迫る

『状況を危険度Aに変更

この場の離脱を最優先事項とする』

機械的な音声がハイパーセンサーを通して聞こえて来る

一夏は零落白夜を降り下ろす

しかし福音はそれを避け、零距离射撃

だが一夏は雪羅で防ぎ、そのままカノンモードで荷電粒子砲を撃つ
間一髪で福音は避ける

しかしそれは布石

一夏は右手の零落白夜を横薙ぎに振るう

バランスを崩していた福音は両足を切り落とされた

両足を失った代わりにおもいつきり銀の羽根を羽ばたかせる

「うわぁ!!」

いきなりの突風に一夏はバランスを崩した

そして福音は一気に500メートルの距離を飛んだのだ

「逃がすかよ!」

一夏は瞬時加速で距離を詰めようとする

が最高速度に達した福音は追い付かない・・・

すると急にプライベートチャンネルが開いた

『一夏・・・10秒後にソイツを撃つ
今すぐに海面付近まで退避しろ』

「司!？」

『箒、カウントダウン』

『ああ、わかった』

いつの間にか箒ともチャンネルが繋がっており、カウントダウンが始まる

「あああ、なんなんだ!」

いきなりの司の言葉に一夏はわけがわからずそのままラウラとシャルがいる小島に降りる

そこには鈴とセシリアも合流していた

「一夏、その姿は」

「ああ、セカンドシフトだ」

「一夏さんの第二形態ですか・・・」

鈴とセシリアがまじまじと見る中、ラウラが一夏に訪ねる

「いきなり降りてきてどうした？」

「ああ、司が退避しろってさ」

「司!？」

シャルが彼の名前を呼んだ瞬間、一夏たちの頭上を緑色の何が通りすぎた

それはまっすぐと福音に迫り、翼で防御する福音ごと呑みこんで行った

その光条が晴れた後、プスプスと煙を挙げながら堕ちて行く福音がみんなの眼に写ったのだった

墮ちる福音（後書き）

次回はちょっと時間が戻り、福音を墮としたお二人さんが登場

新たな力の片鱗（前書き）

今回は司だけ

箒は今度に

司のIS、リクルアは無段階移行機能です

今回、大幅に外見が変わったのは大破した機体を修復ついでに装甲変更及び武器の追加をしたからです

武器の追加は・・・ビット兵器ですね

新たな力の片鱗

「来い、リクルア！」

「行くぞ、紅椿！」

旅館から少し離れた浜辺で司と箒はISを展開した

リクルアの外見は一気に変わっていた

手、肩、足、胴、腰に装甲、
足裏、両腰、肩に小型ブースター

背中には大型のブースターがあるが、その噴射口には緑色の四角いビットがついていた

そのビットで大型ブースターが更に大きく見える

そしてL96Aのリクレシアは一回り細くなり、シールドがなくなっていた

そして頭部にはスコープのようなレンズが司の右目を覆っている

「箒、ここから狙撃する

シールドエネルギーの大半を使うからな・・・

支えてくれないか？」

「ここからか？」

「ああ、30キロ離れた沖合いで一夏が戦闘してる」

「・・・何も見えないんだが？」

ハイパーセンサーを使ってもその先は何も見えないのだ

「大丈夫、ちゃんと仕留めるさ

それに反動大きいから箒に支えて貰わないとな」

「わかった・・・」

司がリクレシアを構え、箒は司の後ろに回る

「リクレシア、遠距離狙撃モード」

ガチンとブースターのビットが外れ、次々とリクレシアに纏っていく

銃口を中心にビットを纏い、長大な砲身を形成する

その長さは10メートル近くにも及ぶ

砲身の直径は1メートルもあるのだ

「座標、演算システム・・・セミオートでサポート・・・ビットエネルギー収束・・・エネルギー供給・・・シールドエネルギーに接続

弾薬選択ドレインビーム」

リクルアの数多くの画面を開きながら次々と設定していく

司は振り向かず後ろにいる箒に話しかける

「・・・箒、たぶん反動が半端ないから頼むぞ

シールドエネルギーの半分を使うからな」

「シールドエネルギーを使うのか？」

「ああ、福音を操縦者ごと殺すわけにはいかないしな
一夏の零落白夜と同じ感じさ

シールドエネルギーを攻撃するエネルギー弾だ

けど、操縦者の方も多少怪我をするかもな・・・

さてと、準備完了したし始めるぞ

まずは一夏に退いてもらう」

「わかった」

司は機体の画面を操作し、プライベートチャンネルから一夏を呼び出す

箒も司と同じようにチャンネルを選択

「一夏、10秒後にソイツを撃つ

今すぐ海面付近まで退避しろ

箒、カウントダウンを頼む」

「ああ、わかった」

そんなやり取りをしてると一夏が何やら声を上げた

スコープを見ればすでに射線上に一夏はいない

箒の声とともに臨界するリクレシア

そしてカウントが0を告げる

「墜ちろ、福音！」

司の掛け声とともにリクレシアから緑色のエネルギーが発射される

それは砂浜をめぐり上げ、海を割り、まっすぐ福音に向かう

箒は凄まじい反動をブースターを全開にし、必死に抑える

高エネルギーの接近に気づいた福音は咄嗟に銀の翼で身体を覆う

しかしその強大なエネルギー弾は翼をもろともせず、福音を呑み込んで行った

「撃墜完了・・・」

司はホッと息をついた

新たな力の片鱗（後書き）

狙撃にビット

セシリアと似てるけど違うからね！

ぶつかる疑問と疑惑と思惑（前書き）

今後、この小説にオリジナルファンタジー的要素が入りますがご了承ください

海奈は何気に黒い（笑）

ぶつかる疑問と疑惑と疑惑

シルバリオ・ゴスペル―福音

この暴走を阻止という任務はIS学園の専用機持ちの生徒だけで任務遂行された

この任務によってセシリア・オルコットのブルー・ティアーズ、凰・鈴音の甲龍が大破したものの織斑一夏の白式、神城司のリクルアの第二形態により福音は撃墜完了した

報告内容以上――

IS学園教員 織斑千冬

千冬はそうパソコンに入力するとクルリと後ろを向く

そこには正座に我慢できず、足を擦っている司と正座にはなれていないものの千冬のお説教にビクビクしている箒が・・・

「さてと・・・撃墜したのはいいが無断出撃の命令違反を無視できるわけじゃない

わかっているな？」

「はい・・・」

有無言わさずその冷たい眼差しはただ従えと言っているかのように見えた

「学園に帰ったら反省文の提出及び特別トレーニングだ
覚悟しておけ、以上だ

今日はさっさと休むんだ」

再び背中を向ける千冬に二人はさっさと部屋を出る
誰も鬼教官の部屋に居座りたくないのだ

「あー、新城

お前はもう少し残れ」

ピシりと固まる司

そんな司に箒は苦笑する

「頑張れ・・・」

「うう・・・ちきしょう」

司は再び鬼部屋へ

ピシリとしまる扉の音に思わず小さくため息をついた

「楽にしていぞ
さすがに正座はキツイだろう」

「え・・・？」

で、では失礼します」

正座から胡座に変える司

正直、意気込んだのが拍子抜けだ

「今から話すのは私個人の相談であり、他言無用だいいな？」

「わかりました」

「じゃあ、すまないがまずこれをしてくれ」

渡されたメモを受けとる司

そこには・・・

『部分展開でこの部屋に盗聴機が設置されてるか調べあったら場所をメモで言え』

司は頭部ハイパーセンサーを部分展開

機械が発する電磁波を探知するよう意識する

（蛍光灯裏、カーテン裏
テーブル裏に壁ん中！？）

設置場所に驚きながらも司はメモに書いていく
そしてそれを受けとる千冬は壁以外の盗聴機を見つけるなり・・・
握り潰した

そう、握り潰したのだ・・・

(・・・マツチヨに見えないのにどこからそんな力が・・・)

水着姿でも男のように腹筋が割れたり、肩回りが固かったりとマツチヨに見えず、むしろグラビアアイドルのような綺麗な肉体だったにも関わらず、この腕力

摩訶不思議だ・・・

司は内心で首を傾げた

『腕部部分展開で壁からそれを抜け
壁を壊してもいいができるだけ最低限に抑えろ』

司は指示通り向かって左側の壁にある額縁の絵の裏を覗く

そこには×マークの、壁を塞がれた痕跡があった

司はそこに右腕を部分展開した爪を食い込ませる

ISの手の部分で指先はクローのように鋭くなっているのだ

対IS用には向かないが壁などには簡単に突き刺さる

そして数センチ食い込ませ、くり貫いた指先には盗聴機がある
受け取った千冬はそれを潰す

「これで邪魔はなくなったな・・・」

千冬の眼差しは盗聴機から司に移る

その瞳の真剣さに思わずゴクリと息を吞む

「さてと・・・」

一拍置く千冬

そして目が敵を見るような視線に変わる

だが表情は悲しそうな・・・

「お前は・・・何者だ？」

「え・・・？」

司はその言葉に頭が真っ白になった

「やあ、君があの子の母親だね」

夜の月明かり・・・

その光によって2人の女性の影ができていた

「そうよ・・・

さて、小娘の君は何が知りたいんだい？」

「小娘呼ばわりは、束さん傷つくな」

「私からすれば小娘よ

で、知りたいことがあるんでしょ？」

欲張りな天才ちゃん」

「そうだね」

「じゃあ、なんで私以外作れないはずのコアを作れてるのかな？」

「まあ、人には言えないかな

安心していいよ

作り方なんて私と君以外知らないから」

「そっか」

「じゃあ、なんであの子のイレギュラーという存在が私とちーちゃん以外わからないのかな？」

「まあ、ちーちゃんもわからなくなりかけてたけど」

「私の気まぐれだよ

今から君の記憶を弄るのだって簡単だし」

そこで話が途切れる

海奈は変わらない表情で

束は顔こそ笑っているがその瞳には警戒の色が・・・

「君、人間？」

「さあね？」

ああ、言い忘れてたわ」

そこで初めて海奈の表情が変わる

「あの子は・・・きっと貴女を変えるわよ」

「ふーん・・・

まあ、楽しみにしておくよ」

海奈は楽しそうに束は無表情に

そして別れる2人

それぞれの想いを秘めながら・・・

迫られる司、未来を知る筈（前書き）

海奈が記憶を弄ってないのは束
そして少しだけ弄ったのは・・・

迫られる司、未来を知る筈

「お前は・・・何者だ？」

思考は真っ白・・・

そして次に襲うのは焦りと不安

（ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ！）

司はパニックに陥っていた

どうしたらいいかわからず焦りが心臓を高鳴りにする

千冬はそんな司の焦りを読み取り、さらに追撃する

「確かにお前の出身した中学や小学校に卒業写真はあるが国が管理する個人の出世記録には一切、お前の情報がない

お前の母もだ

倉持技研にお前のISについて聞いたが記憶にはあるがデータが一切見つからない

痕跡すらない状態だ

そして・・・なぜ東が467個で製造をやめたはずが、『468個目』のコアを持っているんだ？

東と・・・『今の』私には世界で二番目の男の操縦者がニュースになった記憶は一切ないぞ？」

「それは・・・」

その先から司は口を開けなかった

自分がイレギュラーである存在のことを言っているのか迷っていたのだ・・・

「・・・・・・・・」

沈黙を続ける司に千冬は最後の問いかけをする

「頼む・・・答えてくれ

私はお前が亡国企業の者だったら敵にならないといけない

お前、何者なんだ？」

最終通告なのだろう

千冬は右腕を突き刺すように構える

その腕には・・・

待機状態IS・・・暮桜がある

「・・・ッ!!」

変な動きでもしたら起動する

ピリピリと感じる殺気

司は覚悟を決め、ゆっくりと答えた

「俺は・・・亡国企業の人間でもこの世界の人間でもありません

俺は・・・いや俺がこの世界に来て、まだ一年も経っていません

詳しいことはまだ言えませんが

けど、信じてください

決して俺は一夏やシャル達、そして何よりも筭の命を守ります」

「待て・・・この世界の人間じゃないだと!？」

そんな馬鹿なことが・・・」

司の言葉に千冬は酷く動揺した

それが本当ならコアの説明も戸籍も記憶の違いも辻褄が合うのだ

「なら千冬さん

誰にも知られていない

亡国企業の人間の本名言いましょうか？

そして学園祭で起こる事件も」

「・・・言ってみろ」

一夏にも伝えてない

いや、IS学園関係の誰一人として言っていない名前だ

「イギリスの第三世代ブルー・ティアーズの後継機
サイレント・ゼフィルスを駆る操縦者M
その名前は『織斑マドカ』」

「なっ!？」

知るはずがない司の言った名前
だが、司はなおも続ける

「学園祭に一夏の白式を狙う亡国企業の襲撃があります
使う手口は剥離剤・・・一度だけISのコアを強制剥離させる兵器
です

対策しといってください」

司はそこまで言うとしくりと立つ

「これ以上は言えません

俺は・・・千冬さんの味方です

一夏を助けるためなら手伝います

だから信じてください」

それだけを言い残して司は部屋を出る
それを千冬は止めなかった

「信じてください・・・か」

その真剣な司の表情は強く千冬の心に残されていた

ザザーン

静かな浜辺に波の音だけが響く

箒は浜辺の岩に座り、静かに月を眺めていた

「箒・・・」

「・・・司か」

司は静かに箒の横に座り込み、彼女の肩に腕を回し、抱き寄せる

「どうした？」

何かあったのか？」

彼の微かな変化に気づいた箒は見上げながら、彼の表情を覗く

そこには何か困っているような瞳が・・・

「箒・・・俺さ、お前に隠してたことがあるんだ

いや、お前だけじゃない・
母さん以外の人全員だ

せめて箒にだけは話しておきたいんだ」

「・・・わかった」

秘密にしていたことに悲しみも怒りもせず、黙って頷いた箒に司は感謝した

「俺は・・・一度死んだ身だ」

「死んだだと!？」

そんなことがあるわけが・・・」

「あるんだよ、神様がな

俺は手違いで死んだ

だからその代わりに俺が望んだ世界転生させてくれることになったんだ

小説で読んだこのISの世界を・・・」

そこで司は言い終え、目を閉じる

箒の反応を待った

彼女は司の胸に顔をうずめながら呟く

「司にとって・・・ここは小説の中の世界なのか？」

「そうだな・・・今はここが現実だけだな」

「お前は・・・私達の未来を知ってるのか？

この世界の物語を・・・」

「ああ・・・知ってた

記憶は曖昧になってきてるが福音戦もクラス代表戦の謎の機体・・・
ゴーレムの乱入も知ってたさ」

「・・・」

互いに口を閉ざし、2人を静かにさざ波の音が響く

しばらくの沈黙

それを破ったのは箒だ

「なんで・・・なぜ言ってくれなかったんだ！？

お前のことだ、どうせ1人でなんとかしようとしたのだろう！」

「ゴメン・・・

言ったらさ、嫌われるかなって思って・・・」

「っの馬鹿者！！」

「つてえ！」

箒は力の限り、おもいきり司の頬を叩いた

司は頬を抑えながら箒を見る

その表情は・・・泣きそうだった

「そんなことで私が嫌いになるか！

私は・・・私は「箒・・・」

司はそこで箒を抱き締める

「ゴメン・・・

本当にゴメン・・・

全部、全部話すから・・・

だから今は我慢しないで」

満月の夜の海岸に少女の泣き声がしばらく響いた・・・

迫られる司、未来を知る箒（後書き）

第三巻終了辺りでやっと司と箒のコンビができた

さてと・・・次回は模擬戦です

模擬戦＋小話（前書き）

今年最後の更新

来年から四巻に突入します

そしてドヤ顔は・・・ムカつきますよね（笑）

模擬戦十小話

「ふふふ、春以来ですわね
こうして司さんと戦うのは」

「そうだな、けど正直今のセシリアは怖いな」

「あら、狙撃の腕は司さんのほうが上ですよ？」

「けど、BT兵器はセシリアのほうが先輩だ」

深緑と蒼海の色 of 機体が互いに狙撃銃と4機のビットを構えながら
対峙する

そして戦いの合図のブザーが鳴った

「奏でますわよ、ブルー・ティアーズ！」

「撃ち落とすぞ、リクルア！」

2機は一気に距離を離れた

一時間前・・・

修学旅行が終わり、1日休みを挟んで登校日・・・
この日は半日だけの授業だった

そこで第二形態になった白式と形態が変わった紅椿にリクルアとの
模擬戦をしようということになった

そこでBT兵器が搭載されたリクルアはセシリアと

白式は対になる紅椿と模擬戦をすることになったのだ

一戦目がリクルアとブルー・ティアーズ戦だ

「行きなさい、ティアーズ！」

四方からティアーズの牙がリクルアを襲う

春とは違い、司が避けた所にピンポイントでレーザーが飛んで来る
受けるわけには行かず、仕方なく瞬時加速で緊急回避する

「頼むぞ、ファグー！」

司の合図に緑の四角いBT兵器が飛び回る

そしてティアーズの攻撃を防ぐ

「防衛兵器!?!」

意外な兵器性能に驚きながらもセシリアは隙を作らず、司の攻撃を

避ける

すでにセシリアはティアーズとの平行射撃を物にしている

だが、さすがにティアーズは動き回るだけで攻撃には回っていただけだった

そして、そこからはまさに位置取り合戦だった

「凄いわね・・・」

「まさに銃撃・・・いや、狙撃戦だな」

「BT兵器搭載型のIS同士の戦いは壮絶だね」

観客席で観戦してる鈴、ラウラ、シャルは夢中になるほど2人の試合を見ていた

司は慣れない平行射撃とセシリアのピンポイント狙撃に決まった一撃を撃つ隙がなく・・・

セシリアは司の防衛型BT兵器によるティアーズの攻撃が通らず、回避性能が高いリクルアに中々一撃が入らない

まさに拮抗した試合だった

「くっ・・・ここだああ！」

司は振り向き際にリクルアを散弾モードで連射した

するとピンポイントで司の後ろに来ていたティアーズが散弾により、
爆散する

そして更に右に残り全弾撃つ

司の横を通過しようとしたがそこを撃ち落とされる

「あと・・・2機か」

「くっ・・・まだですわ」

試合が動き出し、セシリアが焦り出す

正面からセシリアの狙撃が
左右にはティアーズが展開

司は下に避ける

しかし、そこにミサイル型ティアーズが迫っていた

「これは避けられませんわ！」

まさかの三段構え

すでにミサイルは瞬時加速でも避けない距離

だが・・・当たる気はない

司は切り札を使った

「撃ち落とせ、ファグー！」

突如、上からの荷電粒子砲によりミサイル型ティアーズは撃ち落とされる

「なっ、どこから!？」

セシリアは上を見る

そこには2つのファグーが重なり合い、ひし形の砲を形成し、計二門の荷電粒子砲を構えていた

「よそ見は禁物だぜ、セシリア！」

「っ!？」

その言葉にハッと息を呑む

司は既にセシリアの懐に入り、リクレシアを構えている

セシリアは全力でブースターを吹かせ、右に回る

同時に引き金を引く司

側転の要領で回避したセシリアは直撃こそ避けたもののリアスカート

の左側メインブースターを撃ち抜かれ、爆散

地面に叩きつけられるセシリア

「くっ・・・」

「勝負あったなセシリア」

うまく受け身を取り、怪我をしていないが機体のブースターが半壊機能しないまま飛ぶのはいいのだ

「はぁ、司さんのリクルアは早すぎですわ」

「セシリアこそ、さっきの三段攻めは鬼畜だろ

ティアーズが四機あったら避けれるかわからなかったさ」

二戦目

「こうして専用機で戦うのは初めてだな」

「そうだな・・・」

けど、やっとお前とフェアで戦えるな

今まで訓練機だったしな」

幼なじみであり、同じ剣道の門下生

ISでも剣の使い手であり、だからこそ対等な立場で全力で戦ったかった

「感覚はだいぶ取り戻したしな・・・
負けないぜ、箒」

「私だって負けられないさ

司が勝ったのなら、パートナーの私も勝つ

全力で行くぞ」

一夏は左腕のクローモードの雪羅の前に、身体を半身にし、右手の雪片式型はやや下段に構える

箒は左足を軽く引き、雨月と空裂をクロスに構える

「行くぜ、箒！」

「来い、一夏！」

一対のISが今、互いにぶつかりあった

「あ、お疲れ」

「お疲れ、セシリアお姉様」

ビットから戻った司とセシリアは観客席にいる鈴とラウラと合流した

「セシリアお姉様はストレートティーで良かったな？」

ラウラは自販機で買ってきた紅茶のペットボトルを渡し、セシリアはお礼を言いながら笑顔で受けとる

「あれ？俺のいないのか？」

「なぜ、私がお前の飲み物を用意しなければならないんだ？」

さも平然と答えるラウラに司はため息をつく

するとスポーツドリンクが差し出された

「はい、司の分

試合始まるみたいだよ？」

「センキュー、シャル」

司はそれを受け取りながら彼女の横に座る

（こういう気遣いや優しさに惚れたんだろうな、一夏の奴・・・）

彼女の横顔を見ながらそう考えてると視線を感じたのか顔を向けて

きたシャル

「どうしたの、司？」

「いや、なんでもないさ

さあ、観戦しようぜ」

司はパツと表情を切り替えて、フィールドを見た

「吹き飛ば、空裂！」

横一閃に空裂を振り、エネルギー状の斬撃を飛ばす筈

それを一夏は雪羅を瞬時にクローモードからシールドモードに変更

「美しく、いただくぜ！」

そして零落白夜のシールドは斬撃を吸収、自身のシールドエネルギーに変換した

「やはり効かんか・・・」

「これが俺の新しい力だ！」

一夏は雪羅をシールドモードから砲撃モードに

荷電粒子砲を撃つ

箒はすぐさまその場を離脱し、距離を取った

「エネルギー攻撃が効かないなら他で倒すまでだ！」

箒はブースターを吹かせ斬り込む

第四世代であるそのスピードは瞬時加速を使わずとも速かった

「クッ・・・」

右手の上段振り下ろしを雪片式型で塞がれる

それを下からの振り上げと同時に右手を引く

いきなりの拮抗した力の消失と同方向の力の向きの攻撃に雪片を弾かれる一夏

「貰ったあああ！」

「まだだあああ！」

箒はそのがら空きの腹に突きを入れるも咄嗟にねじ込まれた雪羅に塞がれる

一夏は上に弾かれた雪片をそのまま振り下ろす

箒は突きの体制から半身を反らすようにそれを避ける

だが、一夏は間髪入れずタメの少ない荷電粒子砲を入れる

威力の低くともこの零距离の直撃は無視できない

箒はブースターを吹かせ、バク転のようにそれを避け、距離を取る

両者一步も譲らず・・・と言ったところだ

「一夏の奴、射撃のタイミングわかって来たな」

「だね、あんな零距离射撃は誰に教わったんだろうね」

シャルはニツコリ笑いながらラウラを見る

彼女はプイッと顔を反らし、舌打ちする

そんな照れ隠しにみんなは微笑ましく感じた

「同じ近接型の鈴さんは今の2人の戦い、どう思います？」

「そうね・・・手数が多さではやっぱり箒のほうが有利だけど一夏の零落白夜の一撃と雪羅の射撃、シールド、クローの凡庸性は高いし、変換スピードもシャルルの高速切換並みだわ

その雪羅のおかげでなんとか箒の手数に対抗してると思うわ」

「エネルギー兵器が効かない上、通常の攻撃も防ぎ、近接、射撃も行う雪羅・・・なんとも、まあ厄介だな

セシリアお姉様からすれば攻撃オプションがない天敵だな」

ラウラの意見にセシリアはガックリと肩を落としていた

「まあ、セシリア

アイツと戦う時は雪羅に塞がれないように戦えばいいさ」

「無理難題を軽く言わないで欲しいですわ・・・」

深いため息を吐くセシリアに司は苦笑した

（クッ、ガードが固い）

死角からの雨月の射撃

しかし一夏はそれを咄嗟に反応
雪羅で吸収する

エネルギー兵器は当たれば通常攻撃よりも高いダメージを与えるこ
とができる

だが当たらなければ奴のシールドエネルギーを回復してしまうのだ

（シールドエネルギーも少ない・・・）

見れば自分のシールドエネルギーは残り500を切っていた

（・・・よし、あれで決めよう

反撃の隙も与えずに沈める！）

「一夏！

これが私の新しい力だ！

応えてくれ、紅椿！

『絢爛舞踏』発動！」

その声と同時に紅椿は金色の粒子に包まれた

「何ですの、あれ一体!？」

「なんか、一夏の零落白夜使用時みたい」

箒のいきなりの変化にセシリアやシャルは声を上げ、鈴やラウラは声こそ上げなかった物の席を立ち、箒を動揺した

そんな中淡々とした表情で司は語る

「あれは『絢爛舞踏』

紅椿のワンオフ・アビリティーだ」

「ワンオフ……アビリティー……あれが」

鈴は金色の輝く紅椿を見ながらポツリと呟く

「白式が一對零のエネルギー消滅型

紅椿は白式の対の存在であり、一対百の存在
ラウラ、わかるだろ？」

「エネルギー・・・増幅型か？」

「そう・・・シールドエネルギーを全回復させる能力だ

シャルミみたいな実弾しかないISには天敵でしかない

倒すには再び絢爛舞踏をやられる前に倒すしかない」

改めてIS操縦者という立場から実感した司はそのチート並みの高性能差に呆れてしまった

（ありがとう、紅椿・・・）

箒は心の中でそっと愛機に礼を述べると、眼前の幼なじみを見据える

『一夏・・・私の本気の攻撃で行く

容赦はしない、反撃すら与えずに倒す！』

『なら、俺も全力で行く

シールドエネルギーなんて気にしない・・・短期決戦だ』

一夏は雪片式型から零落白夜を展開し、雪羅をクローモードにする
箒は雨月と空裂を構え、2機のソードビットを展開する

「・・・・・・・・」

しばらくの沈黙

そして・・・箒から仕掛けた

「はぁあっ!!」

空裂を振り下ろす

しかし零落白夜で受け止められるが箒は構わず、雨月で突きを放つ
がクローモードの雪羅に止められる

そこに左右からビットが一夏に迫る

「クッ!!」

一夏は箒を押し出し、距離を取り、身を捻るようにビットを避けた
そして再び箒の方を向いた瞬間、眼前に紅い帯状のエネルギー刃が
迫っていた

「ぐわあ!!」

避けることができず直撃を喰らう一夏

だが、箒のラッシュは続く

吹き飛んだ一夏に迫り、身体の捻りを加えた下からの振り上げ

一夏は咄嗟に雪片でガードする

しかし力負けし、雪片式型が弾き飛ばされる

そこにシールドビットが背後から刺され、両肩の装甲が爆発する

「終わりだ!」

「雪羅っ!」

箒の雨月の突きと一夏の雪羅のシールドがぶつかる

キィインと高い金属音が響き、互いの武器がぶつかる

「紅椿!」

箒の掛け声と共に背部の装甲が変化し、メインブラスターが二門の大型ブラスターに変わる

そしてそれを吹かし、雪羅を貫こうと推していく

「く・・・負けるか、白式!」

一夏も推力最大にし、対抗していく

すると突如、白式に変化が起きる

『ピー、ピー！』

「なんだ!？」

いきなりの警告音に白式のモニターを見る一夏

そしてエネルギー残量が見た瞬間、一夏は顔をしかめた

「ヤバい、シールドエネルギーが！」

見れば雪羅の零落白夜もみると小さくなっていく

その変化に気づいた箒は更に勢いをつける

「雨月っ！」

最後の一撃と思い、力を振り絞る

そして雪羅の零落白夜が消えた瞬間、箒は吠えた

「貫徹ええっ!!」

一夏の白式は紅のレーザーにより、アリーナの壁まで吹き飛んだ

「イテテッ！」

「一夏、我慢して」

模擬戦が終了し、一同は保健室に来ていた

二戦目は箒が勝ったが、負けた一夏が装甲中破で軽く擦り傷など負い、ここに寄ったのだ

「すまん、つい熱くなってしまって・・・」

「いいって、久しぶりに箒と全力で戦えて楽しかったしな
小学校振りか・・・こうして本気で戦ったのは」

一夏が満足そうに笑顔を浮かべ、箒もつい微笑んだ

「むう・・・一夏！

少しはエネルギー残量に気をつけてっていつも言ってるでしょ！」

「イッテッ！」

パシンと腕の傷口にビンタで絆創膏を貼るシャル

そんなシャルにセシリアはクスクス笑う

「あら、シャルルさん
嫉妬してるんですの？」

「なっ!？
そんなんじゃないってば！」

「けど、明らかに箒と一夏の雰囲気嫉妬してるわよ」

「ああ、行動に出てたな」

「鈴やラウラまで！」

シャルが真っ赤になりながら困った顔になる
そこでシャルは矛先を変えようとした

「だったら、司だって嫉妬してるに決まってるよ！」

「ん？俺が嫉妬？」

シャルの声に司はニヤリと笑う

そしてスタスタと箒に近寄ると・・・

「幼なじみの会話中すまんな」

「どうしっ・・・んっ!？」

司は振り向いた箒にいきなりキスをする
しかも逃げないように頭を抑え、舌を絡ませる深いキスだ

周りの一同はそんな深いキスに顔を真っ赤にしながらも目を釘付けにされ、顔を反らすことができなかった

「んっ・・・ふっ・・・ふうはわ・・・」

タツプリと深いキスを終えると箒は腰が抜けたかのように膝を折り、息切れしながら司に持たれかかる

目はトロンとし、顔は火照っている

「こんなに俺に染まってるんだぜ、それくらいじゃ俺は嫉妬しないさ
さてと・・・先に部屋帰るわ
んじゃ、またな♪」

箒を抱きかかえ、保健室を出ていく2人

「・・・あの2人を対象にするのは間違ってるわね」

「同感ですわ・・・」

「司は恥ずかしくないのか？」

「ないのだろうな・・・最早見せつけていると思えん・・・い

や、そうなのだろう」

驚きを通りすぎ、もはや呆れている4人

そして・・・

「あの余裕なドヤ顔はなんなのさー!!
いつか、余裕をなくした司を見せるもん!」

シャルは激しく愚痴っていた・・・

模擬戦＋小話（後書き）

さて・・・今回の話に学園祭の布石が・・・

そして年末最後として司簿のイチャラブを入れて、締めにしました

小説開始から初の年越し（前書き）

反省と今後の説明とお知らせ

小説開始から初の年越し

あけましておめでとうございます

さて・・・

『ISは狙撃専門ですが？』

10月からスタートし、意外にも人気が出たことに驚きの自分

本来、司がシャルとくつつきイチャイチャする予定が書いてるうちに箒との絡みが多く・・・

結果、箒とくつつけてしまった

しかし、一シャルは好きなんで早期でカップリングを完成させました

しかし、一シャルが少ないので今年は少しずつ増やしていこうと思います

今年は・・・オリサブ男性キャラを出し、同時に海奈・・・神の物語を終わらせます

そして、一度司を落とします

頑張っていくんで応援お願いします

それと1月下旬から2月は少々忙しいので更新速度が低下しますの
で、ご了承を・・・

思い返してみても・・・（前書き）

四巻のラウラの私服買い物辺り

思い返してみて・・・

「買い物か？」

「ああ、一緒に行かないか？」

「ふむ・・・今日は予定が入ってないし、いいだろう」

夏休みに入ったとは言え、シャルは帰国しても帰る家はなし、一夏も帰っても待っているのは家の掃除だし、帰る日程もまだ先
ラウラは帰ってもあるのは軍の宿舎

そんなこんなでそれぞれ理由があるようでIS学園の食堂もそれなりに生徒はいる

3人は朝食を摂りながら、今日の予定を話していた

ちなみに3人のメニューは・・・

一夏が鯖の味噌煮定食

シャルはマカロニサラダとトースト、ヨーグルトの軽食

ラウラはシャルのメニューに加え、ステーキだ

「ところで2人ともよくそんなに食べるね・・・
胃がもたれない？」

一夏の大盛りご飯とラウラのステーキを見ながらシャルがげっそりする

「何を言うんだ？」

朝起きた時、身体はエネルギー0の状態から始まるんだぜ？
だから・・・」

「朝一番のエネルギー摂取の朝食は1日を活動する分を含め、一番多く食べなければならない」

「確かに夕食を一番食べる人は多いが、それだと後は寝るだけで消化されても消費はされずに脂肪になるだけだぞ？」

「太りたいなら別だがな」

「息ぴったりで言わないでよ・・・」

シャルは頬を軽く膨らませる
軽く嫉妬したみたいだ

「そう不機嫌になるなって

最近、ラウラが料理の教えを請いに来ててな」

「一夏から教わったのは全て覚えてる

料理の師は一夏だ」

2人して腕を組む姿はまるで師弟だ

そんな姿につい、シャルは微笑みを浮かべた

「ラウラの手料理、楽しみにしてるね」

「おう、まかせておけ」

ラウラは自信満々に宣言した

「ラウラ・・・軍服以外に服はないの？」

「今まで軍服と制服以外来たことがないのでな・・・」

シャルがラウラの部屋に迎えに行ったが、出てきたのは黒い軍服を来たラウラだった

さすがにシャルは頭を抱えざる得なかった

「ラウラ・・・制服に変えて来て

日本で軍服は目立つし、ここは他国だよ？」

「そうか、そうだったな」

再び部屋に戻るラウラにシャルはため息をつくしかなかった

「あれ？ラウラは私服じゃないんだな」

「私服持っていないだってさ」

だから先にラウラの私服を買いに行くよ、一夏」

「わかったよ」

駅前行きのバスの中で一夏とシャルはパンフレットを見ながら段取りをする

そんな中ラウラはふと、バス内にいる同年代の女子高生グループの会話が耳に入る

「わぁ・・・あの金髪と銀髪の子、凄く綺麗」

「金髪の隣にいる人も結構イケメンよ・・・」

「あの銀髪の子が着てるのは制服？見慣れないけど・・・」

「ばっ！あれはIS学園のカスタム自由の制服よ！

倍率一万を越える国家クラスのエリートしか入れないのよ！」

「頭良くて、綺麗で格好いいなんて・・・ズルい」

「神様なんて不公平よ」

（神か・・・確かに不公平だな）

思い出すのは試験管から自分を見る科学者達

そして毎日のように地獄の訓練

普通の人間として生まれなかった自分は確かに不公平だろう

聞けば自分の周りの友人もそうだ

シャルは自らの親に人としてではなく、会社の駒、道具として扱われる

一夏の親は自らの子供を捨て、自分達の趣味を優先させたらしい

セシリアは両親は他界し、遺産目的の親族から必死に親の遺産を守る貴族

鈴は離婚した親を経済的に苦しい状況を打破するため、国家代表候補生にまで登りつめる努力をしてきた

（普通に両親がいて、普通に学生生活を送れる彼女達もちよつと羨ましいな）

普通の女子に憧れたラウラ

(だが、後悔はしていない)

隣を見れば、自分のために店を探す大切な友

もし自分がこのIS学園に来てなかったら・・・

あの傲慢な自分のままだったら・・・

きっと今のような時間を過ごすことはなかっただろう

そう思うと司の姿を思い出す

(反撃の一撃すら与えず、完膚なきまでプライドを潰してくれたからか・・・)

傲慢でつまらないプライドを潰し、一夏との和解を促した司

今でもムカつくが大切な事を気づかせ、大切な友との出会いのきっかけを作ってくれたことには感謝した

「どうしたのラウラ？」

「ぼーと、こっち見てるけど？」

「ん？・・・いや、なんでもないさもう着くみたいだぞ？」

「そうみたいだな、降りるか」

ラウラは先頭に行く2人に着いて行く

（帰ったら名前で呼ばせるくらいは許すか・・・）

司の顔を想い浮かべながらラウラはフフツと微笑んだ

夏祭り 前編（前書き）

今回は箒視点で・・・

夏祭り 前編

「何も変わっていない・・・か」

8月のお盆・・・自分は元々住んでいた篠ノ乃神社に来ていた

板張りの剣道場

今では退職した警察官が善意で開いてるらしい

壁にある名札を見て、思い出を思い返す

何回負けても勝負を挑んでくる一夏

手加減してあしらう自分

（フフツ・・・昔は本当に愛想のない子供だったな）

何をしても冷たくあしらう

喧嘩を売られても倍返しでお見舞いしてやった

冷やかしても無視する

だが、そんな虐めを熱血バカのように殴り倒した幼なじみがカッコよかった

そんな幼なじみに惚れてた自分

だけど・・・

開くのは携帯の待ち受け画面

そこには司とのツーショット写真

それを見ては吹っ切れた気持ちになった

するとカタンと音がし、振り向けば見知った人が・・・

「ここにいたの、箒ちゃん」

「懐かしくて、つい

久しぶりです、雪子叔母さん」

「懐かしみたくなるわよね

元々、自分達が住んでたところですよ」

楽しそうに微笑み姿は昔と全く変わっていなく少しばかり安心する

「でも良かったの？」

夏祭りのお手伝いなんてして」

「ご迷惑でしょうか？」

「そんなことないわよ、大歓迎だわ！

けど、せっかくの夏祭りなんだし誘いたい男の子の一人くらいいるんじゃないの？」

「そんなことは・・・」

ポツと頬を赤くし、その脳裏に映るのは当然司の笑顔

そんな反応だけで雪子は納得したみたいだ

「それじゃご厚意に甘えましょ

6時から神楽舞だから、今のうちにお風呂に入ってちょうだい」

「はいっ！」

箒はそのまま家に入り、廊下を歩いて行く

全く変わってない造りを見て、ふとこの家を出た理由を思い出した

（あの人がISなんて作らなければ・・・）

そうすれば普通に暮らし、一夏と結ばれたかもしれない

「けどIS学園に行けたからこそ・・・」

自分を大切に愛してくれる人と出会い

そして初めてわがママを言ったのに対し、姉は嬉しそうに答えてくれた

しかし、あの臨海学校での司と姉のやり取り

姉は・・・司を認めてくれていなかった

姉を許したいのか・・・

それとも姉を断じたいのか

（私は・・・どうしたいのか・・・）

箒は悩みを振りほどくかのように首を振ると檜でできた風呂の浴槽に身を沈める

「ふう〜、気持ちいい・・・」

暖かい浴槽の中で体を伸ばす度に、気分が和らぎ、気持ちが落ち着いていく

「物語の中の私達・・・二度目の人生か」

しばらくぼおーとしてるうちに先月の事を思い出す

I S 学園に帰り、寮の室内で話してくれた司の経緯を・・・

自分たち、この世界が司がいた世界では架空の物語ということ

司自身が一度死んだ身だということ

新学期のキャノンボールまでの未来を知っていること
全てを話してくれた・・・

（司・・・）

自分の恋人を想いながら、まどろみに意識を預ける

結局、箒がお風呂から上がったのは一時間後だった

(ふう・・・)

神楽舞を終えた箒は一息つき、舞台から降りる

「おつかれ様、箒ちゃん」

「ありがとうございます」

雪子からお茶の入ったコップをもらい、礼を言う

「これからどうするの？」

夏祭り、回ってくる？」

「そうですね・・・巫女服に着替えてお守り販売を手伝ってきますよ
回る人もいませんし」

司には夏祭りのことは伝えてないため当然いない

そう思っていたのに・・・

「よっ、おつかれ!」

「な・・・なっ・・・なんでっ!？」

気軽に声をかけてきたのは自分の愛する人

だが、いないと思っていた司の登場に頭の中が真っ白になり、パニックに陥る

「箒ちゃん、彼氏がいるなら教えてくれればよかったのに・・・」

「いえ、僕も今日用事がありまして来れると思っていませんでしたので」

「あら、そうなの？」

けど、これで夏祭り回る相手がいるわね!

さあ、箒ちゃん着替えるわよ!」

「えっ・・・あっ」

雪子叔母さんに強引に連れていかれる

向かうのはお風呂場

「ちゃっちゃと汗を流しちゃいなさい
今、浴衣持ってきてあげるから」

「あ・・・はい」

言われるがまま、お風呂に入る

そして桶で掬った湯を頭から被った

「・・・夢だ、これは夢に決まっている！」

頭をブンブン横に振る

すると紅椿のプライベートチャンネルが開いた

そして聞こえたのはさっき会った司の声

『箒、 「夢だ」とか言って現実逃避してないか？
ちゃんと現実だぞ』

・・・こいつはエスパーか何かなのだろうか

もしくは覗きか？

思わず覗いてるかと思い、つい窓を見るが閉まっている

「なんで夏祭りだと知っているんだ？
教えた記憶はないんだが」

『忘れたのか？』

俺は未来を知ってんだぞ』

その言葉にすーと熱が下がり、冷静になった

ため息をつき、浴槽に浸かる

「はぁ・・・いつから来てたんだ？」

『うーん？』

神楽舞だっけ？

それが始まったあたりからかな

綺麗だったよ、箒

いつも違った雰囲気で大人っぽかったぜ』

「そっ、そうか・・・」

司の褒め言葉を嬉しく感じた

そう思うと最初から誘っておけばよかったとちよっぴり後悔した

すると風呂場のドアから声を掛けられた

「箒ちゃん、浴衣ここに置いてくけど一人で着れる？」

「着れます！」

自分の声が風呂場に響く

そしてタイミングを図ってたかのように雪子の気配が消えたのと同じ時に司の声が響く

『神社の入り口で待ってるから・・・』

あと一夏とシャルもいるからな』

「わかった」

返事し、プライベートチャンネルが切れた

それを確認した箒は浴槽から上がり、風呂場から出る

「一夏達も来てたのか・・・」

一夏がこの夏祭りを覚えていたのことに少し嬉しさを覚える

「そういえば夏祭りに・・・」

思いつくのは日本人にしては珍しい赤髪・・・

その兄妹・・・

確か妹も一夏を好きな女子の一人だ・・・

そして今日は一夏の”彼女”であるシャルが来ている

「たぶん・・・いや確実に問題が起きる」

箒は手慣れた手つきで浴衣に着替えながらもため息をつく

高校生になってからトラブルとかに巻き込まれるのが増えているのは気のせいかと思いたかった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5339x/>

I S インフィニット・ストラトス 〈I Sは狙撃専門ですが?〉

2012年1月8日16時50分発行